

山海鯨跡群第2次  
山楯7・8遺跡  
山楯楯跡  
発掘調査報告書

国営農地開発事業鳥海南麓地区(2)

1992

東北農政局  
山形県教育委員会

さん かい  
山海窯跡群第2次  
やま だて  
山楯7・8遺跡  
やま だて  
山楯楯跡  
発掘調査報告書

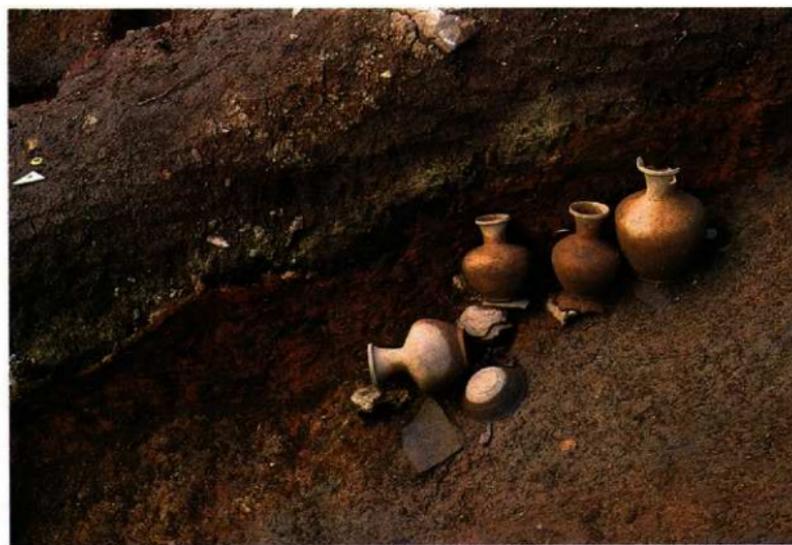
国营農地開発事業島海南麓地区(2)

平成4年3月

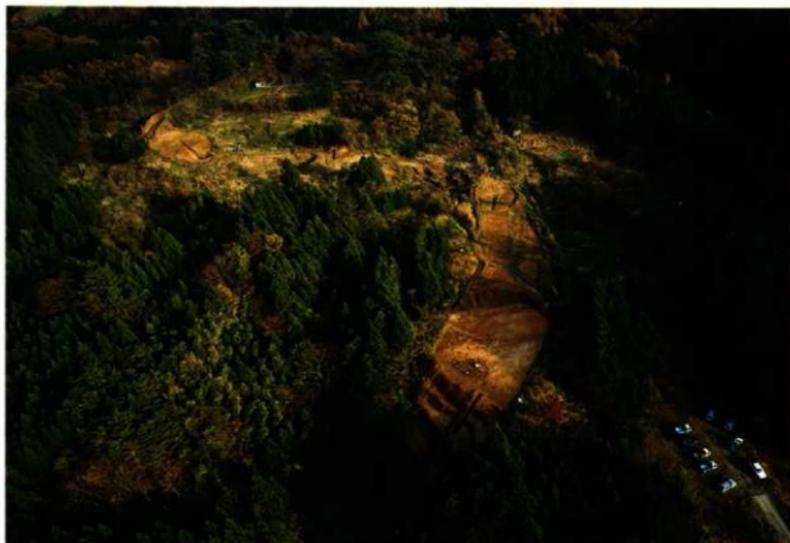
東北農政局  
山形県教育委員会



山海窯跡群SQ11窯跡遺物出土状況(南西から)



山海窯跡群SQ11窯跡遺物(左から第27図1・6・2・4)出土状況(東から)



山樞樞跡調査区空中写真(西から)



山樞樞跡C地区土壘(SF6)土層断面



山橋榑跡出土遺物(青磁碗・皿) 実測図掲載



山橋榑跡出土遺物(青磁碗)



山樞樞跡出土遺物(青磁皿・底部)



山樞樞跡出土遺物(白磁・朝鮮系陶器・瀬戸・染付)

## 序

本書は、平成3年度に山形県教育委員会が発掘調査を実施した山海窯跡群、山橋7・8遺跡、山橋橋跡の調査成果をまとめたものです。

上記の遺跡は、山形県の北西部、日本海側に位置する飽海郡平田町にあります。町の東部は山々が連なる丘陵地帯で、その谷合には随所に水田灌漑用の溜池が造られています。池の周辺部の傾斜地及び山麓部には、以前から土器の散布がみとめられ、これまで何回か調査が行われた結果、土器生産に関する古代窯跡群の分布地域として確認されてきました。また、山林内には、土塁や堀跡がみとめられ中世城郭の所在も注目されます。

調査では、古くは縄文時代の遺構・遺物、平安時代の登窯跡群及び窯業に関する施設、さらに中世城郭の構造及び遺物群が発掘されるなど、多岐にわたる貴重な成果が得られました。

埋蔵文化財は私たちの祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な国民的財産であり、一度壊してしまえば二度と元に戻らないものです。調査により明らかにされた遺跡は過去の生活の有様を彷彿と再現してくれるものです。祖先の歴史を学ぶとともに愛護し子孫へと保存し伝えていくことが、現代に生きる私たちに課せられた重要な責務といえるでしょう。

山形県教育委員会では、「心広くたくましい県民の育成」と地域文化の環境作りという立場から、今後とも県民福祉の向上を目的とした地域社会の整備と調整をはかりながら、埋蔵文化財の保護に努力を続けていく所存であります。

本書が埋蔵文化財に対する保護思想の普及もかねまして、皆様のご理解の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査においてご協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成4年3月

山形県教育委員会教育長 木場清耕

## 例 言

- 1 本書は農林水産省東北農政局の委託を受けて、山形県教育委員会が平成3年度に実施した「国営農地開発事業島海南麓地区」にかかる、「山海窯跡群第2次 山楯7・8遺跡 山楯榑跡」の緊急発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地  
山海窯跡群 山形県飽海郡平田町大字山谷新田字山海  
山楯7・8遺跡 山形県飽海郡平田町大字山楯字南山  
山楯榑跡 山形県飽海郡平田町大字山楯字北山
- 3 調査期間  
山海窯跡群 自 平成3年5月7日～至 平成3年12月6日(延141日間)  
山楯7・8遺跡 自 平成3年6月3日～至 平成3年11月27日(延37日間)  
山楯榑跡 自 平成3年7月22日～至 平成3年11月22日(延78日間)
- 4 調査体制  
調査主体 山形県教育委員会  
調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団  
調査担当者 事務局長補佐 佐々木洋治(調査担当)  
山海窯跡群担当  
調査班長 名和達朗  
主任調査員 伊藤邦弘  
調査員 水戸弘美  
山楯7・8遺跡・山楯榑跡担当  
主任調査員 長橋 至  
調査員 氏家信行・眞壁 建  
事務局 事務局長 土門紹徳  
事務局長補佐 田苗健太郎(庶務担当)  
庶務班長 野尻 侃  
主任事務員 新関紘子・賈間秀男・永井健郎・渋江正義
- 5 調査においては、東北農政局島海南麓開拓建設事業所・平田町農林課・平田町教育委員会・島海南麓地域農地開発事業協議会・県農地計画課・県農地建設課・庄内支庁島海南麓農地開発推進室・庄内教育事務所など関係機関、並びに地元平田町・酒田市の方々の御協力を得た。ここに記して感謝申し上げます。
- 6 本報告書の作成はI～III章を名和達朗・水戸弘美が、IV・V章を長橋 至・氏家信行・眞壁 建が担当した。編集は安部 爽及び各担当者が当たり全体を佐々木洋治が総括した。
- 7 写真測量、石器の写真実測は、シン航空写真株式会社、考古地磁気年代測定は、株式会社パレオ・ラボにそれぞれ委託したものである。
- 8 現地調査と報告書の作成にあたって、つぎの方々からご指導とご助言を賜った。記して感謝申し上げます。栗原文蔵・川崎利夫・佐藤濱宏・山口博之・酒井英一・松岡 進・秋保 良(順不同・敬称略)

## 凡 例

1 本書で使用した遺構の分類記号は下記のとおりである。

SQ	……竃跡	ST	……住居跡	SF	……土塁	SK	……土塼
EL	……カマド	SD	……溝跡	SB	……掘立柱建物跡		
EP	……ピット	SP	……小穴	SA	……柵列状遺構		

2 遺構番号は、山海竃跡群、山橋7・8遺跡は現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。山橋橋跡については整理段階に新たな番号を付した。

3 報告書執筆の基準は下記のとおりである。

- (1) 遺跡全体図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。なお、山海竃跡群、山橋7・8遺跡のグリッドは工事用杭を基線とし、南北軸は、N-7'16"-Eを測る。山橋橋跡のグリッドは路線内センター杭No14・15を基線とし、南北軸は、N-0'50"-Eを測る。
- (2) 遺構実測図は1/40・1/60・1/200・1/300・1/400縮図で採録し、各挿図毎にスケールを付した。
- (3) 第14図～第17図遺構実測図中のスクリーントーンは焼壁土塼の被熱面を示す。
- (4) 土層観察において、山海竃跡群、山橋7・8遺跡を覆う基本層序をローマ数字と算用数字で表し、遺構覆土については、算用数字のみで表した。山橋橋跡については、基本層序をローマ数字で、盛土・整地層を算用数字で表し、旧表土は①②…で、基盤層はアルファベットでそれぞれ表した。
- (5) 遺構計測表中の( )内の数値は、現存部分の計測値を示している。
- (6) 出土遺物の器種分類は、黒色処理、ミガキのある土器は土師器、酸化焰焼成の土器は赤焼土器、還元焰焼成の土器は須恵器とした。
- (7) 遺物実測図・拓影図は原則的に1/1・1/1.5・1/2・1/3で採録し、実測図については各々スケールを付した。遺物図版については、山海竃跡群は任意の縮尺とし、その他の遺跡については1/1.5・1/2・1/3を基本とした。
- (8) 土器・陶磁器の断面のみ実測したものについては、右側に外面を左側に内面を示した。
- (9) 遺物実測図中の丸印は、赤焼土器を示している。
- (10) 出土遺物計測表中の( )内の数値は、図上復元による推計値を示している。
- (11) 基本層序及び遺構覆土の色調の記載については、昭和45年度版農林省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に拠った。
- (12) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物計測表・遺物図版ともに共通したものとした。

# 目 次

第I章 調査に至る経過	1
第II章 遺跡の立地と環境	1
第III章 山海窟跡群	
1 遺跡の概要と調査の経過	4
2 遺構と遺物	
(1) 遺構	13
(2) 遺物	35
3 まとめ	59
第IV章 山橋7・8遺跡	
1 山橋7遺跡	61
2 山橋8遺跡	61
(1) 調査の経過と検出された遺構	61
(2) 出土した遺物	62
第V章 山橋榑跡	
1 遺跡の立地と歴史的環境	73
2 調査の経過	76
3 遺跡の概要	76
4 検出された遺構	79
5 出土した遺物	100
6 まとめ	103
附 編 「山海窟跡群（2次調査）における考古地磁気年代測定」	

## 表

表-1 周辺遺跡一覧	3
表-2 山海窟跡群遺構計測表（1）	53
表-3 山海窟跡群遺構計測表（2）	53~54
表-4 山海窟跡群出土遺物観察表	54~58
表-5 山橋8遺跡石器計測表	72
表-6 庄内城跡群一覧	75
表-7 山橋榑跡遺構計測表	105

## 插 圖

第1圖	遺跡位置圖 .....	2
第III章 山海窯跡群		
第2圖	調查區概要圖 .....	5
第3圖	F調查區遺構配置圖 .....	7
第4圖	E・G調查區遺構配置圖 .....	9
第5圖	I調查區遺構配置圖 .....	10
第6圖	E・F・G・I調查區基本層序 .....	11
第7圖	F調查區SQ6 a・SQ6 b窯跡 .....	15
第8圖	E調查區SQ7窯跡 .....	17
第9圖	G調查區SQ8窯跡 .....	19
第10圖	I調查區SQ9窯跡 .....	21
第11圖	I調查區SQ10窯跡 .....	23
第12圖	I調查區SQ11窯跡 .....	25
第13圖	I調查區SQ12 a・SQ12 b窯跡 .....	27
第14圖	F調查區SQ5窯跡 SK8・9燒壁土壇 SK10・19土壇 .....	29
第15圖	F調查區SK17・18・96燒壁土壇 SP42柱穴 .....	30
第16圖	F調查區15・16-15・16・17G 土壇・柱穴群 .....	31
第17圖	F調查區SK29 a・29b燒壁土壇 SK80・193粘土採掘坑 .....	33
第18圖	I調查區SK4・5・6・7・9土壇 .....	34
第19圖	F調查區SQ5窯跡出土遺物 SQ6 a・SQ6 b窯跡出土遺物(1) .....	36
第20圖	F調查區SQ6 a・SQ6 b窯跡出土遺物(2) .....	37
第21圖	E調查區SQ7窯跡出土遺物(1) .....	38
第22圖	E調查區SQ7窯跡出土遺物(2) G調查區SQ8窯跡出土遺物 .....	39
第23圖	I調查區SQ9窯跡出土遺物(1) .....	40
第24圖	I調查區SQ9窯跡出土遺物(2) SQ10窯跡出土遺物 .....	41
第25圖	I調查區SQ11窯跡出土遺物(1) .....	42
第26圖	I調查區SQ11窯跡出土遺物(2) .....	43
第27圖	I調查區SQ11窯跡出土遺物(3) .....	44
第28圖	I調查區SQ11窯跡出土遺物(4) .....	45
第29圖	I調查區SQ11窯跡出土遺物(5) .....	46
第30圖	I調查區SQ12 a・SQ12 b窯跡出土遺物 .....	47
第31圖	F調查區SK2・24・25土壇、SK17・18・29燒壁土壇出土遺物 .....	48
第32圖	F調查區SK78・79・80・93・101土壇、SK96燒壁土壇出土遺物 .....	49
第33圖	F調查區SK103・104燒壁土壇、SK102土壇出土遺物 .....	50
第34圖	F調查區SK105・107・119・125・127燒壁土壇、 SK110・187・196・198土壇、包含層出土遺物 .....	51
第35圖	F調查區包含層出土遺物 I調查區SK4・5・6・7・8・9 土壇、包含層出土遺物 .....	52

第IV章 山橋7・8遺跡	
第36図	山橋7・8遺跡調査区概要図 ..... 63
第37図	山橋8遺跡A地区遺構配置図・エレベーション ..... 65
第38図	山橋8遺跡B地区遺構配置図・エレベーション ..... 66
第39図	山橋8遺跡ST1住居跡・SK2・3落し穴 ..... 67
第40図	山橋8遺跡出土遺物(1) 石鏃・石匙・筥状石器・石槍 ..... 68
第41図	山橋8遺跡出土遺物(2) スクレイパー・磨製石斧 磨石・凹石・敲石 ..... 69
第42図	山橋8遺跡出土遺物(3) ST1 ..... 70
第43図	山橋8遺跡出土遺物(4) ST1・包含層 ..... 71
第V章 山橋橋跡	
第44図	庄内城館跡分布図 ..... 74
第45図	山橋橋跡調査区概要図 ..... 77
第46図	山橋橋跡A1地区全体図 ..... 81
第47図	山橋橋跡A2地区全体図 ..... 82
第48図	山橋橋跡A2地区d-d'土層断面 ..... 83
第49図	山橋橋跡B3~4地区全体図 ..... 84
第50図	山橋橋跡B3地区b-b'土層断面 ..... 85
第51図	山橋橋跡B4~5地区全体図・土層断面 ..... 87
第52図	山橋橋跡B5~C6地区(第53図e-e')土層断面 ..... 89
第53図	山橋橋跡C6地区全体図 ..... 91
第54図	山橋橋跡C6地区SF6土塁全体図・土層断面 ..... 93
第55図	山橋橋跡C6地区SF6土塁土層断面 ..... 95
第56図	山橋橋跡D8地区全体図・土層断面 ..... 97
第57図	山橋橋跡D8地区d-d'土層断面 ..... 99
第58図	山橋橋跡出土遺物(1) 須恵器・青磁・白磁 朝鮮系陶器・瀬戸・かわらけ ..... 101
第59図	山橋橋跡出土遺物(2) 珠洲・越前系陶器・瓦器・るつば・砥石 ..... 102
第60図	山橋橋跡縄張図 ..... 104
第61図	阿部正己氏作成山橋橋跡縄張図 ..... 106

## 図 版

巻頭図版1	山海窩跡群SQ11窯跡遺物出土状況 山海窩跡群SQ11窯跡遺物出土状況
巻頭図版2	山橋橋跡調査区空中写真(西から) 山橋橋跡C地区土塁(SF6)土層断面
巻頭図版3	山橋橋跡出土遺物(青磁碗・皿)実測図掲載 山橋橋跡出土遺物(青磁碗)
巻頭図版4	山橋橋跡出土遺物(青磁皿・底部) 山橋橋跡出土遺物(白磁・朝鮮系陶器・瀬戸・染付)

### 山海竈跡群

- 図版1 空中写真 遺跡遠景  
図版2 E・F調査区全景  
図版3 G・I調査区全景  
図版4 E・F・G・I調査区基本層序  
現地説明会風景  
図版5 掘入れ式風景  
E・F・I調査区調査風景  
図版6 SQ6a・SQ6b竈跡  
図版7 SQ6a・SQ6b竈跡  
図版8 SQ7竈跡  
図版9 SQ8竈跡  
図版10 SQ9竈跡  
図版11 SQ10竈跡  
SQ10・11竈跡  
図版12 SQ11竈跡  
SQ10・11竈跡完掘  
図版13 SQ12a竈跡  
図版14 SQ12b竈跡  
図版15 SQ5竈跡  
SK8・9・29a・29b・107a・119  
焼壁土壌・SK107b土壌  
図版16 SK17・18・96焼壁土壌  
SK29・101・106・107・109・105  
焼壁土壌・SD120溝跡・SK10・26・  
112・131土壌・SP33柱穴  
図版17 SK193・78・80粘土探掘坑  
I調査区SK4・5・6・7・9土壌  
I調査区第18図B-B'断面  
I調査区SK6-EL半截  
図版18 山海竈跡群出土土器(1)  
図版19 山海竈跡群出土土器(2)  
図版20 山海竈跡群出土土器(3)  
図版21 山海竈跡群出土土器(4)  
図版22 山海竈跡群出土土器(5)  
図版23 山海竈跡群出土土器(6)  
図版24 山海竈跡群出土土器(7)  
図版25 山海竈跡群出土土器(8)  
図版26 山海竈跡群出土土器(9)

### 山橋7・8遺跡

- 図版27 山橋8遺跡A・B地区  
図版28 ST1住居跡  
図版29 SK2・3落とし穴  
山橋7遺跡A・B地区  
図版30 山橋8遺跡出土遺物(1)  
図版31 山橋8遺跡出土遺物(2)  
図版32 山橋8遺跡出土遺物(3)  
図版33 山橋8遺跡出土遺物(4)  
山橋橋跡  
図版34 周辺部空中写真・遺跡遠景  
主郭部・周辺環境  
図版35 調査区空中写真  
A地区調査前・完掘・土層断面  
図版36 B3地区調査前・表土除去・土層  
断面・B4地区西側曲輪完掘  
図版37 B地区調査前・調査風景  
B地区遺構検出・完掘状況  
B5地区SA3・SD149完掘・土層  
断面・B地区完掘空中写真  
図版38 C6地区調査前・遺構検出・完掘・  
B5-C6間断面・SK315土層断  
面・かわらけ出土状況  
図版39 SF6土塁全景・断面・C-7地  
区調査前・完掘・C7-C6間断  
面・土風炉出土状況  
図版40 D地区調査前状況・西曲輪断面  
SB7土壇土層断面  
掘入れ式・現地説明会風景  
図版41 山橋橋跡出土遺物(1)  
図版42 山橋橋跡出土遺物(2)  
図版43 山橋橋跡出土遺物(3)

## 第I章 調査に至る経過

庄内平野の東部丘陵地帯には、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）の分布がみとめられ、縄文時代の集落跡や古代の窯跡及び中世の橋跡等が確認されている（「山形県遺跡地図」山形県教育委員会編 昭和53年刊）。

ここに国営農地開発事業・島海南麓地区が計画され、県教委では、遺跡と同開発事業との調整をとるため、昭和60年度から遺跡詳細分布調査を行った。まず、60・61年度は地区内の現地踏査を行い、遺跡の所在・範囲等の確認を進め、次いで平成元年度から3年度は、より詳細な現況把握のため、平田町管内の「山橋工区」、「第1号幹線道路(A)」、「第2号幹線道路(B)」について試掘調査を実施した。

その結果、山橋工区では「山海窯跡群」及び「山橋7・8遺跡」、第1号幹線道路(A)では「山橋橋跡」、第2号幹線道路(B)では「山谷新田遺跡」の分布概要が確認された。

それを基に、東北農政局島海南麓開拓建設事業所・県及び町の関係機関が協議を重ねた結果、山形県教育委員会が調査主体となり、緊急発掘調査による遺跡の記録保存を図ることとなった。発掘調査は、平成2年度が山谷新田遺跡及び山海窯跡群第1次調査で、平成3年度は山海窯跡群第2次調査、山橋7・8遺跡及び山橋橋跡についての調査である。

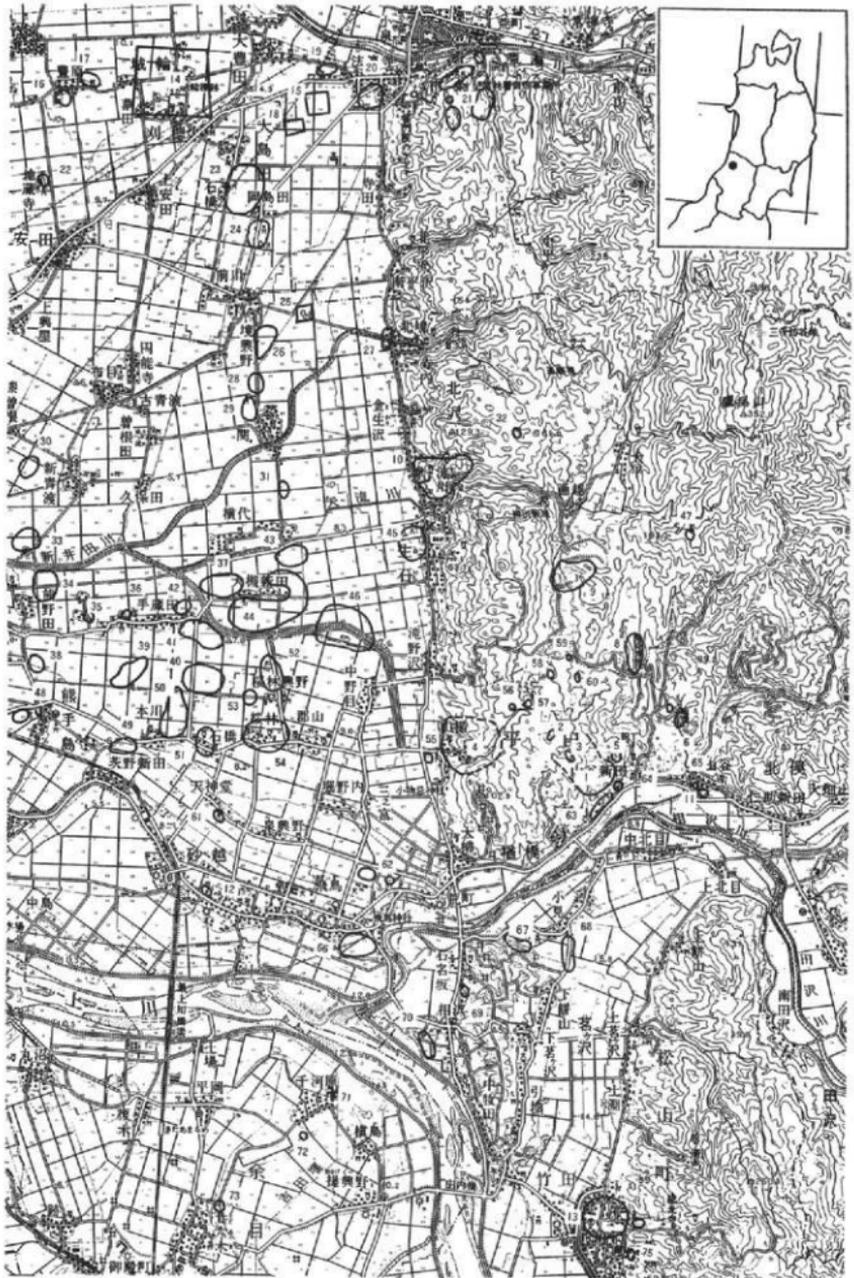
## 第II章 遺跡の立地と環境

山形県北西部は、日本海に面する海岸部、及びそれに平行して延びる庄内砂丘地帯、その東側に広がる庄内平野さらに出羽山地が南北に連なる。各河川は、平野を東西方向に横断し日本海へ注ぎ込む。遺跡が所在する飽海郡平田町は、人口約8,000人、庄内平野東部に位置する。東西23km、南北18km、面積179.01km<sup>2</sup>の町域で、西部水田地帯の平野部と出羽山地が連なる東部丘陵地帯からなる。山々を源とする多くの沢は、中野俣川や田沢川となり相沢川に合流し、県内を縦走する最上川へと注ぐ。

山海窯跡群は、相沢川右岸の山谷新田地区北側山間部に位置し、標高30～96mを測る小高い丘陵の尾根から谷合に立地する。地目は、主に杉や雑木の山林である。この一帯は、近年まで瓦生産用の粘土が採掘された地域でもある。

山橋7・8遺跡は、標高102～122mを測る丘陵山頂部と尾根に立地する。地目は、杉や雑木の山林である。山海窯跡群西側に隣接する位置で、8遺跡から丘陵南東側斜面は、同窯跡確認地点である。

山橋橋跡は、山橋地区北東部に接する標高約75mの山頂部周辺と、そこからのびる3つの尾根に立地する。前記2遺跡からは、丘陵延長西端に位置する。現在橋跡の主郭と考えられる山頂部には、大平山神社が祀られ、庄内平野を一望できる景観の所である。



第1図 遺跡位置図 (S=1:50,000)

表-1 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時期	番号	遺跡名	種別	時期
1	山崎窟跡群	窟跡	平安	39	手蔵田5遺跡	集落跡	平安
2	山榎7遺跡	集落跡	縄文	40	手蔵田6・7遺跡	集落跡	平安
3	山榎8遺跡	集落跡	縄文・平安	41	手蔵田9・10・11遺跡	集落跡	平安・中世
4	山榎橋跡	橋跡	戦国	42	手蔵田12遺跡	集落跡	平安
5	西沢窟跡	窟跡	平安	43	横代遺跡	集落跡	平安・鎌倉
6	新堀窟跡	窟跡	平安	44	天崩新田遺跡	集落跡	平安
7	新山B窟跡	窟跡	平安	45	生石2遺跡	官衙・集落跡	弥生・平安
8	泉谷地古窟跡群	窟跡	平安	46	生石4遺跡	集落跡	平安
9	願瀬山古窟跡群	窟跡	平安	47	鷹尾山遺跡	包蔵地・墓塚	縄文・平安
10	朝日山城跡	城跡	中世	48	熊手島遺跡	散布地	平安
11	河内城跡	城跡	室町	49	福島遺跡	散布地	平安・鎌倉
12	砂越城跡	城跡(本丸)	室町	50	本川遺跡	集落跡	平安
13	松山城跡	城跡	江戸	51	早稲田遺跡	集落跡	平安・鎌倉
14	史跡城輪橋跡	園街跡	平安	52	板杯興野遺跡	集落跡	平安
15	史跡堂の前遺跡	集落跡	平安	53	西田遺跡	集落跡	平安
16	豊原B遺跡	集落跡	平安	54	夜林遺跡	集落跡	平安・鎌倉
17	豊原遺跡	集落跡	平安・中世	55	山榎遺跡	集落跡	平安・鎌倉
18	後田遺跡	集落跡	平安・鎌倉	56	山榎2遺跡	包蔵地	縄文
19	非針各地遺跡	集落跡	平安	57	山榎3遺跡	包蔵地	縄文・弥生・平安
20	樋掛遺跡	集落跡	平安・鎌倉	58	山榎4遺跡	集落跡	平安
21	八森遺跡	城柵・集落跡	縄文・平安・中世	59	山榎5遺跡	窟跡	平安
22	安田遺跡	集落跡	平安	60	山榎6遺跡	散布地	縄文・平安
23	沼田遺跡	集落跡	平安	61	天神堂遺跡	散布地	平安・鎌倉
24	俣田遺跡	集落跡	平安	62	飛鳥遺跡	集落跡	平安・鎌倉
25	上ノ由遺跡	集落跡	平安	63	山谷新田遺跡	集落跡	縄文
26	境興野遺跡	集落跡	平安	64	山游遺跡	散布地	縄文
27	北境遺跡	集落跡	平安	65	八幡塚墳墓	墳墓	鎌倉
28	北田遺跡	集落跡	平安	66	紫鳥神内遺跡	散布地	平安・鎌倉
29	関B遺跡	集落跡	平安	67	岡畑遺跡	集落跡	縄文
30	新背森遺跡	集落跡	平安	68	下掛山遺跡	集落跡	平安
31	高阿弥田遺跡	集落跡	平安	69	石名坂遺跡	集落跡	縄文・平安
32	小倉山遺跡	包蔵地	縄文	70	徳田山遺跡	散布地	縄文
33	南興野遺跡	集落跡	平安	71	薄律院寺	寺院	室町
34	熊野田遺跡	集落跡	平安	72	千河原遺跡	包蔵地	平安
35	手蔵田1遺跡	集落跡	平安	73	廿六木遺跡	包蔵地	平安
36	手蔵田2遺跡	集落跡	平安	74	砂山遺跡	包蔵地	縄文
37	手蔵田3遺跡	集落跡	平安	75	八幡坂遺跡	包蔵地	縄文
38	手蔵田4遺跡	集落跡	平安				

(注) 種別・時期は『山形県遺跡地図』(山形県教育委員会 昭和53年)によるが、遺跡の内容等により一部修正した。

### 第三章 山海窯跡群

#### 1 遺跡の概要と調査の経過

第1次調査では、調査及びそれに並行して行った磁気探査等により、窯跡の分布は丘陵の谷合毎に数基ずつ点在する様相が把握され、A～H調査区全体で10基の登窯跡の所在が確認された。内A～D調査区について調査が行われ、4基の窯跡を検出した。

第2次調査は、当初E～H調査区について実施する計画であったが、調査中にE調査区西側の丘陵斜面から新たに窯跡の所在が確認され、7月1日～5日に分布調査による試掘調査を実施した結果、3基の窯跡及び焼壁土壌が検出されたため、本地点をI調査区として工程の見直しを行い、さらにH調査区地点の工事計画の進捗状況等も合わせ事業側と調整を進め、H調査区については次年度以降に繰り延べ、今年度はE～G・I調査区を調査対象とすることとした。

各調査区は、1次調査同様に20m単位の工事杭を基準に5mグリッドとした。Y軸方向は、N-7'16'-Eを測る。番号は、調査区毎である。

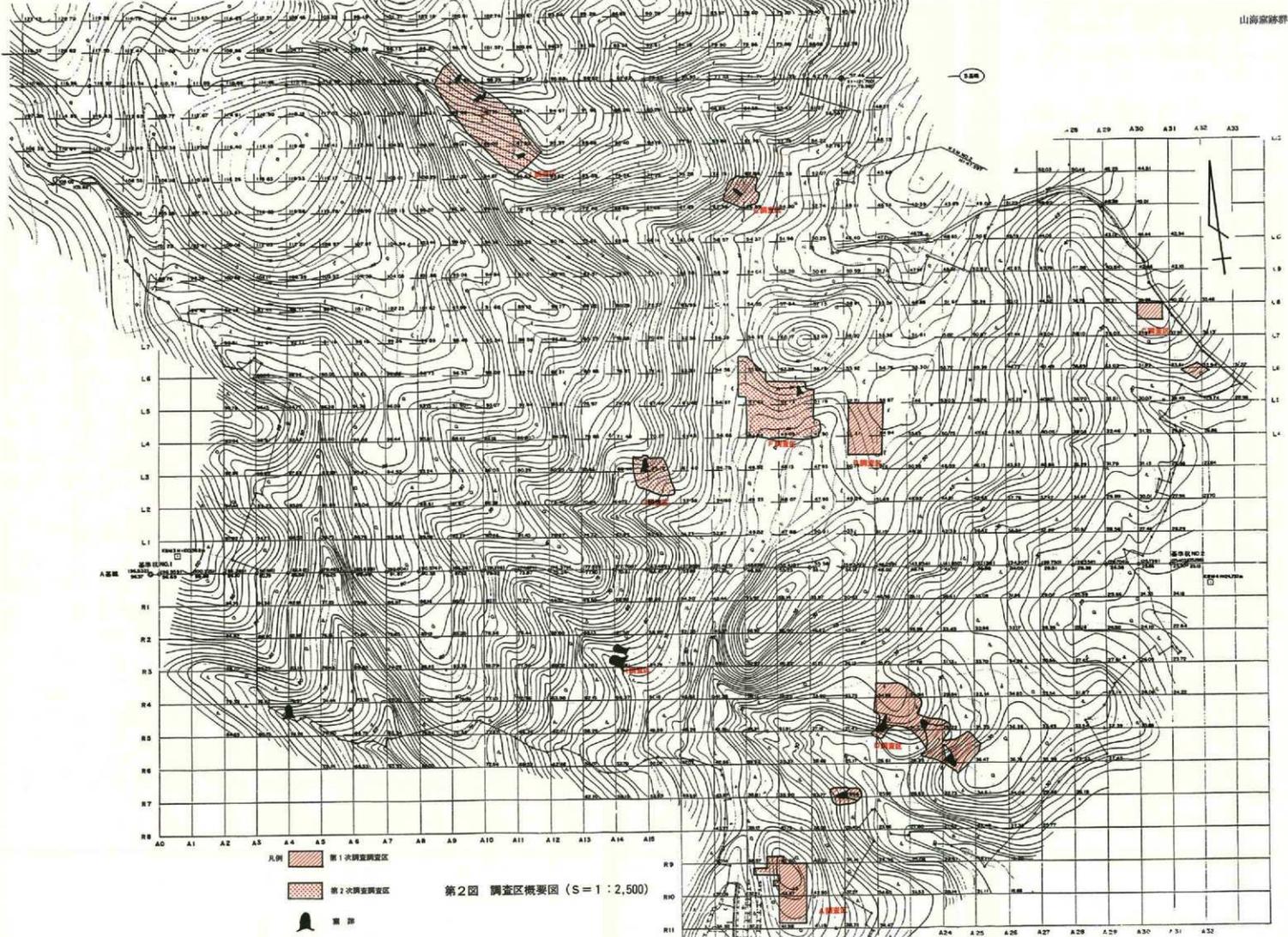
調査は、表土の粗掘り・伐根、次いで面掘りによる精査、遺構・遺物の検出、遺構の精査、写真・断面図作成等の記録作業の順で実施した。なお、E・G・I調査区の表土掘りは、重機を用いた。

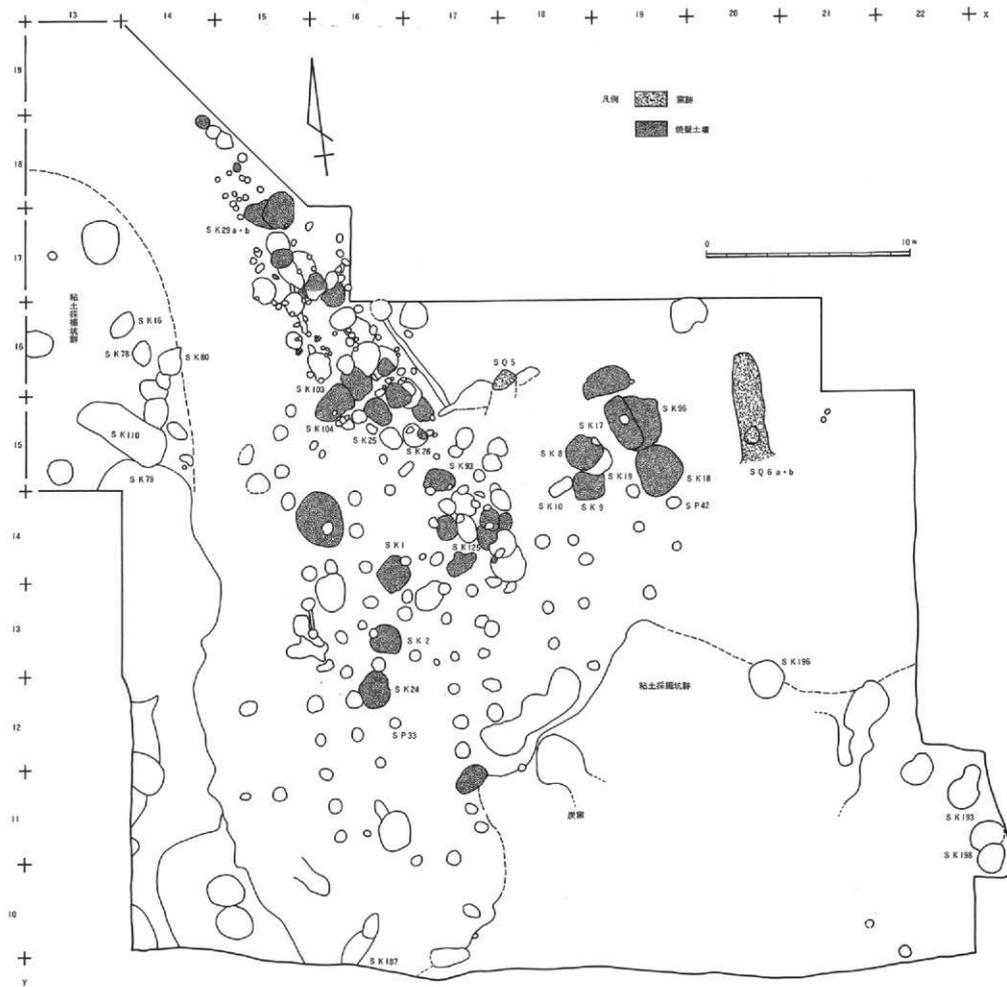
最初F調査区から調査を始め、当初は窯跡3基を予想したが、遺構は、地山上面検出のSQ5・6、焼壁土壌・土壌・柱穴群・炭窯で、北側の丘陵頂上部麓の緩傾斜地を、東から北西に取り囲むように分布するのがみとめられた。その外周の傾斜変換点下は、南側について重機による粗掘りも加え、ステ場域と粘土採掘坑と考えられる土壌群を検出した。本地区の標高は、50～55mを測る。遺構数は、1・2次合わせて最も多く、調査はSQ6窯底精査を残し10月9日まで要した。

E調査区は、F調査区北90mに位置する。標高は、60mを測る。10月1日から作業を進め、10月29日までの間に沢に面した南斜面からSQ7を検出した。本遺構については、第1次調査トレンチで確認されたものである。窯南東の傾斜面にステ場を予想したが、土が大きく削られた状況で焚口前に若干みとめられたのみである。

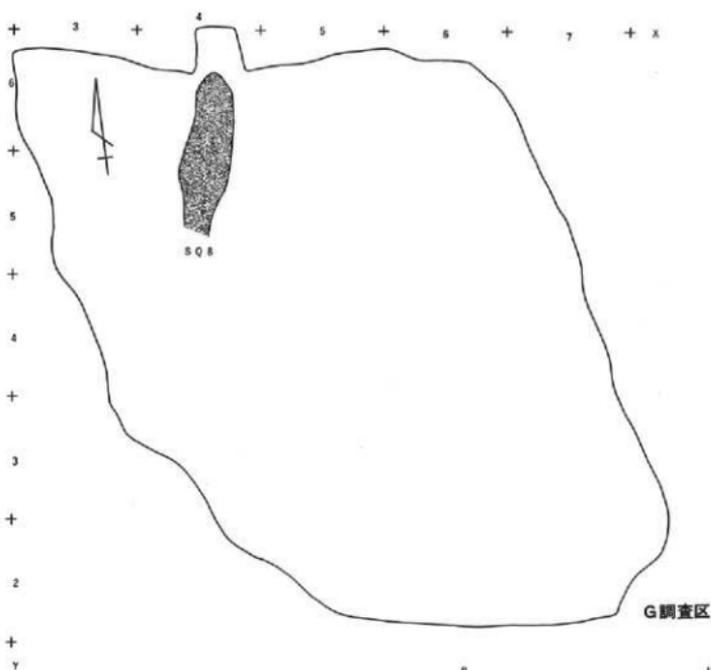
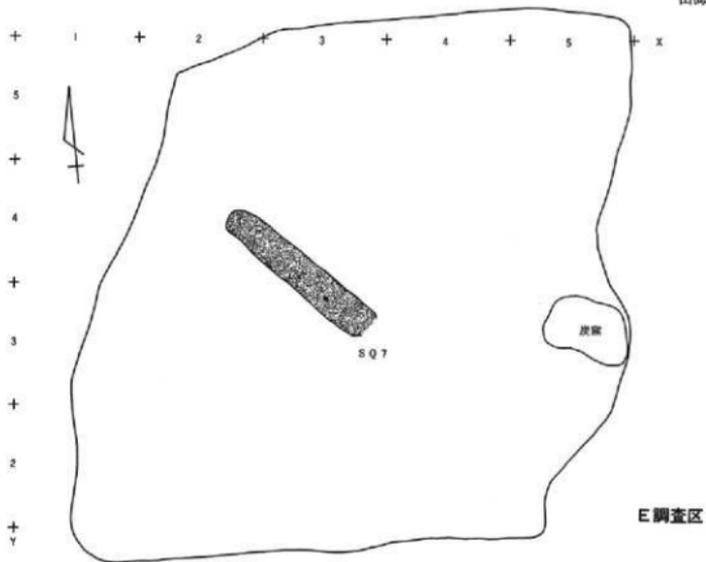
I調査区は、E調査区西130m、山楯7・8遺跡沢向の北東に位置する。標高85～96mを測り、本遺跡で最も高所である。10月3日から表土粗掘りに入り、12月の調査終了までに南西斜面70mの範囲に、平行した並びでSQ9～12・同ステ場、及びSQ9焚口西脇に土壌群・焼土を検出した。

G調査区は、1次調査で沢の下流部から土器の流れ込みがみとめられ、トレンチ調査で窯跡が確認された地区である。F調査区からは、南西55mの南斜面に位置する。標高は、65mを測る。10月8日から表土粗掘りを行い、適宜E・I調査と並行しながら進め、SQ8を検出した。

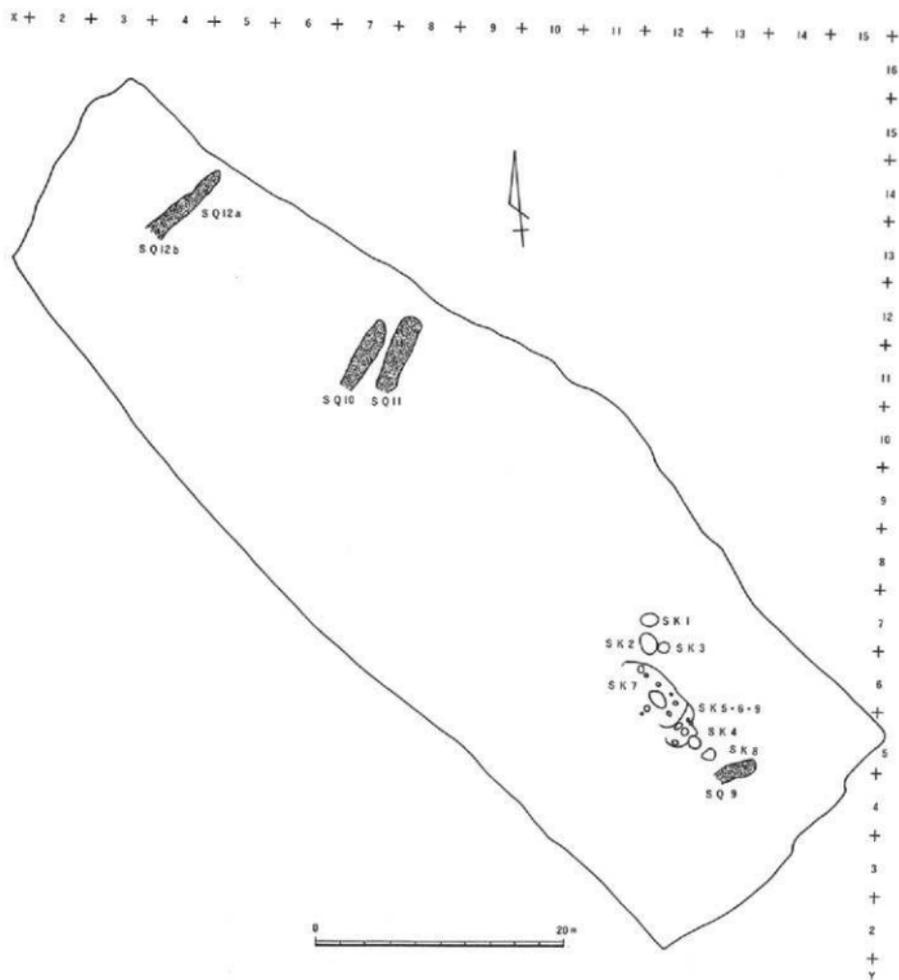




第3図 F調査区遺構配置図



第4図 E・G調査区遺構配置図



第5図 I 調査区遺構配置図



## 2 遺構と遺物

### (1) 遺構

**E 調査区** 検出された遺構は、窯跡1基、炭窯1基である。SQ7(第8図)は、半地下式無階無段登窯で、窯底1枚、窯壁2枚を確認する。窯底は平坦で、窯壁とともに赤褐色をしており、酸化状態で固く焼き締まっている。焚口は、石組が推測される。側壁の遺存は高さ約20cmに過ぎない。ステ場の広がりには皆無に等しく、遺物の出土も少ない。

**F 調査区** 検出された遺構は、登窯2基、焼壁土壇31基、土壇50基、ピット104基、粘土採掘坑群、炭窯1基である。F調査区は、北から南に広がる尾根上に、登窯・焼壁土壇・土壇・ピットが集中し、その周りの沢泊いに不規則に掘り込まれた粘土採掘坑があり、窯業のまとまった一作業空間としてとらえることができる。

SQ5(第14図)は、攪乱を受け窯尻部約1.30mを残すのみで、ステ場も確認されない。窯尻部の窯底・壁は、還元状態で非常に固く焼き締まっている。

SQ6(第7図)は、SQ6bの上位にSQ6aの重複が見られる。しかし、SQ6bの焼成部上部で削平され、窯尻の構造は不明である。SQ6a・SQ6bは共に半地下式無階無段登窯で、窯底は平坦である。bの焚口は、石組が推測され窯底2枚、窯壁2枚を確認する。焚口から燃焼部にかけて、還元状態の砂質土と須恵器が埋め込まれた楕円形の船底ピットがある。一方、SQ6aは、bの天井崩壊層が約40cm堆積した上に構築され、bの燃焼部上位に焚口が位置する。bの側壁内側に礫をはめ込み補強し、bの側壁輪郭を利用し粘土貼り付けを行い操業したと考えられる。窯尻に向かうにつれ、bの天井崩壊層が薄くなっており、窯尻部分をaとbが共有する構造の可能性も高い。ステ場は、南側湿地に向う斜面に広がる。SQ6aの特徴として、窯体内から多量の赤焼土器場が出土しているが、ステ場土層断面からは、赤焼土器焼成を目的とした痕跡の灰原層は観察できない。

山部窯跡群の調査において、底面・壁面の一方または両方の、一部または全面に、酸化状態で固く焼き締まった焼面を持つ土壇を焼壁土壇(註1)とする。これは、堆積した焼土のみ観察されるものとは区別する。検出された焼壁土壇を、平面プランを基に分類する(註2)と、楕円形基調と方形・長方形基調に大きく分けることができる。さらに、両者内で、被熱範囲や規模、焚口の有無等で細分が可能である。今回の調査では、焼壁土壇にステ場状のものは認められない。また、攪乱されたSQ5との関係は不明であるが、焼壁土壇と登窯との重複は見られず、同時操業の可能性もある。焼壁土壇間の重複では、斜面上方がより新しいことが分かる。楕円形基調には、SK126・127・128・201(第16図)SK29b(第17図)がある。確認面の問題があることも否定できないが、掘り方が浅く、被熱面と平面プランがほぼ一致し楕円形を示す。方形・長方形基調には、SK1・2(第6図)SK8・9(第14図)SK17・18・96(第15図)SK29a(第17図)SK103・104・119(第16図)がある。SK17・18・96は、特に大型で長軸2.90mに達する。斜面に対し方形に掘り込んだ壁面、平坦な底面が被熱面で固く締まっている。斜面下方は、掘り方が浅く炭質層が堆積しており、焚口に似たスペースである。SK8・9・29a・119は小型で、焚口状の構造を持た

ない。底・壁面が被熱面で、壁面の被熱が激しい。SK119は長軸0.92mと特に小型で、四方全壁面が焼き締まっている。SK103・104は、掘り方が浅く平面形は方形であるが、楕円形基調に類似する。SK1・2は、底面のみ被熱で、範囲も狭い。その他として、平面形不明で、SK107b上位に構築された被熱壁面がオーバーハングしているSK107a(第16図)、円形基調で浅く、被熱面が極小であるSK105(第16図)、ピット状の部分のみ焼き締まった被熱面を持つSK26(第16図)等がある。

F調査区外周、自然地形の傾斜変換点を境に、良質な粘土を追うように粘土探掘坑が連なる。粘土探掘坑は、掘り込みが不規則なため、不整形プランを示す。SK80・193(第17図)は、単一プランとして検出した例である。採掘後は、土器の廃棄が行われている。曲物(RW68)が出土しているSK80南壁からは、鉄の使用痕を観察することができる。

焼壁を伴わない土壌には、SK10(第14図)SK25(第16図)のように、多量の土器とともに粘土塊が出土する例がある。ピットは、直径約60cm未満、深さ50cm以上と、直径約60cm以上、深さ20cm未満に大きく分けられる。前者は焼壁土壌や土壌の密集域に集中し、相互に重複するのに対し、後者は碁盤目状に配列し、各遺構を切るように検出されている。

G調査区 検出された遺構は、窯跡1基である。SQ8(第9図)は、半地下式無階無段登窯で、底部はやや丸く掘り込まれる。焚口は、石組が推測される。焚口から燃焼部にかけて砂質土の埋め込まれた船底ピットがある。窯尻の窯底と燃焼部の側壁は、瑠璃色に固く焼き締め、側壁は高さ約1mも遺存している。窯底2枚、窯壁3枚を確認する。ステ場は南東沢側に広がり、土層観察より2回以上の掻き出しが行われたことが分かる。

I調査区 検出された遺構は、窯跡4基、焼壁土壌2基、土壌9基、ピット10基である。窯跡は、半地下式無階無段登窯で、SQ9・10・12の窯底は、やや丸く掘り込まれ、SQ11は平坦である。各窯の焚口は、石組が推測される。焚口から燃焼部に向け、各々規模は異なるが砂質土が埋め込まれた船底ピット状の掘り込みがある。SQ9は窯底1枚窯壁3枚、SQ10・11は窯底2枚窯壁2枚、SQ12aは窯底1枚窯壁4枚、SQ12bは窯底1枚窯壁2枚を確認する。ステ場は、各窯とも南西側沢方向に広がっている。

SQ11(第12図)は、焼成状況を留め検出される。酸化状態で焼き締まったスサ入り窯壁外側に、貼り付けられた白色粘土が色変化せず残り、その粘土中に、窯の骨組みに使用された木材が炭化して出土している。SQ11は、坏・甕片の焼台利用、焚口から壺・壺・坏の器種ごとに窯体内に配置すること等、焼成方法を理解可能とする情報を提供している。

SQ12(第13図)は、SQ12b上位にSQ12aが構築された重複関係にある。b焼成部上位にaの焚口があり、b窯尻がa燃焼部で消滅する。aを構築する際、bの天井前環層を利用して、bがaの側壁を一部共有する等、SQ6と共通する点がある。

焼壁土壌、土壌、ピットは、SQ9焚口の北西に隣接し検出される。焼壁土壌は、上部削平で被熱した底面のみ遺存し、平面形等は不明である。SK6(第18図)に炭化物・焼土を伴うカマドが検出されていること、多量の粘土が出土することから、これらは工房跡の一部と考えられる。SQ9の焚口に近い点、傾斜変換点に集中している点が注目される。

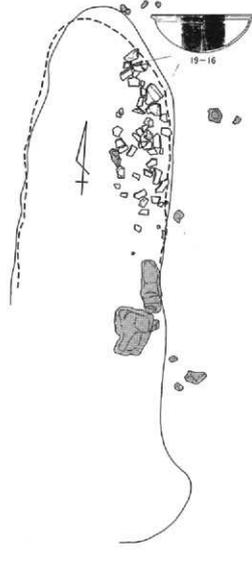
註1 「長者原貝塚 新田遺跡」(宮城県教育委員会、1961年)では「焼土遺構」、「土器の焼成1」(久保正芳、1989年)では「土器焼成遺構」の名称が用いられている。

註2 「土器の焼成1」(久保田)の分類を参考とする。

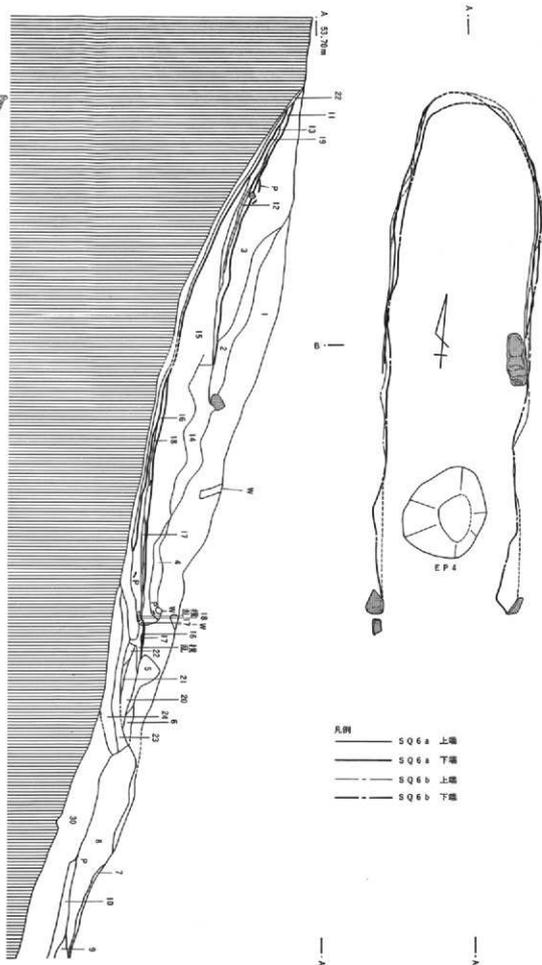


SQ6a

凡例

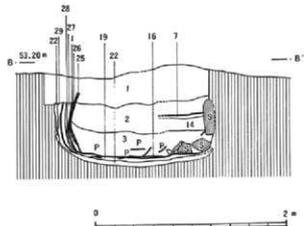


SQ6b



凡例

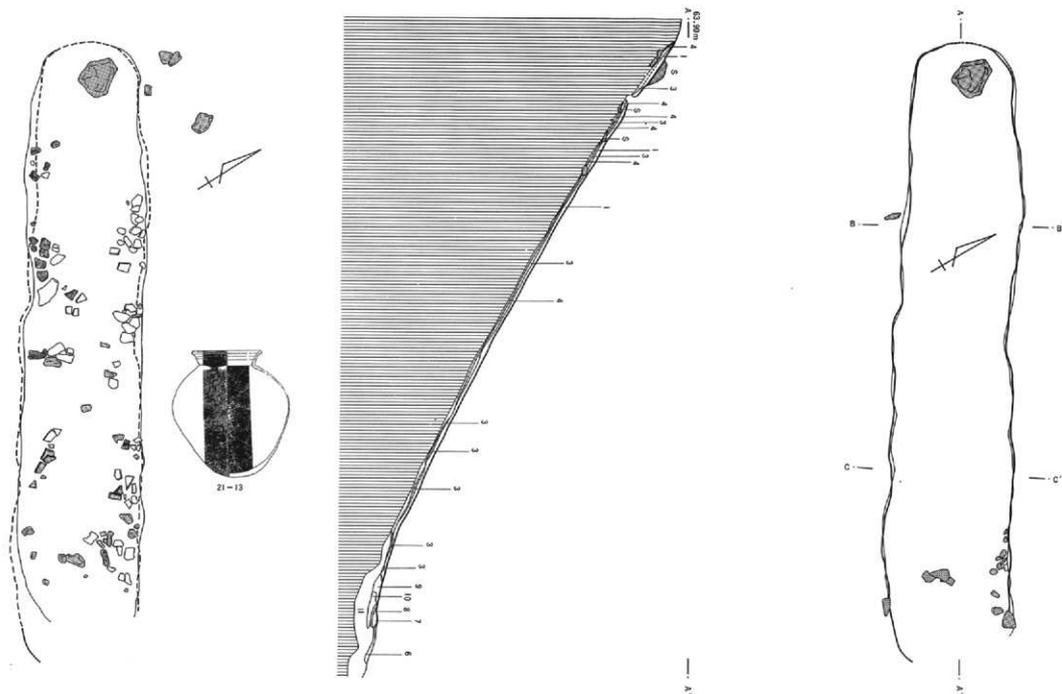
- SQ6a 上端
- SQ6a 下端
- SQ6b 上端
- SQ6b 下端



SQ6土層柱記

- 1: 暗褐色(10YR3/4)シルト 明褐色(7.5YR5/8)焼土粒子を少量含み、しまっている。
- 2: 褐色(10YR4/6)粘土質シルト 赤褐色(5YR4/8)焼土粒子・明褐色焼土粒子・暗緑灰色(7.5GY4/1)腐葉を含み、しまっている。
- 3: 暗赤褐色(5YR3/4)天井崩壊部分 緑灰色燧元状態スサリ・赤褐色酸化状態スサリ天井崩壊ブロック。
- 4: 黒色(10YR2/1)粘土質シルト スス・炭化物を少量含み、焼土粒子を少量含み、しまっている。
- 5: 黒褐色(10YR2/3)粘土質シルト オリーブ色(5Y5/4)シルト・赤褐色粒子を少量含む。
- 6: 暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト 地山をまじらに含む。
- 7: 黒褐色(10YR2/3)シルト 焼土粒子・炭化物を含み、ボロボロする。
- 8: 褐色(10YR4/4)シルト 1層よりもやや明るい。
- 9: 暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト
- 10: 暗褐色(10YR3/4)粘土質シルト
- 11: 明赤褐色(5YR5/8)腐葉 酸化状態で固くしまっている。SQ6a腐葉とする。
- 12: 暗褐色(7.5YR3/4)砂質シルト 均質で焼土を含み、やわらかい。腐葉に交みれたものと考えられる。
- 13: 暗赤褐色(5YR3/3)粘土質シルト 15層が熱を受けた状態。
- 14: 暗褐色(7.5Y3/3)シルト 焼土粒子・暗褐色酸化状態・緑灰色燧元状態天井崩壊片を含む、ボロボロ崩れる。
- 15: 赤褐色(5YR4/6)粘土質シルト 赤褐色スサリ焼土・緑灰色スサリブロックを含む。
- 16: オリーブ褐色(2.5Y4/4)腐葉 SQ6b腐葉・酸化状態で一部燧元状態もみとめられ、固くしまっている。
- 17: 黒色(7.5YR2/1)シルト 炭化物・腐葉を含み、チカラする。
- 18: オリーブ褐色(2.5Y4/3)細砂質シルト 腐葉を含み、しまっている。
- 19: 灰色(10G4/1)腐葉 16層下のSQ6b腐葉。燧元状態で、非常に固くしまっている。
- 20: 褐色(10YR4/6)粘土質シルト 23層よりもやや黒い色調。炭化物粒子を含み、しまっている。
- 21: 暗褐色(10YR3/4)粘土質シルト しまっている。
- 22: 暗赤褐色(5YR3/6)粘土質シルト 地山が熱を受けた状態、しまっている。
- 23: 褐色(10YR4/6)粘土質シルト 赤洗土層を含み、しまっている。
- 24: 褐色(10YR4/6)粘土質シルト 23層よりもやや茶色で、炭化物粒子を含む。
- 25: オリーブ灰色(5GY6/1)腐葉 燧元状態、スサリ。
- 26: 暗灰色(N3)腐葉 燧元状態、スサリ。
- 27: オリーブ黒色(7.5Y3/2)腐葉 燧元状態、スサリ。
- 28: 黄褐色(10YR5/6)腐葉 酸化状態、27層外崩壊、スサリ。
- 29: 暗緑褐色(10G4/1)腐葉 燧元状態、スサリ。
- 30: 黒褐色(7.5Y2/2)粘土質シルト 焼土粒子・炭化物粒子を少量含み、しまっている。

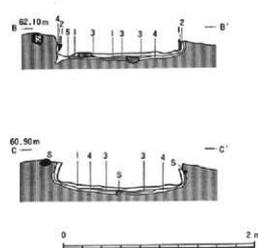
第7図 F調査区SQ6a・SQ6b竪断



凡例

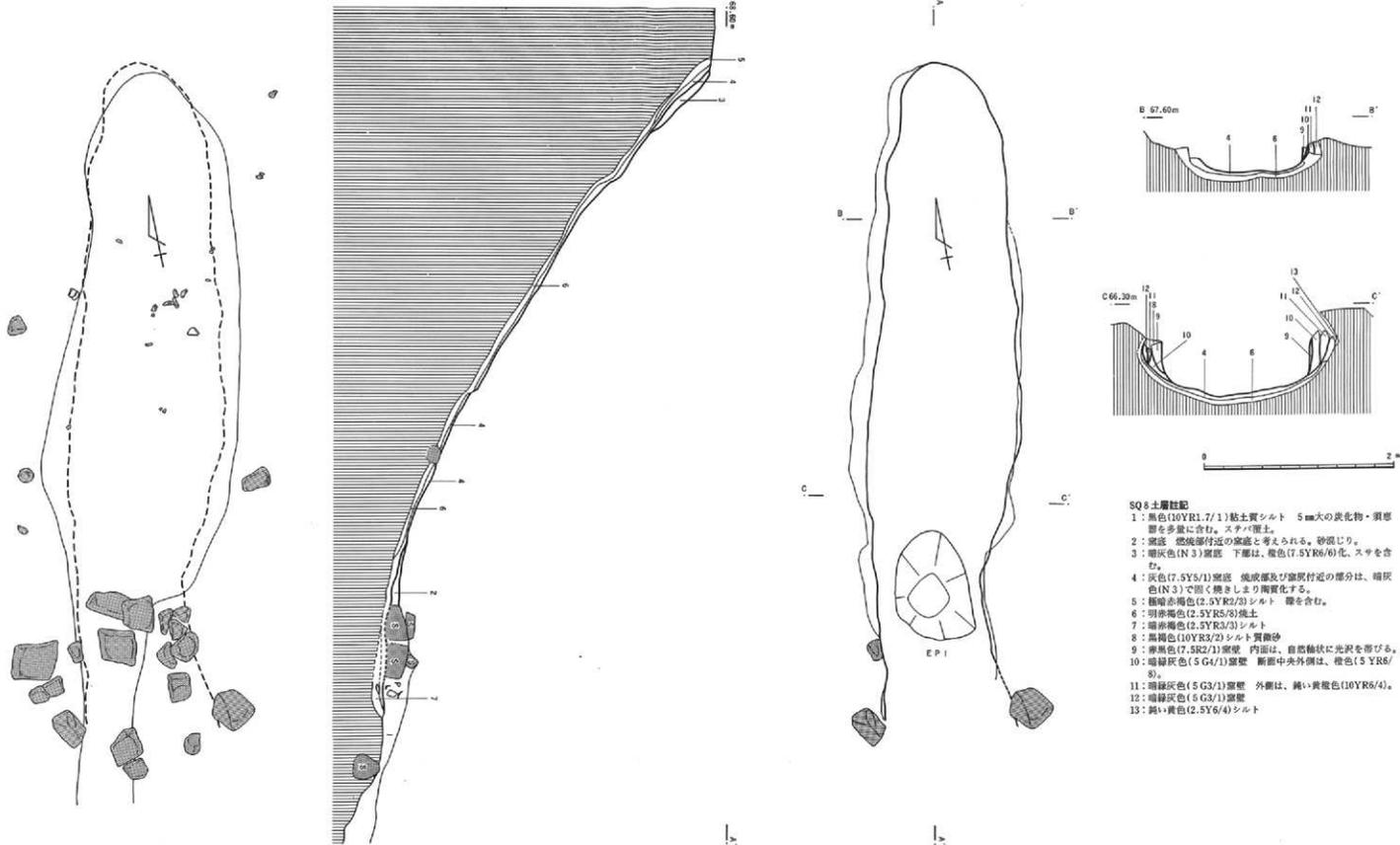
21-13土器片

■ 土



## SQ7土層柱記

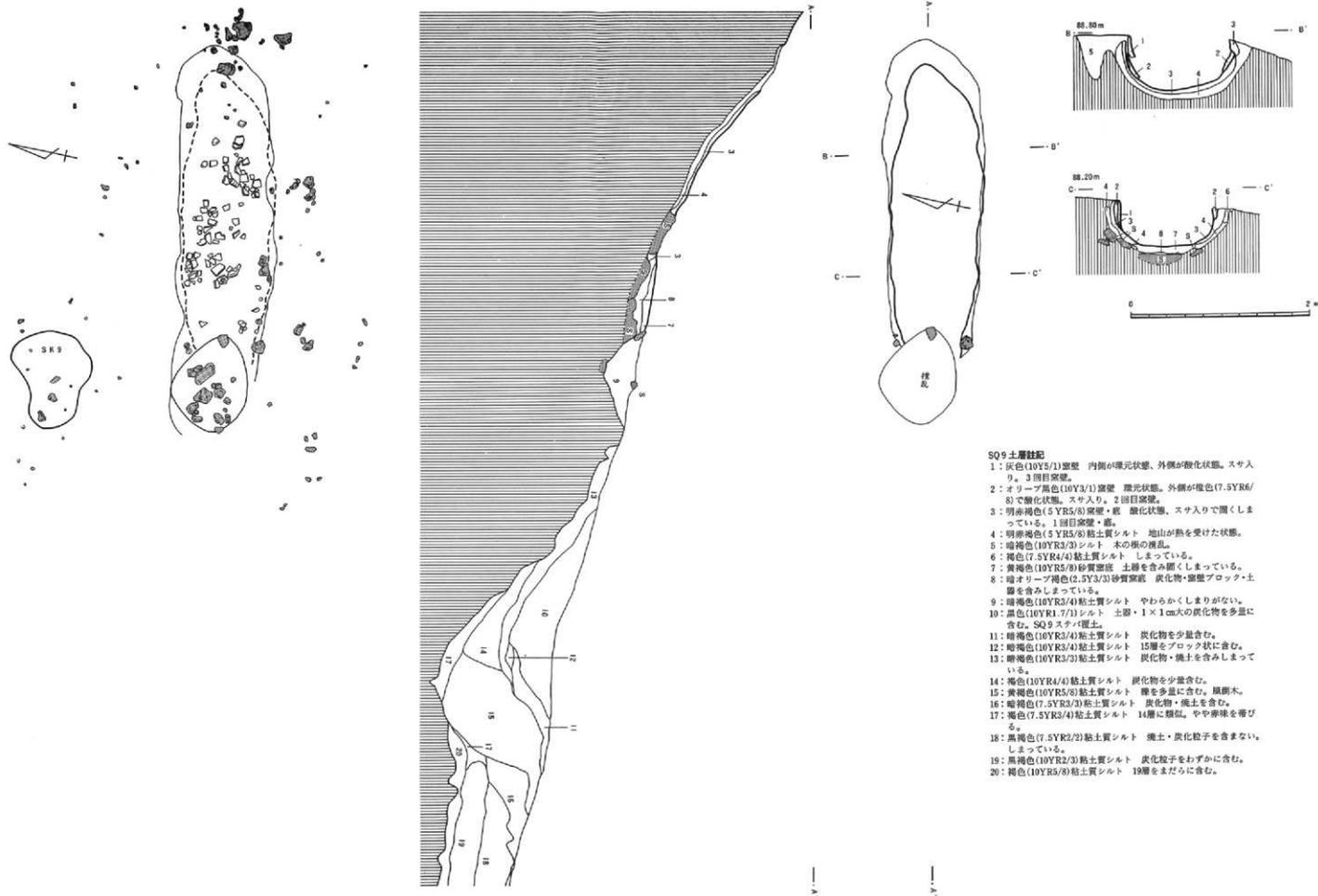
- 1: 明赤褐色(5YR5/8)重砂 シルト質でネメが細く、非常に固くしまっているが、もろく崩れる。腐葉層分は、明褐色(7.5Y5/8)で黄色味を帯び、スサが入り、かから状に崩れる。
- 2: 棕色(7.5Y6/8)腐葉 2回目の腐葉と考えられる。スサが入り、もろく崩れる。
- 3: 暗赤褐色(5YR3/3)シルト 細砂を含み、しまっている。
- 4: 鈍い赤褐色(5YR4/4)粘土質シルト 地山が熱を受けた状態、しまっている。
- 5: 暗褐色(10YR2/2)粘土質シルト 1層の粒子を含む。木根の腐乱。
- 6: 暗褐色(10YR2/2)粘土質シルト 5mm程度の炭化物・焼土を含み、しまっている。スサ(硬土)。
- 7: 褐色(10YR4/6)砂質シルト 焚口部付近の腐葉の一部、固くしまっている。
- 8: 暗褐色(7.5YR3/4)シルト 10層が熱を受けた状態、しまっている。
- 9: 暗褐色(10YR2/4)粘土質シルト しまっている。
- 10: 黒褐色(10YR2/3)シルト しまっている。
- 11: 暗褐色(10YR2/3)粘土質シルト 焼土粒子・炭化粒子をごくわずかに含み、しまっている。



## S Q 8 土層柱記

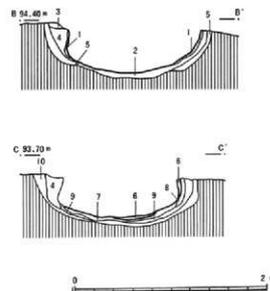
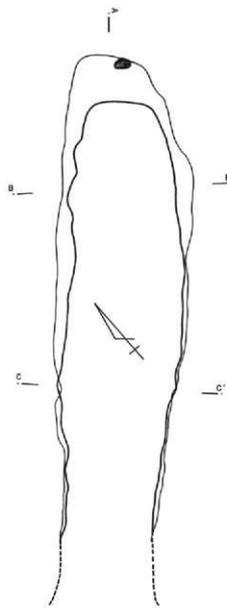
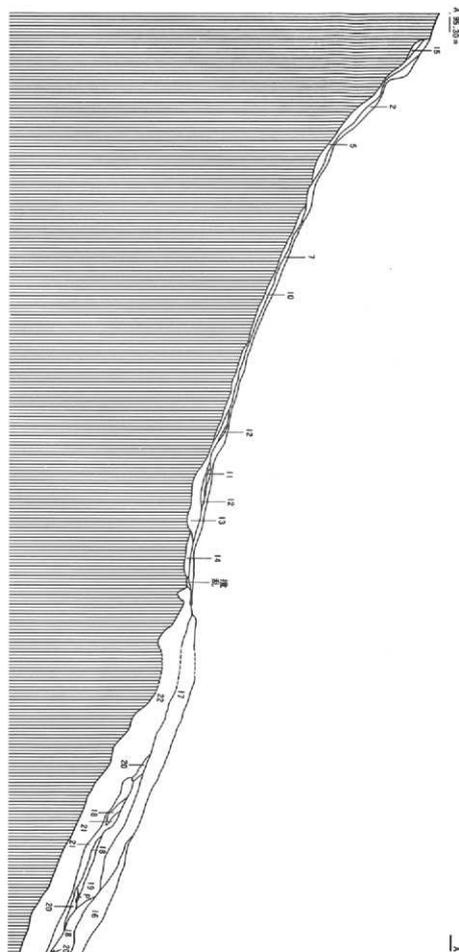
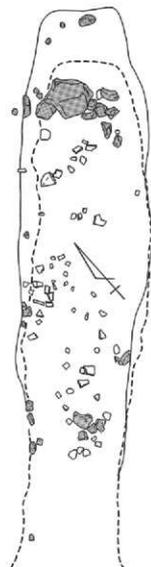
- 1: 黒色(10YR2.1/7.1)粘土質シルト 5mm大の炭化物・須形器を多数を含む。スチレノ上。
- 2: 灰底 燃焼層付近の灰底と考えられる。砂混じり。
- 3: 暗灰色(N 3)腐土 下部は、褐色(7.5YR6/6)化、スサを含む。
- 4: 灰色(7.5Y5/1)腐土 焼成層及び腐土付近の部分、暗灰色(N 3)で固く焼きしまり陶質化する。
- 5: 暗褐色(2.5YR2/2)シルト 礫を含む。
- 6: 明赤褐色(2.5YR5/5)焼土。
- 7: 暗赤褐色(2.5YR3/3)シルト
- 8: 黒褐色(10YR3/2)シルト質細砂
- 9: 黒褐色(7.5R2/1)腐土 内面は、自然輪状に光沢を帯びる。
- 10: 暗緑灰色(5 G4/1)腐土 断面中央外側は、褐色(5 YR6/8)。
- 11: 暗緑灰色(5 G3/1)腐土 外側は、鈍い黄褐色(10YR6/4)。
- 12: 暗緑灰色(5 G3/1)腐土
- 13: 鈍い黄色(2.5Y6/4)シルト

第9図 G調査区S Q 8竪断



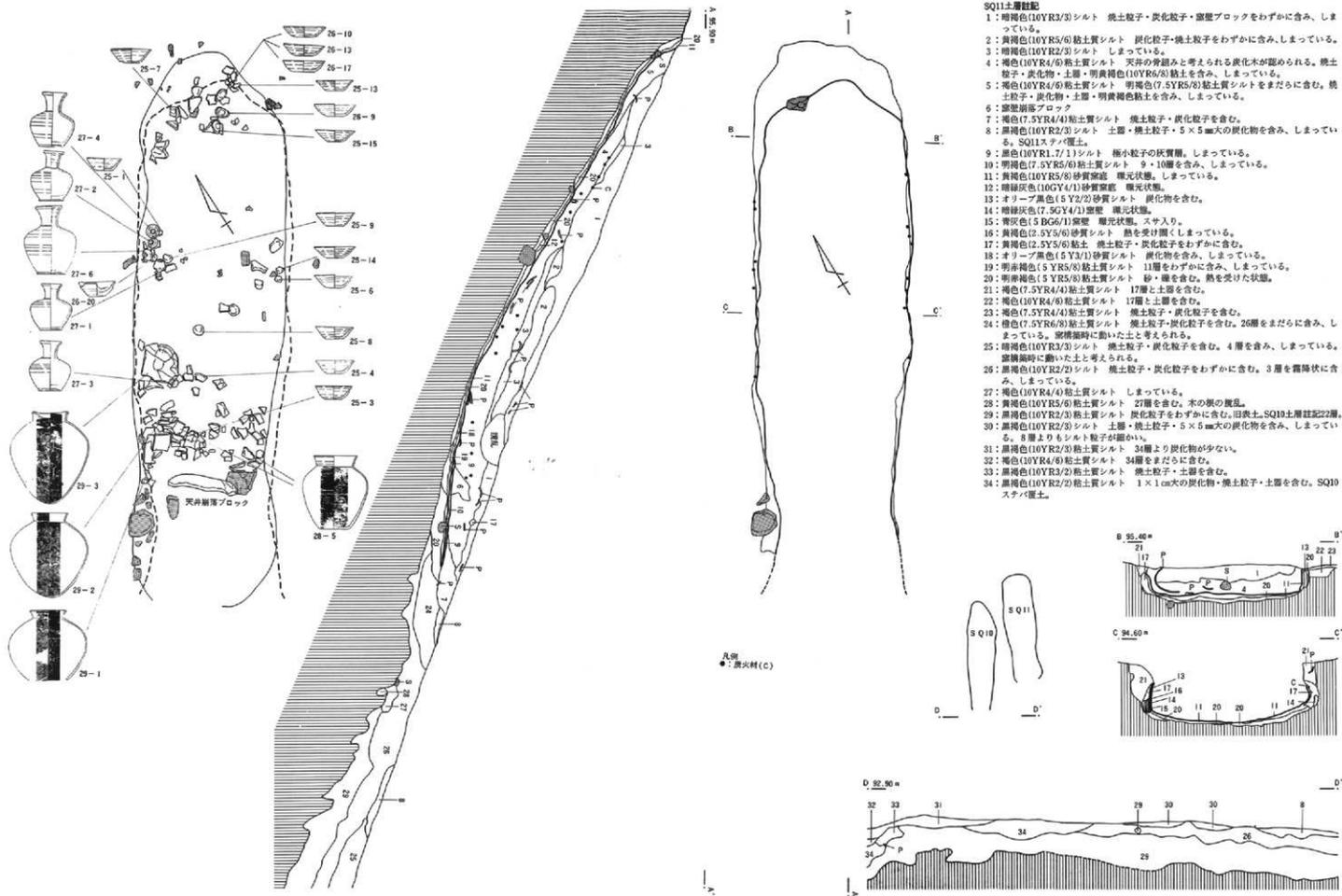
## SQ9土層柱記

- 1: 灰色(10Y5/1)塗壁 内側の環元状態、外側が酸化状態。スサ入り。3回目家礎。
- 2: オリーブ黒色(10Y3/1)塗壁 環元状態。外側が褐色(7.5YR6/8)で酸化状態。スサ入り。2回目家礎。
- 3: 明赤褐色(5YR5/8)塗壁・土 酸化状態。スサ入りで固くしまっている。1回目家礎・土。
- 4: 明赤褐色(5YR5/8)粘土質シルト 地山が熱を受けた状態。
- 5: 暗褐色(10YR3/3)シルト 木の根の埋瓦。
- 6: 褐色(7.5YR4/4)粘土質シルト しまっている。
- 7: 黄褐色(10YR5/8)砂質塗壁 土層を含み固くしまっている。
- 8: 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)砂質塗壁 炭化物・塗壁ブロック・土層を含みしまっている。
- 9: 暗褐色(10YR3/4)粘土質シルト やわらかくしまりが無い。
- 10: 黒色(10YR1.7/1)シルト 土層・1×1cmの炭化物を多量に含む。SQ9スライ層上。
- 11: 暗褐色(10YR3/4)粘土質シルト 炭化物を少量含む。
- 12: 暗褐色(10YR3/4)粘土質シルト 15層をブロック状に含む。
- 13: 暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト 炭化物・焼土を含みしまっている。
- 14: 褐色(10YR4/4)粘土質シルト 炭化物を少量含む。
- 15: 黄褐色(10YR5/8)粘土質シルト 燻を多量に含む。黒脚木。
- 16: 暗褐色(7.5YR3/3)粘土質シルト 炭化物・焼土を含む。
- 17: 褐色(7.5YR3/4)粘土質シルト 14層に類似。やや卵味を帯びる。
- 18: 黒褐色(7.5YR2/2)粘土質シルト 燻土・炭化粒子を含まない。しまっている。
- 19: 黄褐色(10YR2/3)粘土質シルト 炭化粒子をおおむね含む。
- 20: 褐色(10YR5/8)粘土質シルト 19層をだららに含む。



## SQ10土層柱記

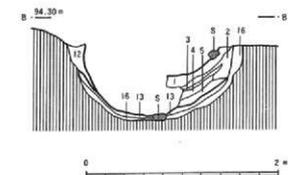
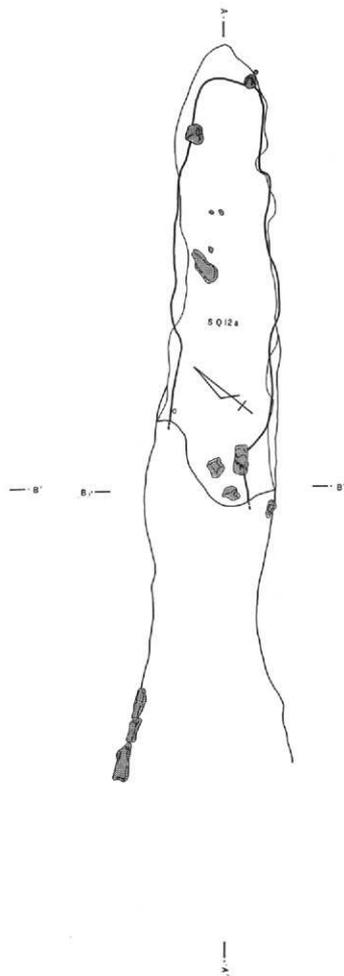
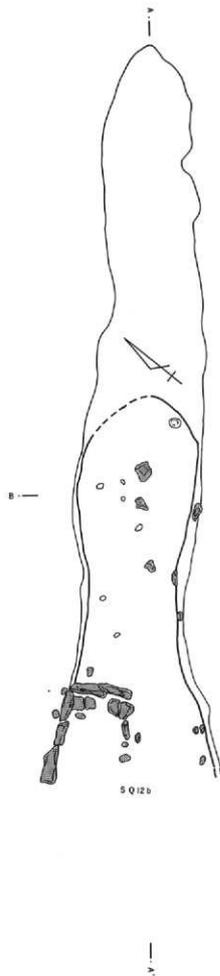
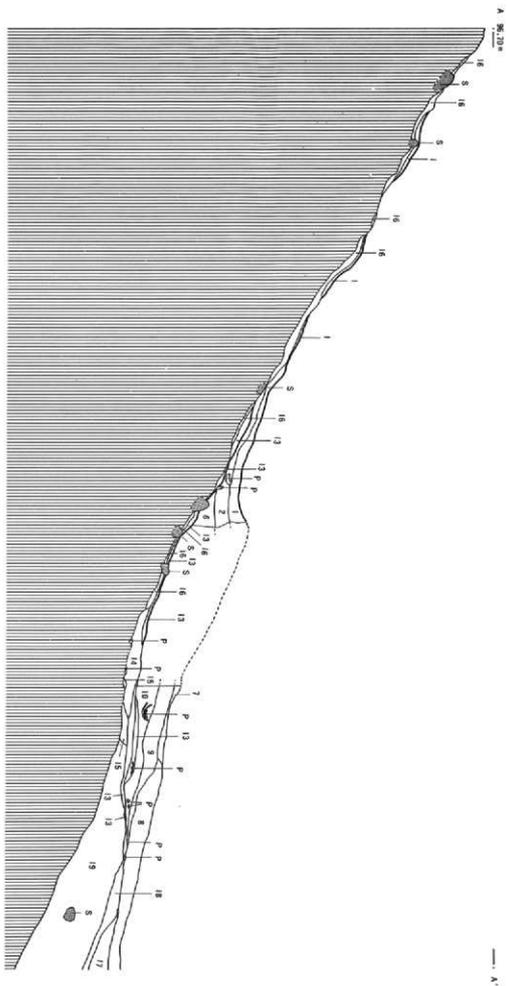
- 1: オリーブ黄色(5Y6/4)凝壁 スサ入り。もろく崩れる。2層厚。壁。
- 2: 赤褐色(5YR4/8)砂質凝壁 酸化状態。スサ入り。ブロック状に崩れる。
- 3: 暗褐色(10YR3/4)粘土質シルト しまっている。
- 4: 褐色(7.5YR4/6)粘土質シルト 凝壁ブロックを含む。
- 5: 赤褐色(2.5YR5/8)粘土質シルト 地山が熱を受けた状態。
- 6: 暗オリーブ灰色(5GY3/1)砂質凝壁・壁 塊元状態。スサ入り。非常に固くしまっている。
- 7: オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質凝壁 塊元状態。6層より、焼きしまりが弱い。6層と7層間に、褐色細砂が堆積している。
- 8: オリーブ褐色(2.5Y4/3)凝壁 塊元状態。一部酸化状態。スサ入り。しまっている。
- 9: 明褐色(7.5YR5/6)凝壁 7層底部の酸化状態の部分。
- 10: 赤褐色(5YR4/8)粘土質シルト 地山が熱を受けた状態。しまっている。
- 11: 褐色(10YR4/4)砂質シルト
- 12: 暗赤褐色(2.5YR3/3)砂質シルト
- 13: 黒褐色(7.5YR2/2)粘土質シルト 細砂を含む。
- 14: ぶい赤褐色(5YR4/4)粘土質シルト 地山が熱を受けた状態。
- 15: 赤褐色(5YR5/6)粘土質シルト 焼土粒子・炭化粒子・土層を多量に含む。スタバ礫土。
- 16: 暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルト 1×1cm大の炭化物・焼土粒子・土層を含む。スタバ礫土。SQ11土層柱記34層。
- 17: 黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト 1×1cm大の炭化物・焼土粒子・土層を含む。スタバ礫土。SQ11土層柱記34層。
- 18: 黒色(10YR1.7/1)粘土質シルト 焼土粒子・炭化粒子・土層を多量に含む。スタバ礫土。
- 19: 黒色(10YR1.7/1)粘土質シルト 焼土粒子・炭化粒子・土層を多量に含む。17層をまたらに含む。
- 20: 黒褐色(10YR2/3)粘土質シルト 焼土粒子・炭化粒子をわずかに含む。
- 21: 暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト 炭化粒子をわずかに含む。しまっている。
- 22: 黒褐色(10YR2/3)粘土質シルト 炭化粒子をわずかに含む。旧表土。SQ11土層柱記29層。



SQ11土層註記

- 1: 暗褐色(10YR3/3)シルト 焼土粒子・炭化粒子・燻壁フロッグをわずかに含み、しまっている。
- 2: 黄褐色(10YR5/6)粘土質シルト 炭化粒子・焼土粒子をわずかに含み、しまっている。
- 3: 暗褐色(10YR2/3)シルト しまっている。
- 4: 褐色(10YR4/6)粘土質シルト 天舟の底組みと考えられる炭化木が認められる。焼土粒子・炭化物・土層・明褐色色(10YR6/8)粘土を含み、しまっている。
- 5: 褐色(10YR4/6)粘土質シルト 明褐色(7.5YR5/8)粘土質シルトをまだらに含む。焼土粒子・炭化物・土層・明褐色色粘土を含み、しまっている。
- 6: 燻壁薪落ブロック
- 7: 黄褐色(7.5YR4/4)粘土質シルト 焼土粒子・炭化粒子を含む。
- 8: 暗褐色(10YR2/3)シルト 土層・焼土粒子・5×5mm次の炭化物を含み、しまっている。SQ11スチンペ土。
- 9: 褐色(10YR1-7/1)シルト 細小粒子の灰質層。しまっている。
- 10: 明褐色(7.5YR5/6)粘土質シルト 8・10層を含み、しまっている。
- 11: 黄褐色(10YR5/8)砂質燻壁 燻元状態。しまっている。
- 12: 暗緑灰色(10GY4/1)砂質燻壁 燻元状態。
- 13: オリーブ褐色(5Y2/2)砂質シルト 炭化物を含む。
- 14: 暗緑灰色(7.5GY4/1)燻壁 燻元状態。
- 15: 黄灰色(5BG6/1)燻壁 燻元状態。スス入り。
- 16: 黄褐色(2.5Y5/6)砂質シルト 熱を受け固くしまっている。
- 17: 黄褐色(2.5Y5/6)粘土 焼土粒子・炭化粒子をわずかに含む。
- 18: オリーブ褐色(5Y2/1)砂質シルト 炭化物を含み、しまっている。
- 19: 明赤褐色(5YR5/8)粘土質シルト 11層をわずかに含み、しまっている。
- 20: 明赤褐色(5YR5/8)粘土質シルト 砂・燻を含む。熱を受けた状態。
- 21: 褐色(7.5YR4/4)粘土質シルト 17層と土層を含む。
- 22: 褐色(10YR4/6)粘土質シルト 17層と土層を含む。
- 23: 褐色(7.5YR4/4)粘土質シルト 焼土粒子・炭化粒子を含む。
- 24: 褐色(7.5YR6/8)粘土質シルト 焼土粒子・炭化粒子を含む。26層をまだらに含み、しまっている。燻壁時に動いた土と考えられる。
- 25: 暗褐色(10YR3/3)シルト 焼土粒子・炭化粒子を含む。4層を含み、しまっている。燻壁時に動いた土と考えられる。
- 26: 暗褐色(10YR2/2)シルト 焼土粒子・炭化粒子をわずかに含む。3層を階層状に含み、しまっている。
- 27: 褐色(10YR4/4)粘土質シルト しまっている。
- 28: 黄褐色(10YR5/6)粘土質シルト 27層を含む。木の根の痕跡。
- 29: 暗褐色(10YR2/3)粘土質シルト 炭化粒子をわずかに含む。旧焼土SQ10土層註記22層。8層よりシルト粒子が細かい。
- 30: 暗褐色(10YR2/3)シルト 土層・焼土粒子・5×5mm次の炭化物を含み、しまっている。8層よりシルト粒子が細かい。
- 31: 暗褐色(10YR2/2)粘土質シルト 34層より炭化粒子が少ない。
- 32: 褐色(10YR4/6)粘土質シルト 34層をまだらに含む。
- 33: 暗褐色(10YR3/2)粘土質シルト 焼土粒子・土層を含む。
- 34: 暗褐色(10YR2/2)粘土質シルト 1×1cm次の炭化物・焼土粒子・土層を含む。SQ10スチンペ土。

第12図 I 調査区SQ11窯跡



## SQ12土層註記

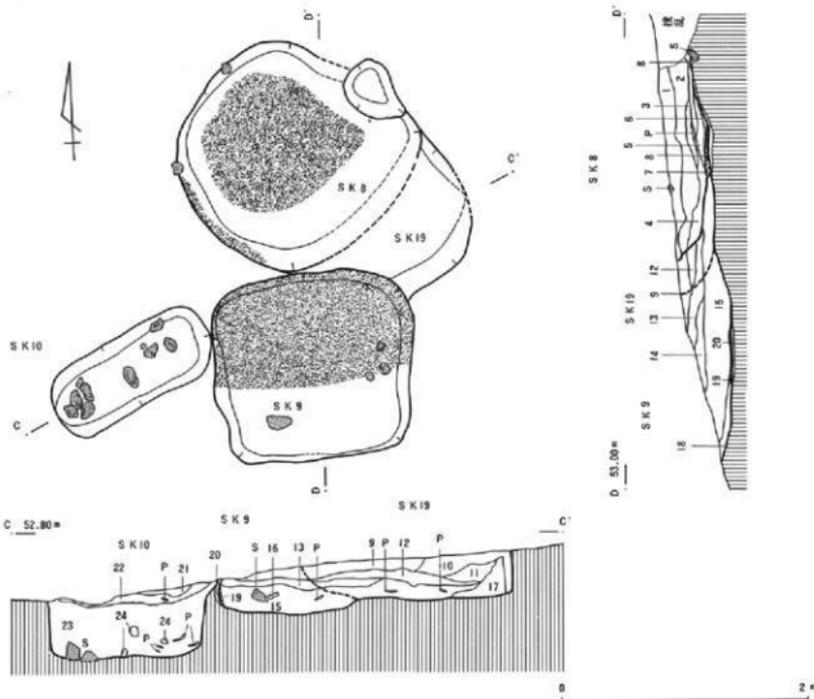
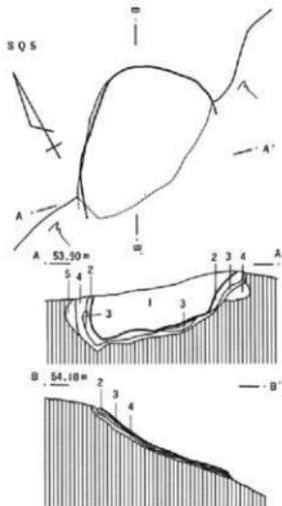
- 1: オリーブ黒色(7.5Y3/2)砂質腐炭 塊元状態スサ入り、SQ12a腐炭。
- 2: 腐炭・天井部分腐炭ブロック
- 3: オリーブ黒色(7.5Y3/2)腐炭 塊元状態。一部暗赤褐色(10R3/2)に染まれている。スサ入り。
- 4: オリーブ黒色(10Y3/1)腐炭 塊元状態。染まれている。スサ入り。
- 5: 灰オリーブ色(5.5Y2)腐炭 塊元状態。一部腐化状態。塊元崩れしまっている。スサ入り。
- 6: 暗褐色(10YR3/2)シルト 3・4・5層ブロック片を含む。
- 7: 褐色(7.5YR1.7/1)シルト 炭化物を少量を含む。暗褐色(7.5YR3/4)粘土粒子を少量に散らさる。
- 8: 黒色(7.5YR1.7/1)シルト 粘土粒子を点状に散らさる。炭化物をブロック状に含む。
- 9: 褐色(7.5YR4/6)砂質シルト スサ入り腐炭ブロックを含む。
- 10: 褐色(7.5YR4/3)砂質シルト スサ入り腐炭ブロック・土層を含む。
- 11: 褐色(10YR3/1)砂質シルト 炭化物・小礫を含む。
- 12: 赤褐色(5.5YR4/3)腐炭 腐化状態。60cm崩れる。
- 13: 黄褐色(2.5YR5/4)砂質腐炭・炭 外側幅約1cmは腐化状態。内側は塊元状態で固まっている。SQ12b腐炭。
- 14: 黒褐色(2.5YR3/2)砂 炭化物をブロック状に少量含む。
- 15: 灰色(7.5YR6/6)シルト質砂 木の根を含みまわっている。
- 16: 明赤褐色(5.5YR5/8)粘土質シルト 地山が熱を受けた状態。
- 17: 褐色(7.5YR1.7/1)シルト 炭化物を少量を含む。
- 18: 黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト 粘土粒子を散らさる。
- 19: 黒褐色(10YR3/1)シルト 木の根を含みまわらない。

**SQ5 土層註記**

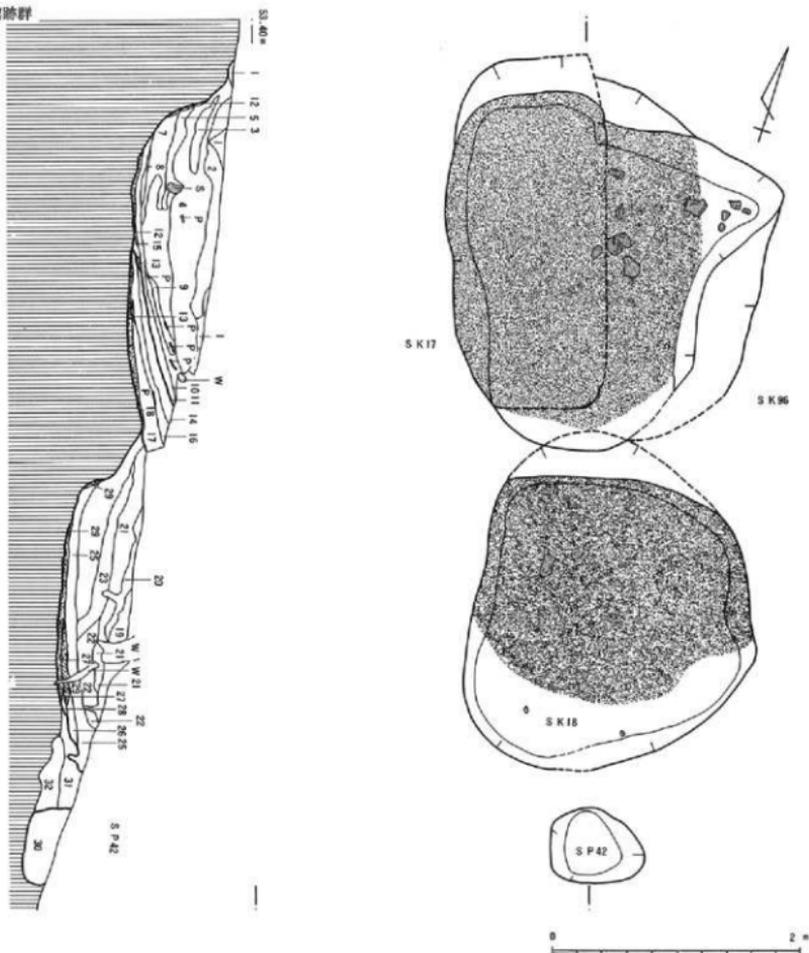
- 1: 鈍い黄色(2.5Y6/4)底底 燻元状態。非常に固く焼きしまっている。
- 2: 黒褐色(5 YR4/6)底底 非常に固く焼きしまっている。
- 3: 赤褐色(5 YR4/6)粘土質シルト 地山が熱を受けた状態。

**SK8・9・10・19土層註記**

- 1: 黒褐色(2.5Y3/1)シルト 黒褐色(2.5Y3/2)シルトを北方にいくにつれて多量を含む。炭化物、7層を含む。
- 2: 褐色(10YR4/6)粘土質シルト 1・7層・炭化物・土層を含む。
- 3: 褐色(10YR4/4)粘土質シルト 7層ブロック・土層を含む。
- 4: 黒褐色(10YR2/2)シルト 炭化物を両側、3層ブロックを西側に、7層粒子を全体を含む。
- 5: 褐色(7.5YR4/1)シルト 暗青灰色(10BG4/1)シルト、7層を階層状を含む。
- 6: 暗褐色(10YR3/4)シルト 暗青灰色(10BG4/1)シルト、炭化物を少々含む。
- 7: 赤褐色(10YR4/8)焼土
- 8: 暗赤褐色(5 YR3/6)粘土質シルト 地山が熱を受けた部分。
- 9: 黒褐色(10YR2/3)シルト 炭化粒子・明褐色粒子を含む。
- 10: 黒褐色(10YR2/3)シルト 炭化粒子・明褐色粒子・灰オリブ色粘土・黄褐色粘土を含む。
- 11: 褐色(10YR4/6)粘土質シルト 焼土粒子・炭化物・1層ブロック・土層を含む。
- 12: 褐色(10YR4/4)粘土質シルト 焼土粒子・炭化物・1層ブロック・土層を含む。
- 13: 暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト 2×2cm大の炭化物・明褐色ブロックを含む。
- 14: 黒色(7.5YR2/1)シルト 南側に灰質土を多量を含む。
- 15: 褐色(7.5YR4/4)粘土質シルト 明褐色粒子を多量に、炭化物を11層より少量含む。
- 16: 明褐色(7.5YR5/6)シルト 暗褐色粘土ブロックを含む。
- 17: 黄褐色(10YR5/8)粘土 炭化物・明褐色粒子を少量含む。
- 18: 黒褐色(10YR2/3)シルト 炭化粒子・土層を多量に含む灰質土。
- 19: 明赤褐色(5 YR5/8)焼土 かたくしまっている。
- 20: 赤褐色(5 YR4/6)粘土質シルト 地山が熱を受けた状態。
- 21: 暗褐色(7.5YR4/4)粘土質シルト 焼土粒子・炭化物・土層を多量を含む。
- 22: 暗褐色(7.5YR3/3)粘土質シルト 炭化物・土層を多量に、礫を少量含む。
- 23: 褐色(10YR4/6)粘土質シルト 炭化物・土層・礫・24層ブロックを含む。
- 24: 灰オリブ色(5 Y5/3)粘土



第14図 F調査区SQ5竈跡 SK8・9焼壁土層 SK10・19土層



SK17・18・96・SP42土層記

- 1: 暗褐色(10YR3/3)シルト 土器・焼土粒・炭を多量に含む。
- 2: 黄褐色(10YR5/6)粘質シルト 風化礫粒を少量含む均一。
- 3: 褐色(10YR4/6)粘質シルト 地山粒を多量に含む。
- 4: 褐色(10YR4/4)粘質シルト 焼土粒・地山粒・炭を含む。
- 5: 褐色(10YR4/6)粘質シルト 焼土・地山ブロックを含む。
- 6: 褐色(10YR4/4)粘質シルト 焼土粒・地山粒を多く含む。
- 7: 褐色(7.5YR4/4)粘質シルト 焼土粒・炭を含む。
- 8: 焼土 焼土塊層。
- 9: 暗褐色(7.5YR3/3)粘質シルト 炭・焼土粒を多量に含む。
- 10: 暗褐色(5YR4/6)粘質シルト 炭・焼土粒を含む。
- 11: 暗褐色(5YR4/6)粘質シルト 炭・焼土粒を多量に含む。
- 12: 焼壁 SK17床面・壁面。
- 13: 焼土ブロック
- 14: 明褐色(7.5YR5/6)粘質シルト 焼土粒を含む。
- 15: 黄褐色(7.5YR7/8)粘質シルト 地山ブロック。

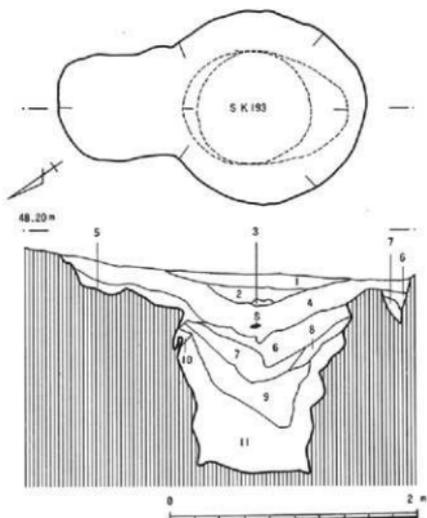
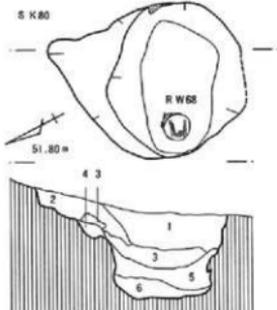
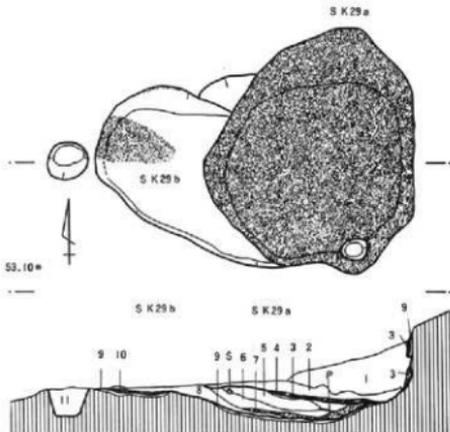
- 16: 暗赤褐色(5YR3/3)粘質シルト 焼土粒・炭を含む。
- 17: 黒褐色(5YR2/2)粘質シルト 焼土粒・炭を含む。
- 18: 焼壁 SK96床面。
- 19: 赤褐色(5YR4/8)粘質シルト 焼土粒・炭を含む。
- 20: 暗褐色(7.5YR3/4)粘質シルト 炭・焼土粒を含む。
- 21: 褐色(7.5YR6/8)粘質シルト 均一。
- 22: 褐色(7.5YR4/6)粘質シルト 地山粒を少量含む。
- 23: 褐色(7.5YR6/6)粘質シルト 鈍い褐色粘質シルト混り。
- 24: 明褐色(7.5YR5/6)粘質シルト 地山粒を少量含む。
- 25: 黒褐色(5YR2/2)粘質シルト 焼土粒・炭を多量に含む。
- 26: 鈍い赤褐色(5YR4/3)粘質シルト 焼土粒・炭を含む。
- 27: 赤褐色(5YR4/6)粘質シルト 焼壁。臭味を帯びる。
- 28: 赤褐色(5YR4/6)粘質シルト 黒褐色シルトを鱗状に含む。
- 29: 焼壁 SK18床面。
- 30: 暗褐色(10YR3/4)粘質シルト 炭・焼土粒を微量含む。
- 31: 褐色(7.5YR4/4)粘質シルト 風化礫粒を少量含む。
- 32: 褐色(7.5YR4/3)粘質シルト 炭を微量含む。

第15図 F調査区SK17・18・96焼壁土塊 SP42柱穴



### SK29 a・b 土層註記

- 1: 黄褐色(10YR5/8)粘土 暗褐色粘土質シルトブロック1×1m大の炭化物・3層粒子を含みまっている。
- 2: 黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト 炭化粒子・3層粒子を含む灰質層。しまっている。
- 3: 明赤褐色(5YR5/8)焼土 固くしまっている。
- 4: 赤褐色(5YR4/6)粘土 5層が熱を受けた状態。
- 5: 黄褐色(10YR5/8)粘土 黄褐色(10YR5/6)粘土・炭化物・7層粒子を含みまっている。1層に類似。
- 6: 暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト 炭化粒子・7層粒子を含みまっている。2層に類似。
- 7: 明赤褐色(5YR5/8)焼土 固くしまっている。3層よりもやや黒味を帯びている。
- 8: 黒色(5YR1.7/1)砂質粘土 灰質層が固まった状態。ボロボロする。
- 9: 赤褐色(5YR4/6)粘土 地山が熱を受けた状態。
- 10: 明赤褐色(5YR5/8)焼土 7層よりも固くしまっている。
- 11: 暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト しまっている。

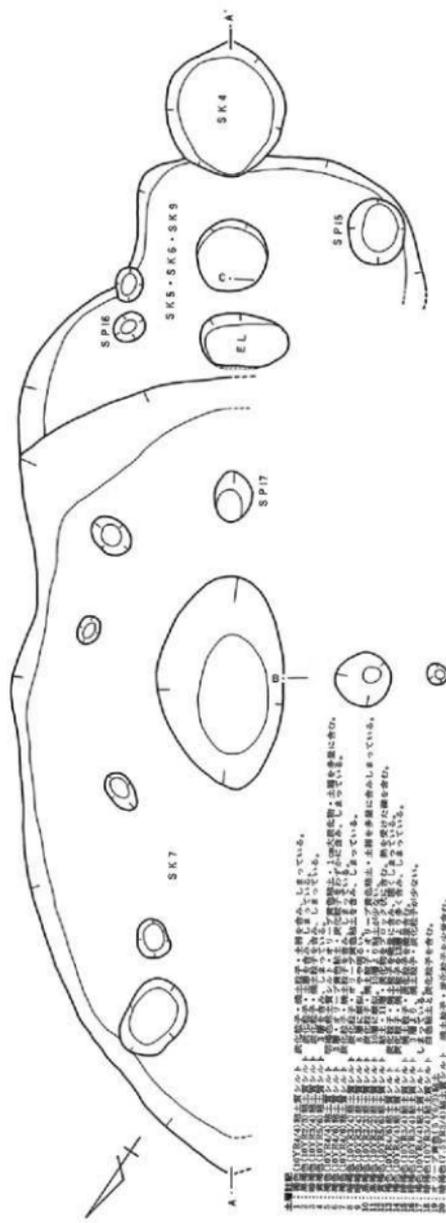


### SK80土層註記

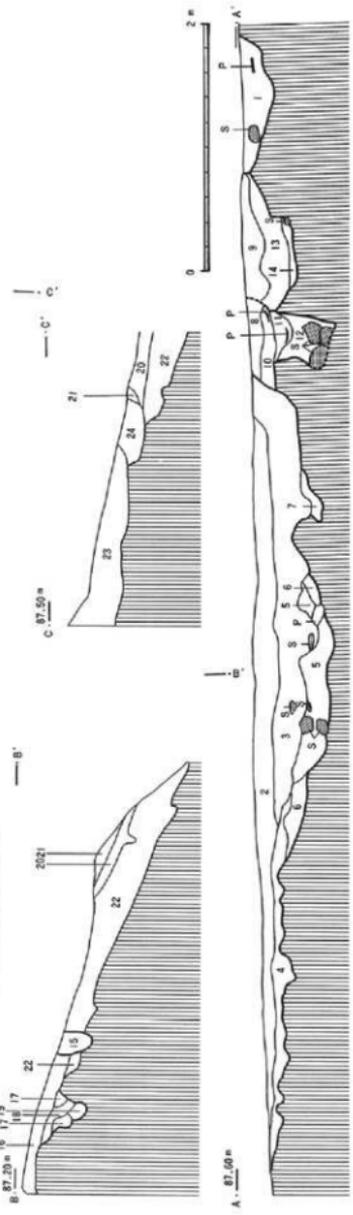
- 1: 暗褐色(10YR3/4)粘土質シルト 土器・炭化物を多量に含みまっている。
- 2: 鈍い黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト 炭化物・焼土粒子・土器・黄褐色(10YR5/8)粘土を含みまっている。
- 3: 黒褐色(10YR3/2)粘土 炭化物・2層を含みまっている。
- 4: 灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルト 炭化物・焼土粒子・2層・黄褐色粘土を含みまっている。
- 5: 黒色(10YR2/1)粘土 土器・炭化物・焼土粒子を含みまっている。
- 6: 黒色(10YR2/1)粘土 炭化物・緑灰色(10G5/1)粘土質細砂を含みまっている。

### SK193土層註記

- 1: 黒褐色(2.5Y3/1)シルト 土器・焼土粒子をわずかに含む。
- 2: 黒褐色(2.5Y3/2)粘土質シルト 焼土・炭化粒子を少量、1・4層を離隔状に含む、しまっている。
- 3: 明褐色(7.5YR5/8)シルト 炭化粒子・焼土を含む。
- 4: 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粘土質シルト 一部酸化している。炭化粒子・3層を含みまっている。
- 5: 灰オリーブ褐色(2.5Y3/3)粘土質シルト 鈍い黄色シルト質粘土(地山)をまだらに、炭化粒子・3層を少量含む。
- 6: 褐色(10YR4/4)粘土質シルト 一部酸化している。地山をまだらに含む。植物繊維を含み泥炭質でしまっている。
- 7: 暗褐色(10YR3/4)粘土質シルト 炭化粒子・地山を含み、やや泥炭質でしまっている。
- 8: 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質粘土 炭化粒子を含む。
- 9: 暗褐色(10YR3/3)シルト質粘土 炭化粒子・地山を含み、やや泥炭質でしまっている。一部酸化している。
- 10: 鈍い黄色(2.5Y6/4)シルト質粘土 9層を含み、しまっている。
- 11: 暗褐色(10YR3/3)シルト質粘土 暗緑灰色粘土・灰色泥炭質粘土が互層に堆積している。非常にきめが細かい。



1. 遺構の位置関係  
 2. 遺構の形状  
 3. 遺構の規模  
 4. 遺構の構造  
 5. 遺構の材料  
 6. 遺構の用途  
 7. 遺構の年代  
 8. 遺構の保存状況  
 9. 遺構の調査方法  
 10. 遺構の調査結果  
 11. 遺構の調査の意義  
 12. 遺構の調査の今後の展望  
 13. 遺構の調査の結論  
 14. 遺構の調査の参考文献  
 15. 遺構の調査の謝辞  
 16. 遺構の調査の図表  
 17. 遺構の調査の図表  
 18. 遺構の調査の図表  
 19. 遺構の調査の図表  
 20. 遺構の調査の図表  
 21. 遺構の調査の図表  
 22. 遺構の調査の図表  
 23. 遺構の調査の図表  
 24. 遺構の調査の図表  
 25. 遺構の調査の図表  
 26. 遺構の調査の図表  
 27. 遺構の調査の図表  
 28. 遺構の調査の図表  
 29. 遺構の調査の図表  
 30. 遺構の調査の図表  
 31. 遺構の調査の図表  
 32. 遺構の調査の図表  
 33. 遺構の調査の図表  
 34. 遺構の調査の図表  
 35. 遺構の調査の図表  
 36. 遺構の調査の図表  
 37. 遺構の調査の図表  
 38. 遺構の調査の図表  
 39. 遺構の調査の図表  
 40. 遺構の調査の図表  
 41. 遺構の調査の図表  
 42. 遺構の調査の図表  
 43. 遺構の調査の図表  
 44. 遺構の調査の図表  
 45. 遺構の調査の図表  
 46. 遺構の調査の図表  
 47. 遺構の調査の図表  
 48. 遺構の調査の図表  
 49. 遺構の調査の図表  
 50. 遺構の調査の図表  
 51. 遺構の調査の図表  
 52. 遺構の調査の図表  
 53. 遺構の調査の図表  
 54. 遺構の調査の図表  
 55. 遺構の調査の図表  
 56. 遺構の調査の図表  
 57. 遺構の調査の図表  
 58. 遺構の調査の図表  
 59. 遺構の調査の図表  
 60. 遺構の調査の図表  
 61. 遺構の調査の図表  
 62. 遺構の調査の図表  
 63. 遺構の調査の図表  
 64. 遺構の調査の図表  
 65. 遺構の調査の図表  
 66. 遺構の調査の図表  
 67. 遺構の調査の図表  
 68. 遺構の調査の図表  
 69. 遺構の調査の図表  
 70. 遺構の調査の図表  
 71. 遺構の調査の図表  
 72. 遺構の調査の図表  
 73. 遺構の調査の図表  
 74. 遺構の調査の図表  
 75. 遺構の調査の図表  
 76. 遺構の調査の図表  
 77. 遺構の調査の図表  
 78. 遺構の調査の図表  
 79. 遺構の調査の図表  
 80. 遺構の調査の図表  
 81. 遺構の調査の図表  
 82. 遺構の調査の図表  
 83. 遺構の調査の図表  
 84. 遺構の調査の図表  
 85. 遺構の調査の図表  
 86. 遺構の調査の図表  
 87. 遺構の調査の図表  
 88. 遺構の調査の図表  
 89. 遺構の調査の図表  
 90. 遺構の調査の図表  
 91. 遺構の調査の図表  
 92. 遺構の調査の図表  
 93. 遺構の調査の図表  
 94. 遺構の調査の図表  
 95. 遺構の調査の図表  
 96. 遺構の調査の図表  
 97. 遺構の調査の図表  
 98. 遺構の調査の図表  
 99. 遺構の調査の図表  
 100. 遺構の調査の図表



第18図 I 調査区SK4・5・6・7・9土壌

## (2) 遺物(第19~35図 表-4 図版18~26)

出土遺物は、総数980箱で、大半が窯跡やそれに伴うステ場、並びに焼壁土壌などの遺構内出土である。個々の内容については、遺構毎に表記し、その中の図示できた窯跡内及び焼壁土壌出土土器の主なものについて概括する。

須恵器 坏は、無台のものがほとんどで、体部は直線的に外傾ないしやや外反するものがある。底部切り離しは、回転糸切り無調整である。器高は、SQ11にみとめられる底径が大きく身の浅い土器群(第26図)と4cm前後のものに分けられる。SQ8出土の口縁部端が内湾する土器は、全体に大形で鉢と考えられる(第22図11・12)。

高台付坏は、数が少ない。高台は短く、体部は直線的に外傾する。焼成状況から、蓋を伴わないものもみとめられる(第26図19)。F-SK110では、口縁部を欠いた人面墨書土器がみとめられた(第34図10)。

皿は、口縁部が外反するもの、直線的に開くものに分けられる。全体に数は少ない。高台も直立するもの、外傾するものがあり、端部の畳付はややまるみを呈する。

壺は、覆土も含めSQ11がまとまっている。特に細頸壺は、焼成位置のまま検出された一群である(第27図1~4・6)。口縁部端は外面に突き出て、頸部接合部には細い突帯を巡らし、体部上半部に最大径をもつ。高台は、短く付く。SQ6ステ場からは、肩部のなだらかな瓶子(第19図11)、体部くの字形に内湾する小形土器(第19図11)がみとめられた。器高30cmを越える大形のもの、体部下半にタタキ目をもつ(第28図1)。広口の壺は、口縁部直立の短頸壺(第27図8)、小形無台で口縁部端が短く外反するもの(第27図7)、大形無台で口縁部が直線的に外傾し、体部外面及び底部にタタキ目をもつ一群(第28図2~5)である。

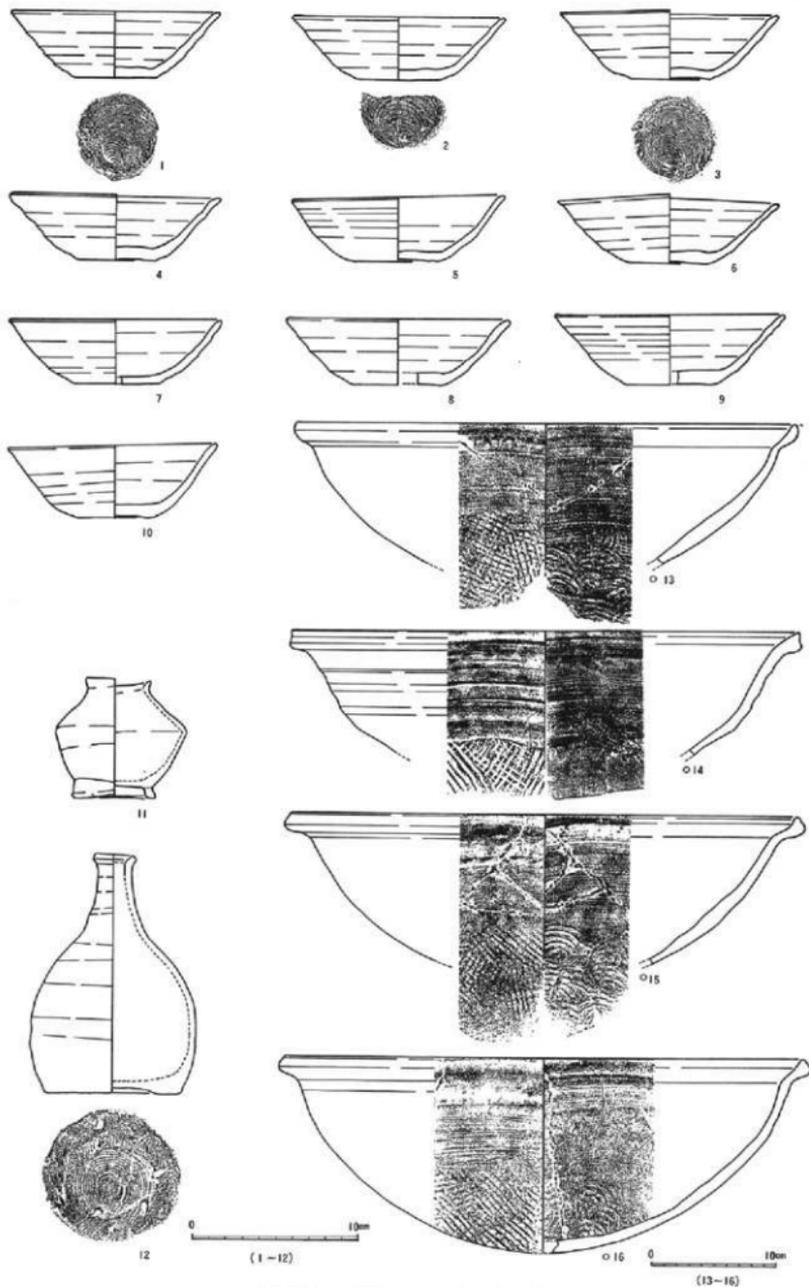
甕は、底部丸底で大小に分けられる。器高50cm大、口縁部は直立気味で、端は斜めに成形を行うもの(第29図1~3)、器高60cmを越え、口縁部端に突帯を呈し、その外面に隆起線を巡らすもの(第21図13)がある。

甕(第20・35図)は、6点検出され、内2面甕が2点である。出土位置からSQ6焼成とかがえられるものが、4点である(第20図14・15、第35図15・16)。脚部形態は、橋状(第20図14)、側縁部張り出し状(第20図14)、棒状(第35図13~15)である。

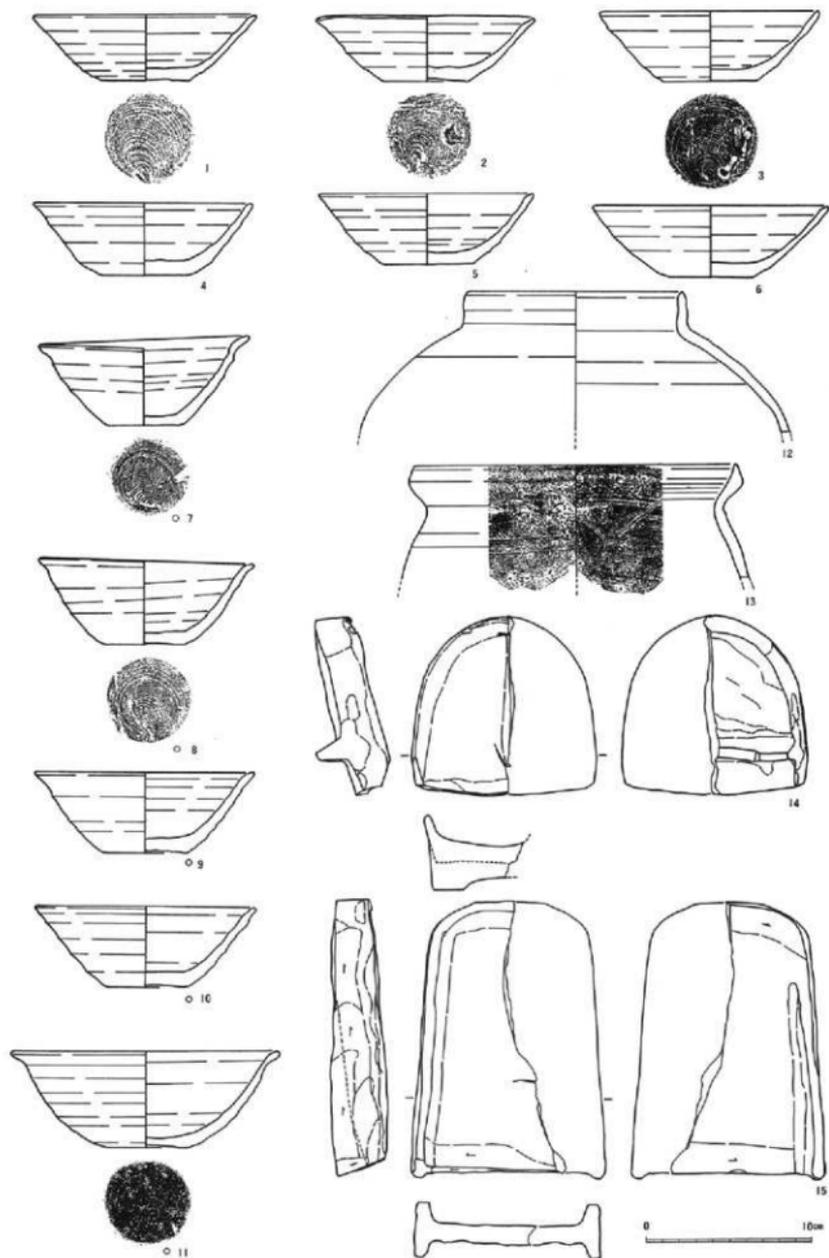
赤焼土器 坏は、須恵器の生焼けとの区分が明確ではないが、比較して身の深い特徴をもつ。SQ7・9には、体部外傾の弱い土器が含まれる。また、SQ12b出土に口径・底径とも大きく、見込み及び底部に火摩痕を残す一群が確認できた(第30図9~17)。

甕は、長胴底部丸底と小形で平底のものがある。口縁部形態は、くの字形に外反するもの、さらに口縁部端が直立ないし内湾する特徴をもつ。体部の削り調整は、顕著ではなく部分的にみとめられるのみである。

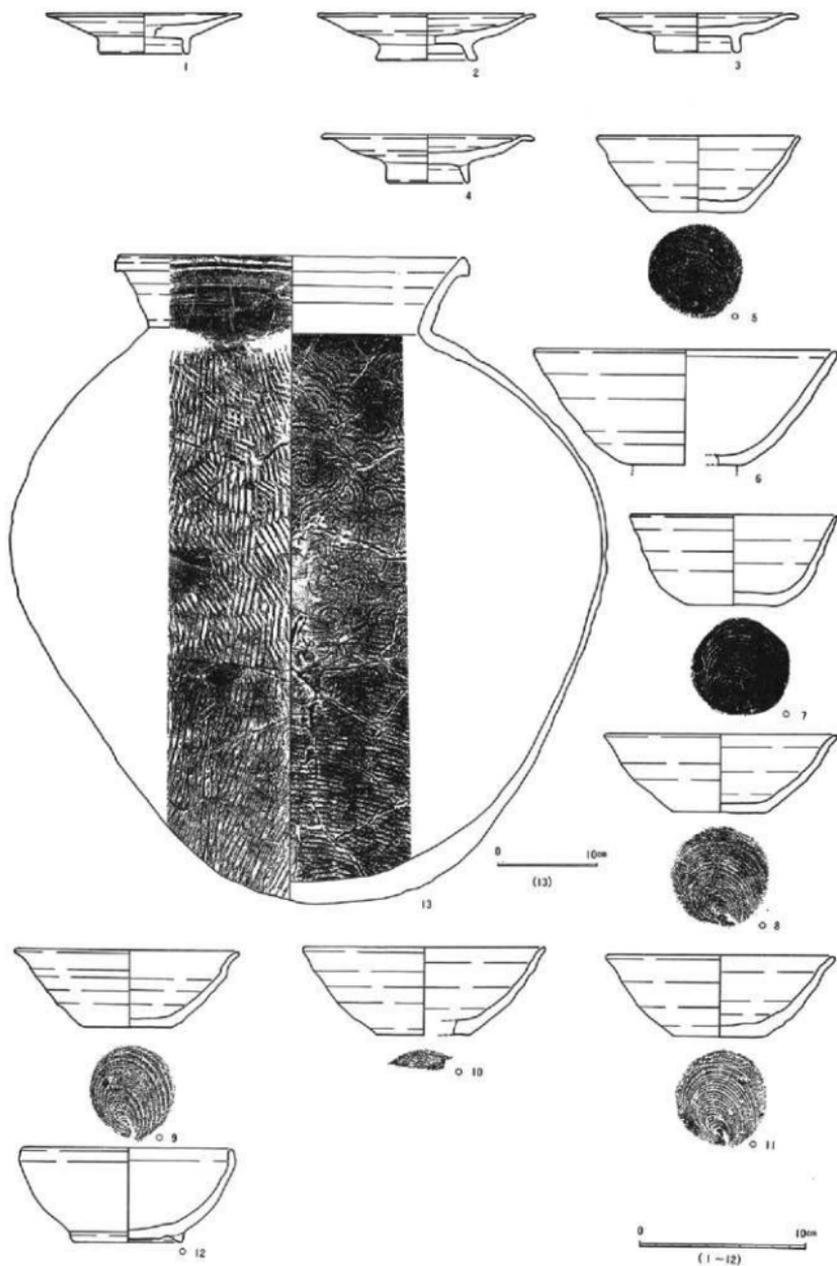
壺は、調整が内面ハケ目のもの(第19図14)もみとめられるがほぼ長胴甕に類似する。窯底出土では、SQ6・10がある。口縁部は大きく外反し、端部が短く屈曲して直立するもの(第19図14~16・第24図17)、丸みを呈するもの(第19図13)に分けられる。



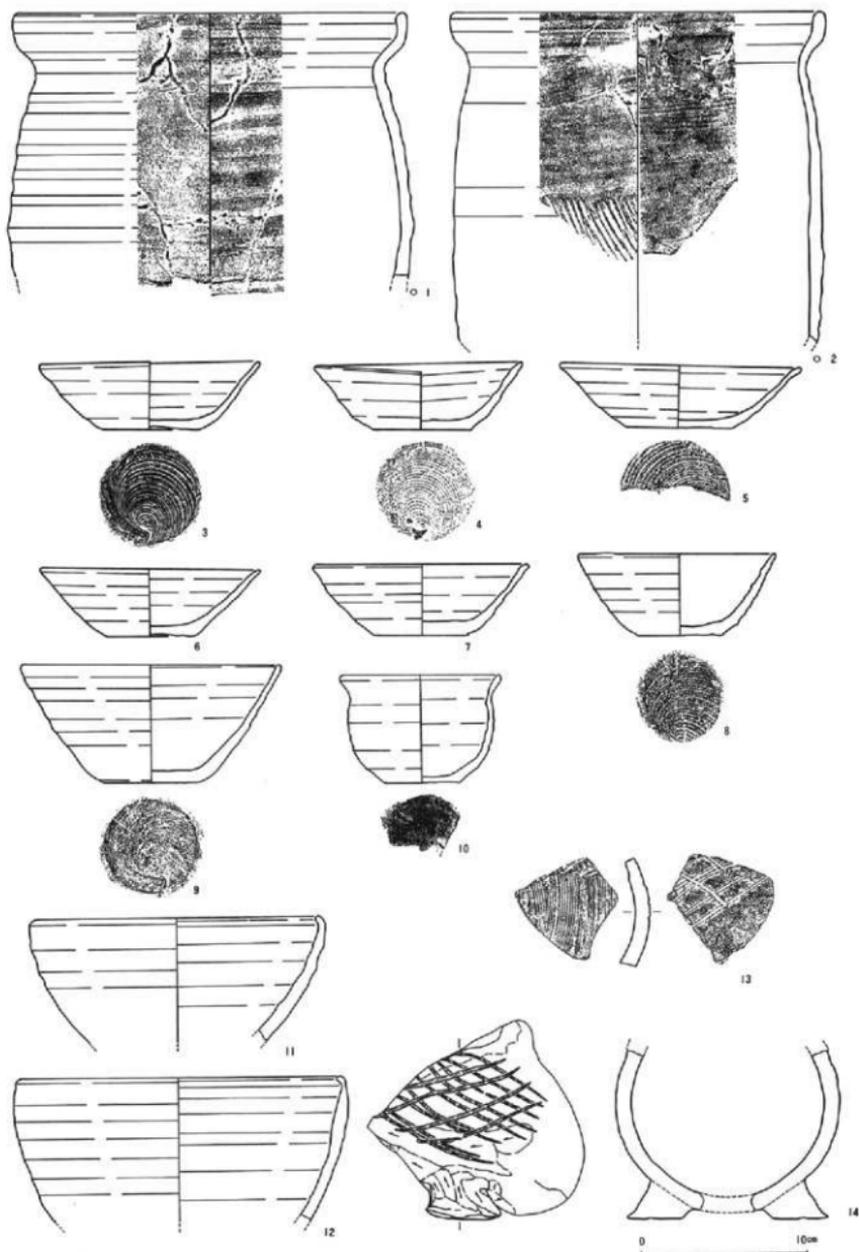
第19図 F調査区SQ5窯跡出土遺物 SQ6a・SQ6b窯跡出土遺物(1)



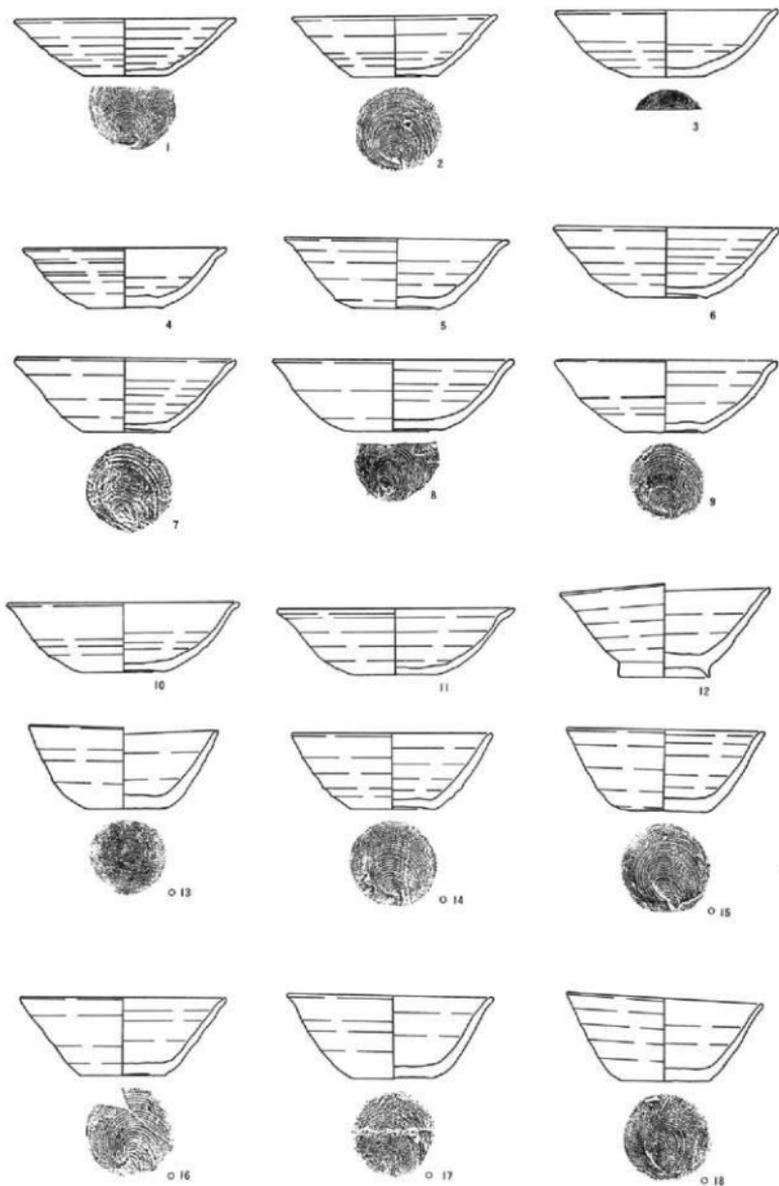
第20図 F調査区SQ6a・SQ6b窯跡出土遺物(2)



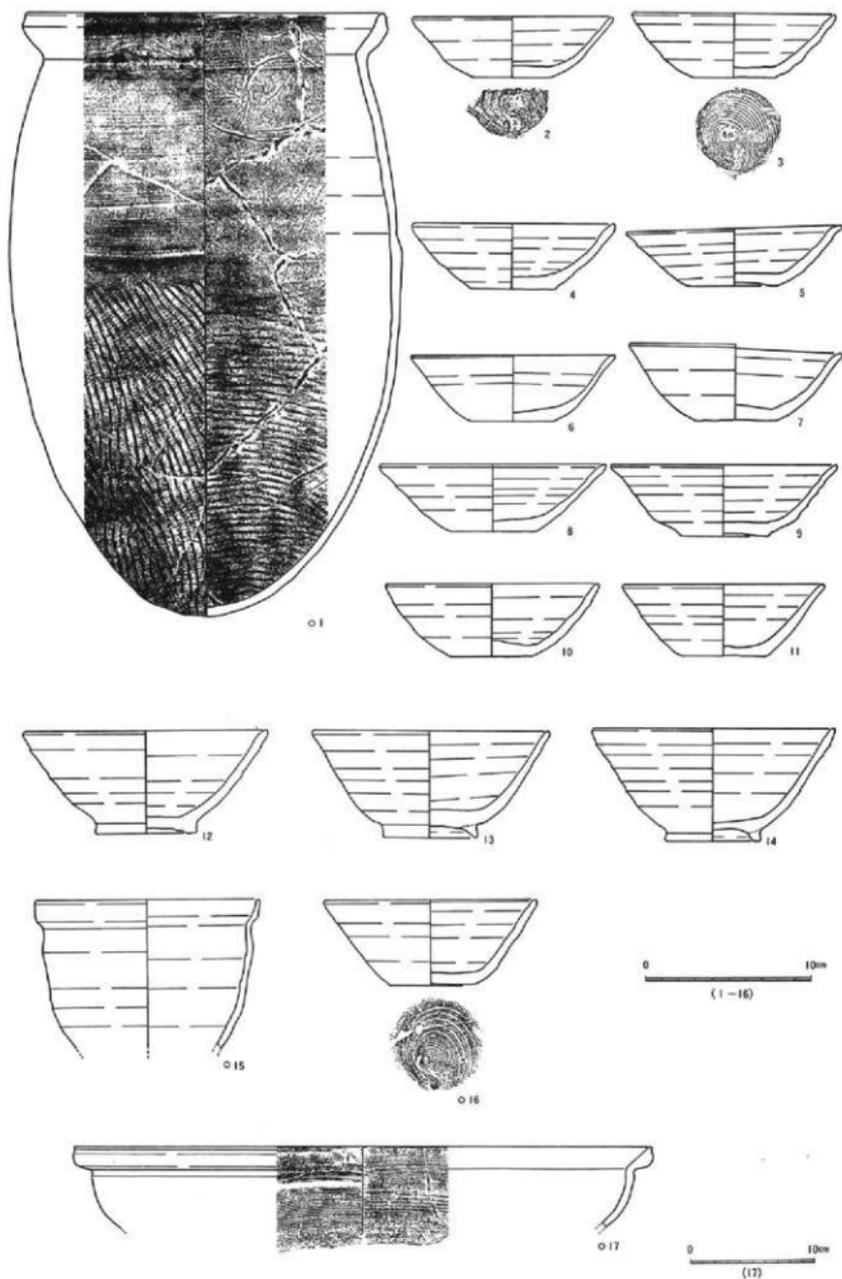
第21図 E調査区SQ7窯跡出土遺物(1)



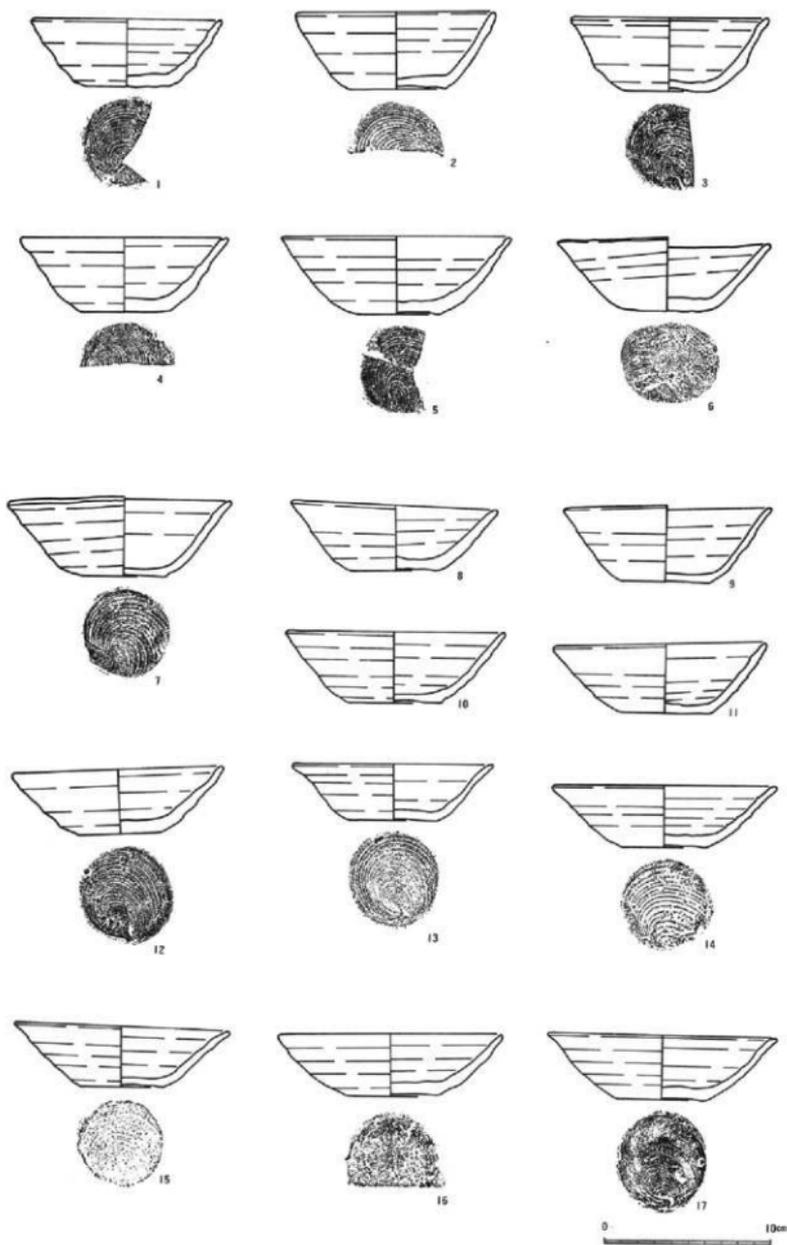
第22図 E調査区SQ7窯跡出土遺物(2) G調査区SQ8窯跡出土遺物



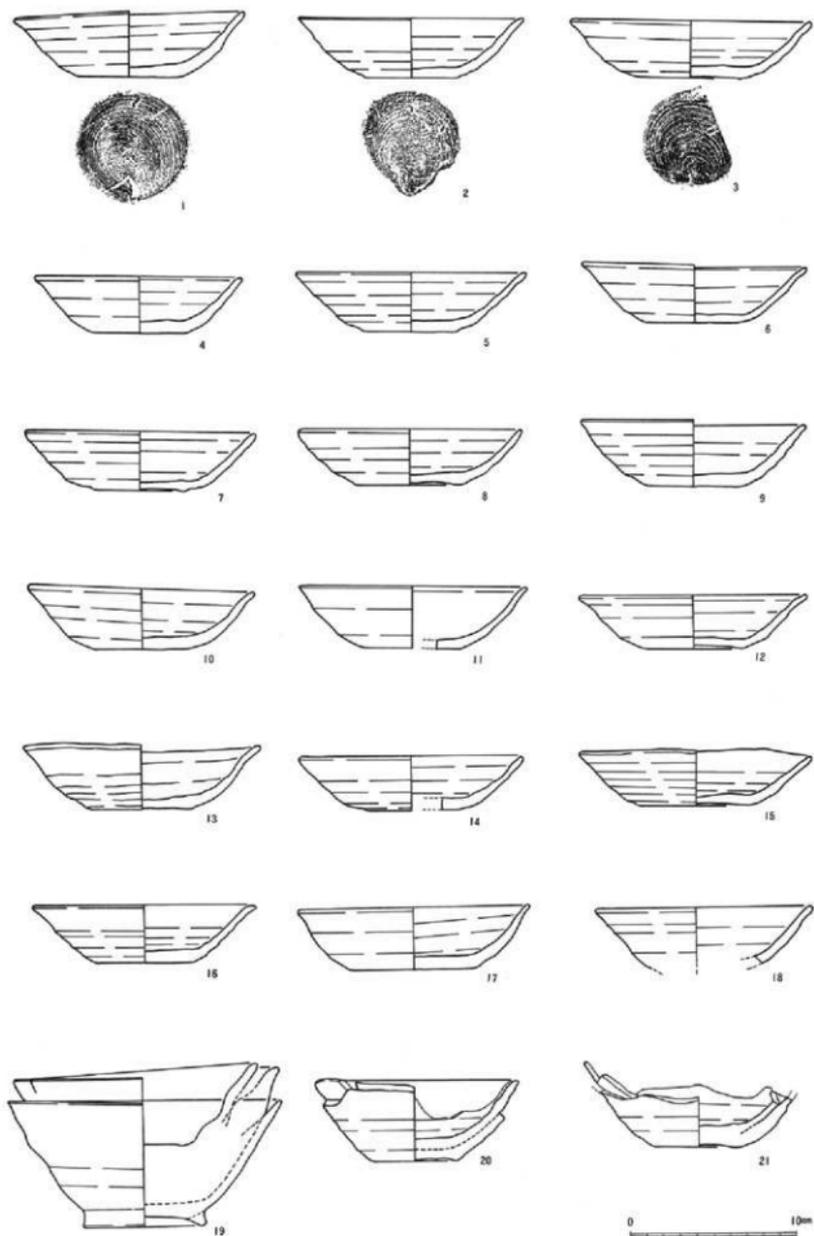
第23图 I 調査区SQ9窯跡出土遺物(1)



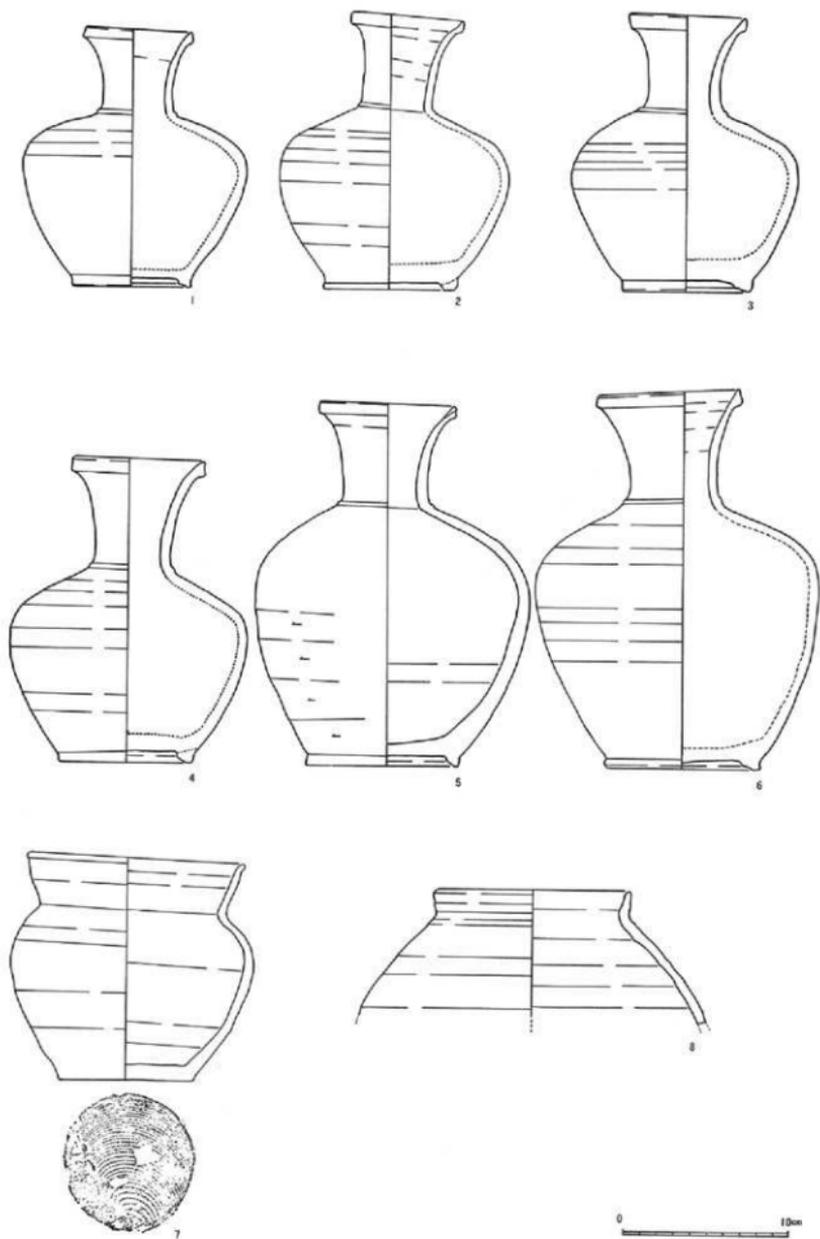
第24图 I 調査区SQ9窯跡出土遺物(2) SQ10窯跡出土遺物



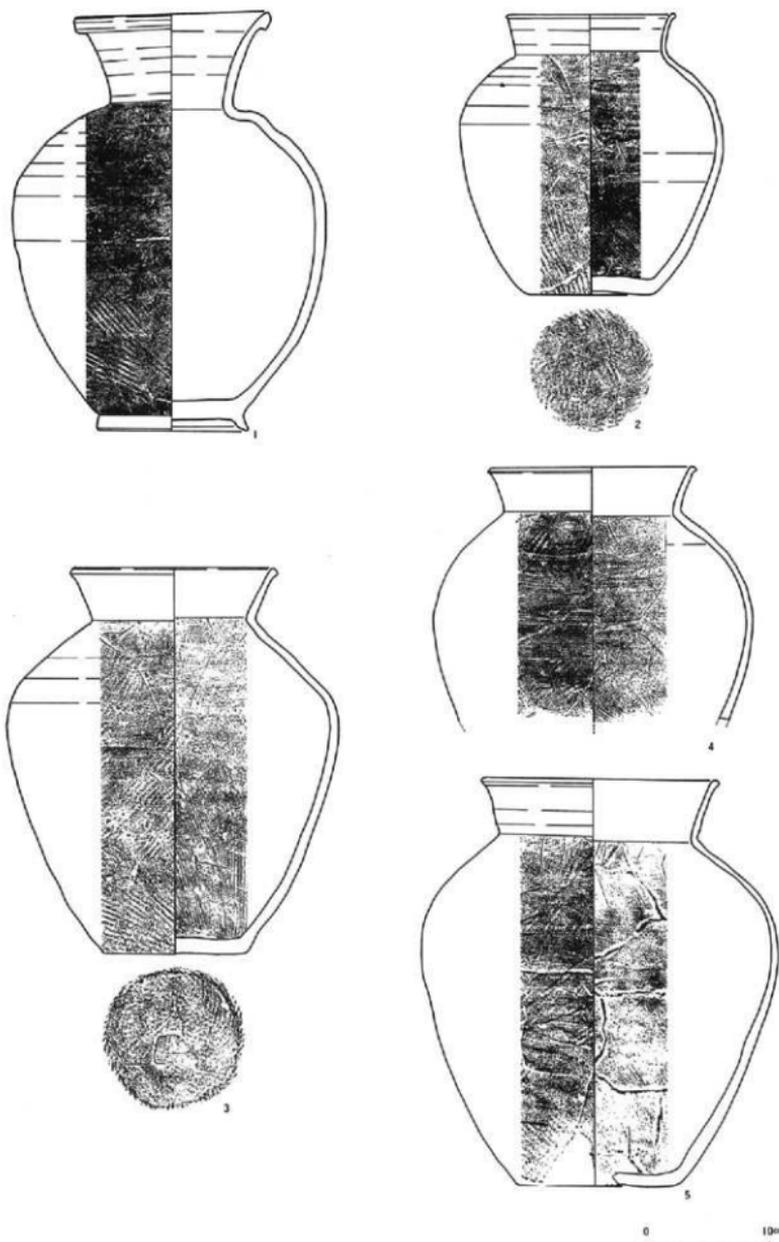
第25図 I 調査区SQ11窟跡出土遺物(1)



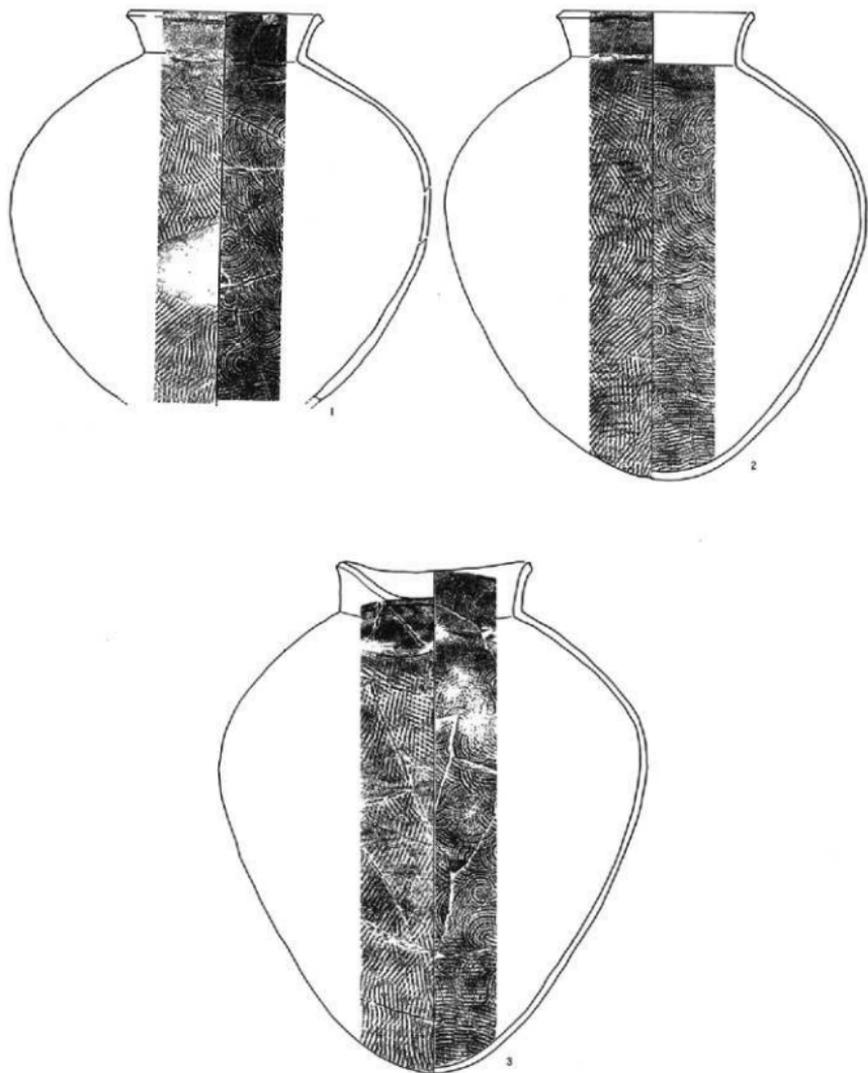
第26图 I 調査区SQ11察跡出土遺物(2)



第27図 I 調査区SQ11窯跡出土遺物(3)

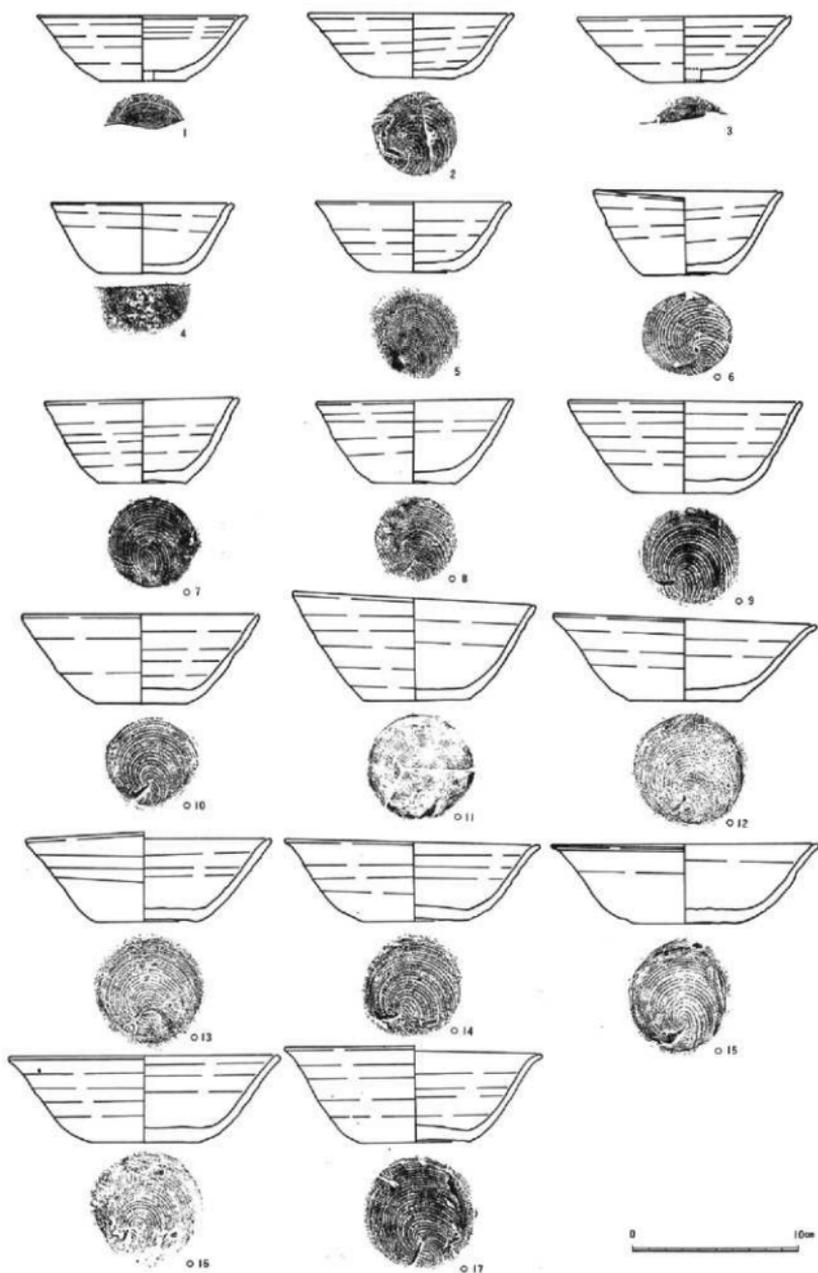


第28図 I 調査区SQ11窯跡出土遺物(4)

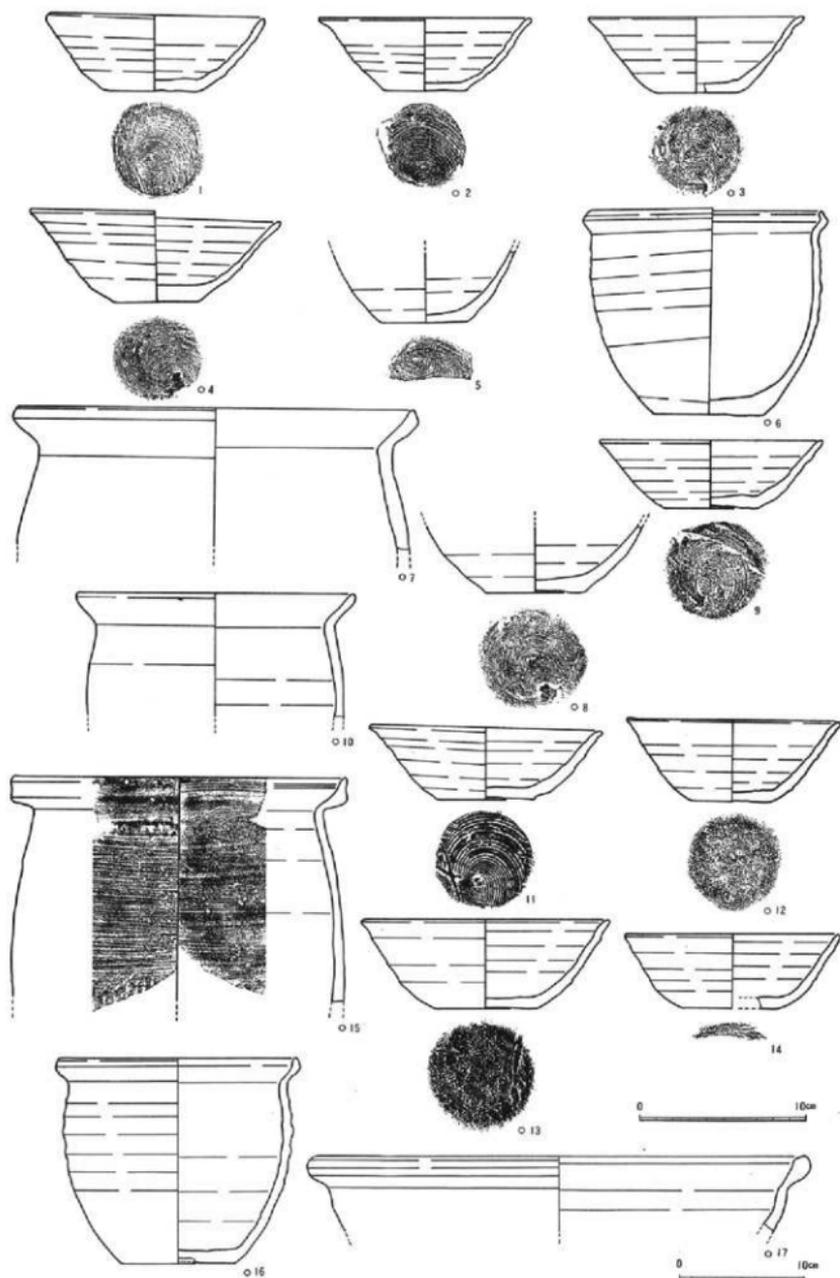


0 10cm

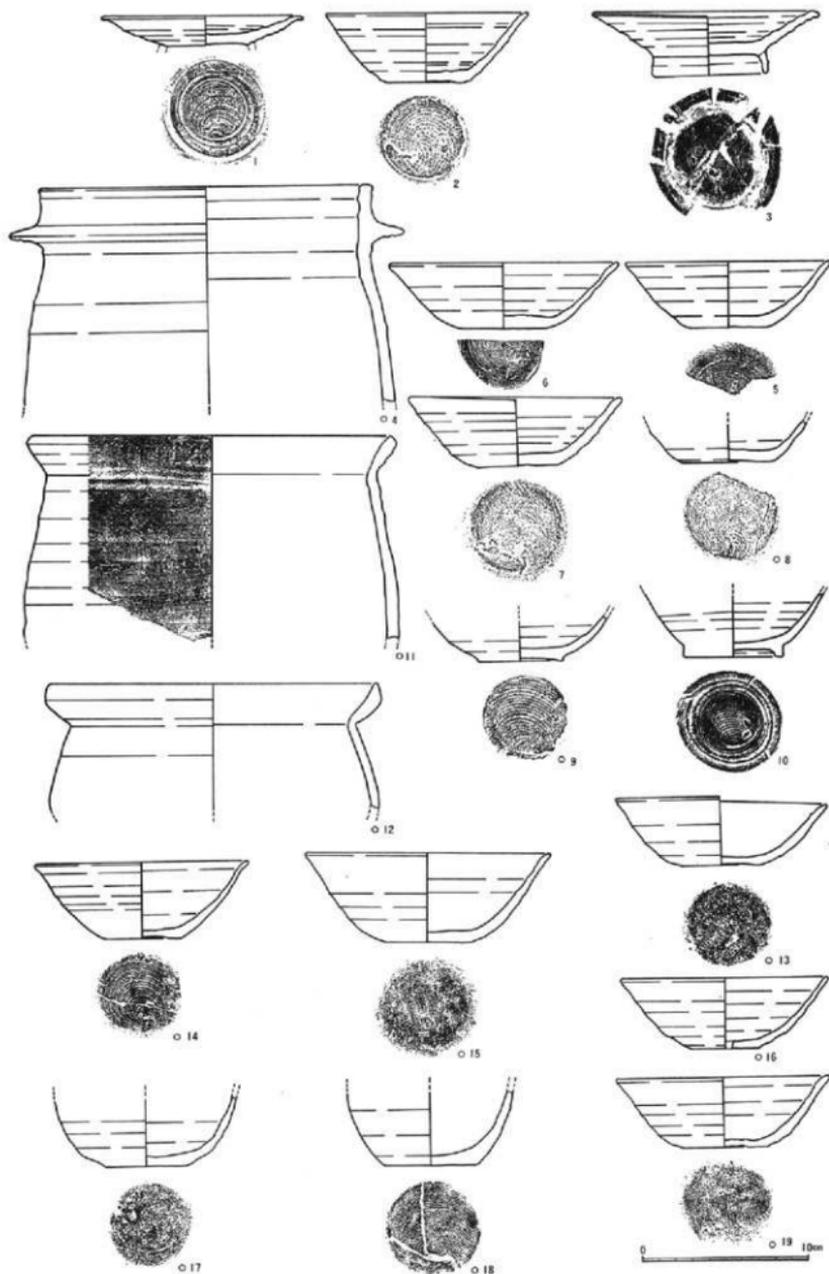
第29図 I 調査区SQ11窟跡出土遺物(5)



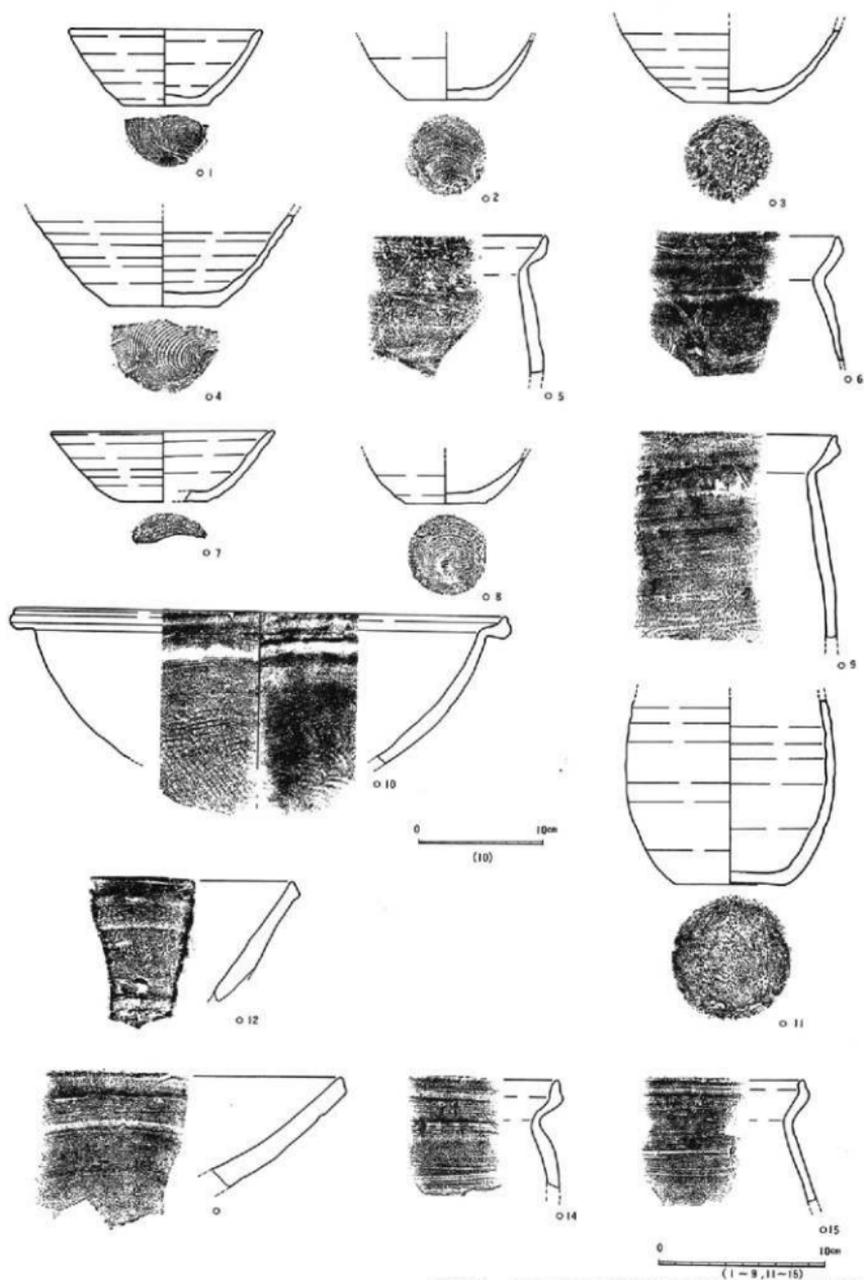
第30図 I調査区SQ12a・SQ12b窯跡出土遺物



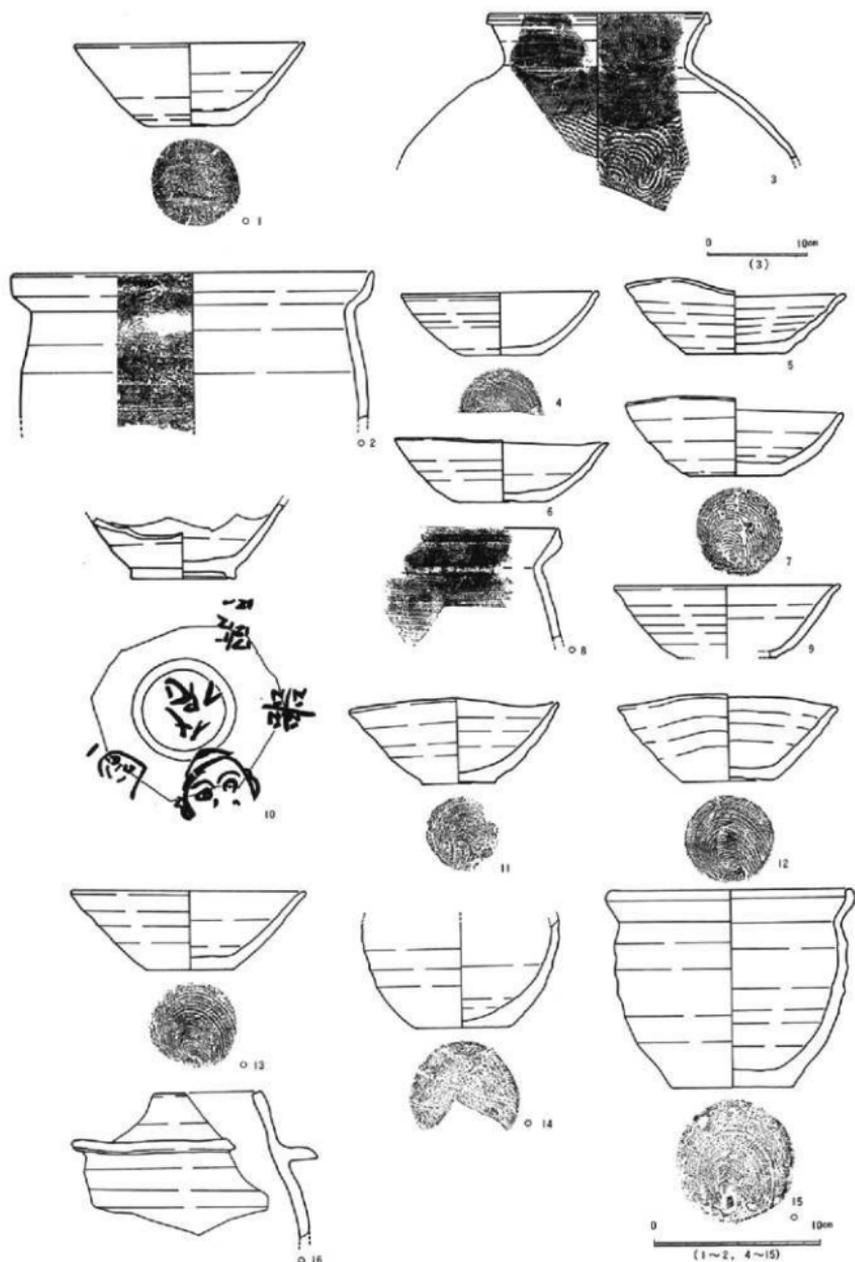
第31図 F調査区S K 2・24・25土壌、S K 17・18・29焼壁土壌出土土遺物



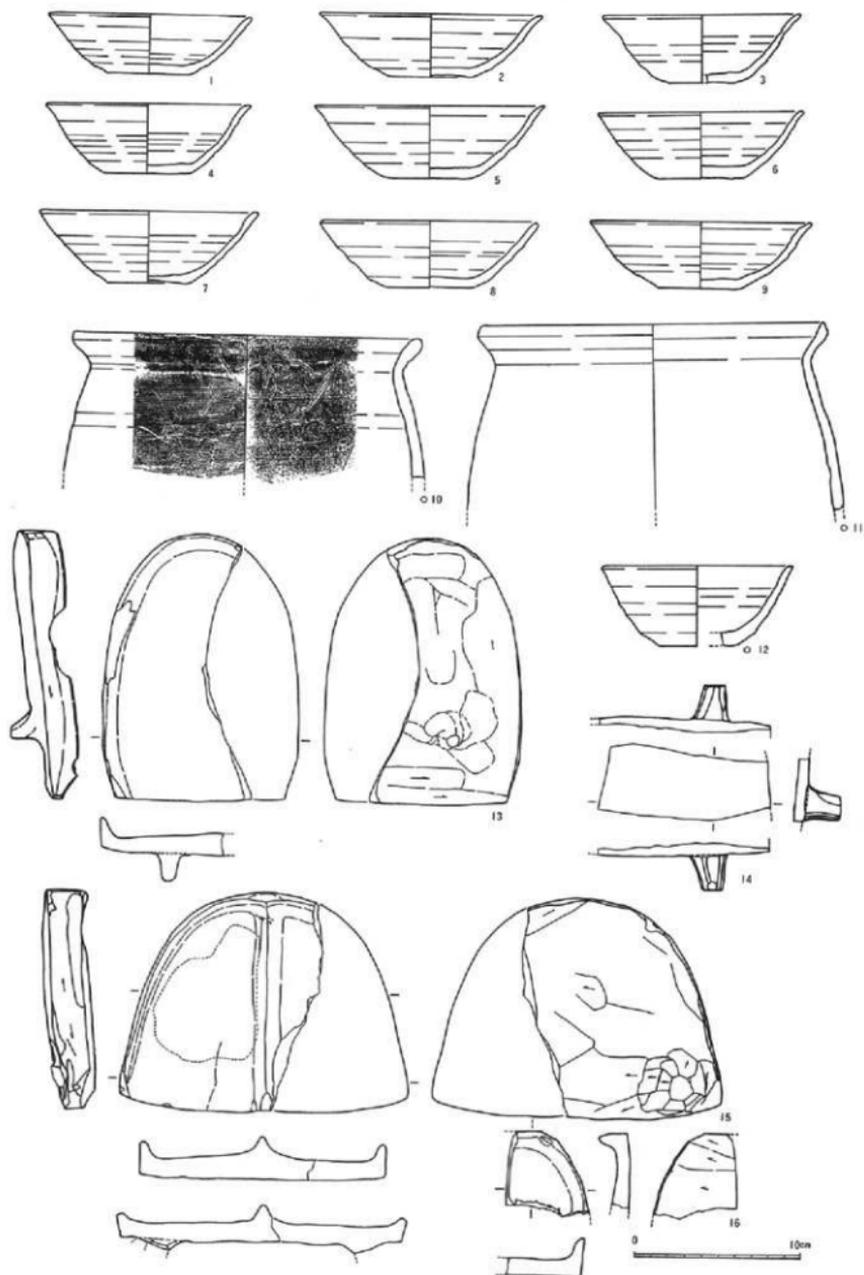
第32図 F調査区S K78・79・80・93・101土塚、S K96焼壁土壇出土遺物



第33图 F 調査区 S K 103・104 焼壁土壇、S K 102 土壇出土遺物



第34图 F調査区SK105・107・119・125・127焼壁土塊、SK110・187・196・198土塊、包含層出土遺物



第35図 F調査区包含層出土遺物 I調査区SK4・5・6・7・8・9土層、包含層出土遺物

表-2 山海窯跡群遺構計測表(1)

遺構番号	調査区	主軸方向	全長	燃焼部長	焼成部長	焚口部長	燃焼部長	焼成部長	焼成部勾配	備考
S Q 5	F	N-25°-E	(1.30m)	—	—	—	—	(1.04m)	24°	窯跡部のみ現存
S Q 6 a	F	N-2°-E	(2.78m)	(0.72m)	(2.06m)	—	1.54m	1.52m	24°	S Q 6 b 上段に併用
S Q 6 b	F	N-2°-E	(5.46m)	(2.34m)	(3.12m)	1.36m	1.48m	1.47m	30°	焚口部石垣 断続ピット(既P4)
S Q 7	E	N-59°-W	(6.60m)	1.40m	(5.20m)	1.28m	1.02m	1.24m	28°	焚口部石垣 断続ピット(既P4)
S Q 8	G	N-47°-W	7.00m	1.90m	5.10m	1.10m	1.20m	1.60m	30°	焚口部石垣 断続ピット(既P4)
S Q 9	I	N-76°-E	(3.38m)	1.54m	(1.84m)	0.90m	0.98m	1.06m	30°	焚口部石垣 断続ピット(既P11)
S Q 10	I	N-33°-E	(5.84m)	(1.60m)	(4.24m)	1.01m	1.24m	1.16m	23°	焚口部石垣 断続ピット(既P11)
S Q 11	I	N-35°-E	6.16m	2.16m	4.00m	1.36m	1.50m	1.74m	32°	焚口部石垣 断続ピット(既P11)
S Q 12 a	I	N-54°-E	(5.56m)	(2.68m)	(3.48m)	(1.12m)	1.20m	1.32m	33°	S Q 12 b 上位に併用
S Q 12 b	I	N-54°-E	(4.38m)	(2.24m)	(2.14m)	(1.48m)	1.30m	1.10m	29°	焚口部石垣 断続ピット(既P11)

表-3 山海窯跡群遺構計測表(2)

遺構番号	探照番号	図版番号	調査区	検出地区(グリッド)	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	備考
S K 1	第6図	4	F	16-17-13-14	方形	1.84	1.48	0.29	焼壁(底面一部被熱) 粘土塊出土
S K 2	第6図	7	F	16-17-13	方形	2.27	1.75	0.45	焼壁(底面一部被熱)
E P 4	第7図	7	F	20-15	楕円形	0.98	0.92	0.10	S Q 6b 焚口部
S K 8	第14図	15	F	18-19-15	方形	1.77	1.74	0.35	焼壁(底面・壁面一部被熱)
S K 9	第14図	15	F	18-19-14-15	方形	1.64	1.52	0.36	焼壁(底面・壁面一部被熱)
S K 10	第14図	16	F	18-14-15	楕円形	1.40	0.58	0.52	粘土塊出土
S K 12	第16図	F	15-16-17	楕円形	1.57	1.17	2.00		
S K 15	第16図	F	16-16	楕円形	1.39	1.00	0.40		
S K 17	第15図	16	F	19-15	方形	2.90	1.24	0.58	焼壁(底面・壁面被熱)
S K 18	第15図	16	F	19-14-15	方形	2.78	2.20	0.74	焼壁(底面・壁面被熱)
S K 19	第14図	F	18-19-15	方形	(1.58)	—	0.36		
S K 25	第16図	F	26-15	楕円形	1.31	1.02	0.30	粘土塊出土	
S K 26	第16図	16	F	17-15	円形	1.38	1.26	0.36	EPの一部被熱
S K 29 a	第17図	15	F	15-17-18	方形	1.96	1.72	0.40	焼壁(底面・壁面被熱)
S K 29 b	第17図	15	F	15-17-18	楕円形 (既P4部分)	(2.36)	1.48	0.20	焼壁(底面・壁面被熱)
S P 31	第6図	F	16-14-15	楕円形	0.86	0.38	0.17		
S P 32	第6図	F	16-17-14	楕円形	0.88	0.54	0.15		
S P 33	第6図	16	F	16-12	円形	0.67	0.60	0.18	
S K 80	第17図	17	F	14-16	楕円形	1.66	1.24	0.72	粘土探掘坑 遺物(RW68)出土
S P 90	第16図	F	15-16-16	円形	0.27	0.23	0.16		
S K 96	第15図	16	F	19-15	方形	3.04	2.72	0.69	焼壁(底面・壁面被熱)
S K 101	第16図	16	F	15-17	楕円形	1.42	1.20	0.26	
S K 102	第16図	F	16-16	円形	1.86	1.46	0.40		
S K 103	第16図	F	16-15-16	方形	1.75	1.52	0.32	焼壁(底面・壁面一部被熱)	
S K 104	第16図	F	16-15-16	方形	1.60	1.77	0.24	焼壁(底面・壁面一部被熱)	
S K 105	第16図	16	F	16-16-17	円形	1.40	1.15	0.20	焼壁(底面・壁面一部被熱)
S K 106	第16図	16	F	15-17	楕円形	1.66	0.98	0.56	上の壁土層はSK109に下ろす かは不明
SK107 a	第16図	15-16	F	15-16-17	不明	(0.72)	(0.56)	0.30	焼壁(底面・壁面被熱) 焼壁壁面にオーバーハンダする
SK107 b	第16図	15-16	F	15-16-17	方形	1.22	1.20	0.30	
S K 109	第16図	16	F	16-17	楕円形	0.98	0.67	0.44	
S K 112	第16図	16	F	15-16-17	円形	1.32	1.14	0.76	
S K 117	第16図	F	15-16-17	楕円形	1.52	1.36	0.18		
S K 119	第16図	15	F	16-16	方形	0.92	0.72	0.32	焼壁(底面・壁面被熱)
S D 120	第16図	16	F	15-16	溝状	3.36	0.18	0.82	
S K 126	第16図	F	17-15	楕円形	1.14	1.02	0.06	焼壁(底面一部被熱)	
S K 127	第16図	F	16-15	楕円形	1.44	1.22	0.12	焼壁(底面被熱)	
S K 128	第16図	F	16-15	楕円形	1.72	1.18	0.24	焼壁(底面・壁面一部被熱)	
S P 129	第16図	F	16-15	楕円形	0.82	0.50	0.12		
S K 131	第16図	16	F	15-17	円形	1.58	0.98	1.32	
S K 132	第16図	F	16-16	楕円形	1.34	1.14	0.24		
S K 133	第16図	F	16-16	楕円形	1.10	0.92	0.36		
S P 138	第16図	F	16-15-16	楕円形	0.56	0.42	0.54		
S P 142	第16図	F	16-15	円形	0.78	0.73	0.14		
S K 143	第16図	F	16-15	楕円形	1.00	0.96	0.19		
S K 150	第16図	F	16-17-15-16	方形	1.68	1.28	0.06		
S K 151	第16図	F	16-17-15-16	楕円形	0.82	0.48	0.22		
S P 152	第16図	F	17-16	円形	0.24	0.20	—		

遺構番号	探出番号	図版番号	調査区	検出地区(グリッド)	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	備 考
S P 153	第16回		F	16-16	円形	0.46	0.42	0.78	
S P 154	第16回		F	16-16	円形	0.32	0.32	1.12	
S P 155	第16回		F	16-16	楕円形	0.52	0.46	0.96	
S P 166	第16回		F	16-16	楕円形	0.46	0.42	1.08	
S P 171	第16回		F	16-16	円形	0.30	0.26	0.42	
S P 172	第16回		F	15-16	円形	0.36	0.26	0.50	
S P 173	第16回		F	16-16	円形	0.52	0.48	0.44	
S P 176	第16回		F	15-17	円形	0.28	0.26	0.04	
S P 177	第16回		F	15-17	円形	0.38	0.38	0.40	
S K 183	第16回		F	16-16	円形	1.64	1.62	0.60	壁面一部被熱
S K 193	第17回		F	22-23-11	楕円形	2.52	0.88	1.64	粘土探掘坑
S K 201	第16回		F	15-17	楕円形 (壁面被熱)	1.28	1.04	0.38	焼盤(底面被熱)
E P 1	第9回	9	G	4-5	楕円形	(0.59)	(0.41)	0.12	SQ 8 焚口部
S K 4	第18回	17	I	12-13-5	円形	1.10	0.98	0.25	
S K 5	第18回	17	I	12-13-5・6	不明	—	—	0.42	SK 5・6・9の切り合いは不明
S K 6	第18回	17	I	12-13-5・6	不明	—	—	0.70	ELを伴う 粘土塊出土
S K 7	第18回	17	I	11-12-5・6	楕円形	6.24	(1.78)	0.65	粘土塊出土
S K 8	第18回		I	13-5	楕円形	1.16	1.00	0.36	網多量出土
S K 9	第18回	17	I	12-13-5	不明	—	—	0.68	
E P 11	第10回	10	I	13-4	不明	0.90	—	0.12	SQ 9 焚口部 断面のみの観察
E P 12	第11回	11	I	7-11	不明	0.52	—	0.07	SQ10 焚口部 断面のみの観察
E P 13	第12回	12	I	7-11	不明	1.61	—	0.16	SQ11 焚口部 断面のみの観察
E P 14	第13回	13	I	4-13	不明	1.48	—	0.17	SQ12b 焚口部 断面のみの観察
S P 15	第18回		I	12-5	楕円形	0.53	0.46	0.35	
S P 16	第18回		I	12-5	楕円形	0.28	0.22	—	
S P 17	第18回		I	12-5	楕円形	0.42	0.31	0.18	

表一4 山海窯跡群出土遺物観察表

出土位置	部 類	形状	探出番号	調査区	計 測 値 (mm)			調 査 内 容			備 考
					口径	底径	脚径	厚	外 面	内 面	
F・SQ 5-Y	須恵器	埴	19-1	18	(128)	51	40	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・SQ 5-Y	須恵器	埴	19-2	18	(130)	50	38	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・SQ 5-F	須恵器	埴	19-3	18	183	48	41	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・SQ 5-Y	須恵器	埴	19-4	18	129	56	42	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・SQ 5-F	須恵器	埴	19-5	18	131	52	41	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・SQ 5-Y	須恵器	埴	19-6	18	134	48	41	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・SQ 5-Y	須恵器	埴	19-7	18	130	(52)	39	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・SQ 5-Y	須恵器	埴	19-8	18	(136)	(55)	40	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・SQ 5-Y	須恵器	埴	19-9	18	(140)	(54)	42	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・SQ 5-Y	須恵器	埴	19-10	18	129	48	44	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・SQ 6スタ堆	須恵器	甗	19-11	18	39	51	73	3	ロクロナデ・タタキ目・ヘラ削り	ロクロナデ	
F・SQ 6スタ堆	須恵器	甗	19-12	18	25	83	145	5	ロクロナデ	ロクロナデ	20-13G
F・SQ 6a-Y	赤焼土器	埴	19-13	18	406	—	(114)	8	タタキ目・平行タタキ目	タタキ目・青銅板アテ裏	
F・SQ 6a-Y	赤焼土器	埴	19-15	18	(412)	—	(122)	8	ロクロナデ・タタキ目・タタキ目	タタキ目・青銅板アテ裏	
F・SQ 6a-Y	赤焼土器	埴	19-16	18	(423)	—	(158)	8	タタキ目・タタキ目・タタキ目 部分のヘラ削り	タタキ目・青銅板アテ裏	
F・SQ 6b-Y	赤焼土器	埴	19-14	18	(414)	—	(100)	9	ロクロナデ・タタキ目	ハケ目	
F・SQ 6b-Y	須恵器	埴	20-1	18	135	54	40	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・SQ 6b-Y	須恵器	埴	20-2	18	133	51	40	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・SQ 6b-Y	須恵器	埴	20-3	19	(133)	58	43	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・SQ 6b-E P 4	須恵器	埴	20-4	19	(134)	54	44	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・SQ 6b-Y	須恵器	埴	20-5	19	(130)	54	43	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・SQ 6b-Y	須恵器	埴	20-6	19	(144)	53	44	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・SQ 6b-Y	赤焼土器	埴	20-7	19	129	46	51	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・SQ 6b-Y	赤焼土器	埴	20-8	19	131	50	50	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・SQ 6b-Y	赤焼土器	埴	20-9	19	134	52	51	5	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部、体部に黒染
F・SQ 6スタ堆	赤焼土器	埴	20-10	19	136	50	49	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・SQ 6スタ堆	赤焼土器	埴	20-11	19	(164)	50	58	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・SQ 6a-Y	赤焼土器	甗	20-12	19	(130)	—	—	7	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・SQ 6b-Y	赤焼土器	甗	20-13	20	(192)	—	(70)	6	ロクロナデ	ロクロナデ・タタキ目	二次焼成を受けている
F・SQ 6スタ堆	須恵器	甗	20-14	19	109 (82)	45	9	ヘラ削り			
F・SQ 6スタ堆	須恵器	甗	20-15	19	105 (119)	35	11	ヘラ削り			
E・SQ 7-Y	須恵器	甗	21-1	20	112	54	25	5	ロクロナデ	ロクロナデ	

出土位置	器 種	器 形	詳細番号	図面番号	計 測 値 (mm)				測 定		備 考
					口径	底径	器高	器厚	外 径	内 径	
E-SQ7-F	須恵土器	甕	21-2	20	134	62	29	6	ロクロナデ	ロクロナデ	
E-SQ7-Y	須恵土器	甕	21-3	20	124	52	24	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
E-SQ7-Y	須恵土器	甕	21-4	20	130	50	29	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
E-SQ7-Y	赤焼土器	杯	21-5	20	124	56	46	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
E-SQ7-F	須恵土器	杯	21-6	20	186	70	70	6	ロクロナデ	ロクロナデ	
E-SQ7-F	赤焼土器	杯	21-7	20	125	55	55	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
E-SQ7-Y	赤焼土器	杯	21-8	20	142	58	48	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
E-SQ7-Y	赤焼土器	杯	21-9	20	137	54	48	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
E-SQ7-F	赤焼土器	杯	21-10	20	(146)	(56)	54	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
E-SQ7-Y	赤焼土器	杯	21-11	20	(140)	55	50	6	ロクロナデ	ロクロナデ	
E-SQ7-Y	赤焼土器	高杯	21-12	20	133	66	58	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
E-SQ7-F	須恵土器	甕	21-13	20	351	—	664	4	ロクロナデ・タタキ目	ロクロナデ・同心円アテ 底・平段アテ底	
E-SQ7-Y	赤焼土器	甕	22-2	21	(228)	—	200	(8)	ロクロナデ・タタキ目	ロクロナデ	
E-SQ7-F	赤焼土器	甕	22-1	20	(234)	—	160	8	ロクロナデ	ロクロナデ	
G-SQ8-Y	須恵土器	杯	22-3	21	134	57	42	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
G-SQ8-Y	須恵土器	杯	22-4	21	125	59	40	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
G-SQ8-Y	須恵土器	杯	22-5	21	(148)	66	39	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
G-SQ8-Y	須恵土器	杯	22-6	21	134	54	42	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
G-SQ8-Y	須恵土器	杯	22-7	21	132	56	43	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
G-SQ8-Y	須恵土器	杯	22-8	21	126	52	47	5	ロクロナデ	ロクロナデ	赤焼土器の二次焼成による黒化?
G-SQ8-Y	須恵土器	杯	22-9	21	(154)	58	72	5	ロクロナデ	ロクロナデ	二次焼成?
G-SQ8-Y	須恵土器	甕	22-10	21	(98)	42	66	3	ロクロナデ	ロクロナデ	
G-SQ8-Y	須恵土器	鉢	22-11	—	174	—	(76)	7	ロクロナデ	ロクロナデ	
G-SQ8-Y	須恵土器	鉢	22-12	—	(196)	—	(88)	6	ロクロナデ	ロクロナデ	
G-SQ8スタマ	須恵土器	甕	22-13	21	—	—	(66)	8	へら削り・沈線	ホキ目	鳥足状脚部をもつ
G-SQ8スタマ	須恵土器	甕	22-14	21	(126)	—	(121)	9.5	へら削り・沈線	ホキ目	鳥足状脚部をもつ
I-SQ9-Y	須恵土器	杯	23-1	—	(135)	53	35	3	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ9-Y	須恵土器	杯	23-2	21	124	50	37	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ9-Y	須恵土器	杯	23-3	—	136	45	41	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ9-Y	須恵土器	杯	23-4	—	124	45	37	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ9-Y	須恵土器	杯	23-5	—	(136)	53	43	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ9-Y	須恵土器	杯	23-6	21	(138)	50	43	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ9-Y	須恵土器	杯	23-7	21	(134)	53	45	3	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ9-Y	須恵土器	杯	23-8	—	(145)	(46)	48	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ9-Y	須恵土器	杯	23-9	21	(136)	46	44	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ9-F	須恵土器	杯	23-10	—	(142)	(50)	42	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ9-Y	須恵土器	杯	23-11	—	(144)	52	40	3	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ9-F	須恵土器	高杯	23-12	21	(127)	54	53	3	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ9-F	赤焼土器	杯	23-15	22	120	54	50	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ9-F	赤焼土器	杯	23-17	22	(125)	50	51	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ9-新形	赤焼土器	杯	23-13	22	117	45	50	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ9-新形	赤焼土器	杯	23-14	21	122	52	47	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ9-新形	赤焼土器	杯	23-16	21	(126)	52	48	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ9-新形	赤焼土器	杯	23-18	22	120	54	50	3	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ9-F	赤焼土器	甕	24-1	22	223	—	366	5	ロクロナデ・へら削り・タタキ目	ホキ目・タタキ目	蓋部欠落
I-SQ10-Y	須恵土器	杯	24-2	—	(122)	48	37	3	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ10-Y	須恵土器	杯	24-3	—	(124)	50	39	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ10-Y	須恵土器	杯	24-4	—	(124)	51	40	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ10-Y	須恵土器	杯	24-5	22	132	52	35	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ10-Y	須恵土器	杯	24-6	22	124	50	40	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ10-Y	須恵土器	杯	24-7	22	130	49	47	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ10-Y	須恵土器	杯	24-8	—	(138)	52	41	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ10-Y	須恵土器	杯	24-9	22	138	51	43	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ10-Y	須恵土器	杯	24-10	—	(136)	50	45	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ10-F	須恵土器	杯	24-11	22	124	51	44	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ10-F	須恵土器	高杯	24-12	—	(148)	62	62	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ10-Y	須恵土器	高杯	24-13	22	144	56	65	6	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ10-Y	須恵土器	高杯	24-14	22	(148)	58	69	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ10-Y	赤焼土器	甕	24-15	—	138	—	(90)	3	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ10-Y	赤焼土器	杯	24-16	22	130	58	52	6	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ10-Y	赤焼土器	杯	24-17	—	(470)	—	(65)	7	ホキ目	ホキ目	
I-SQ11-Y	須恵土器	杯	25-1	—	(130)	53	42	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ11-F	須恵土器	杯	25-2	—	(122)	60	47	6	ロクロナデ	ロクロナデ	
I-SQ11-Y	須恵土器	杯	25-3	—	(130)	52	45	5	ロクロナデ	ロクロナデ	

出土位置	器種	器形	発掘番号	図番番号	計測値 (mm)				測 量		備 考
					口径	経径	器高	器厚	外	内	
I・SQ11-Y	須恵器	坏	25-4		(136)	(56)	45	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ11-F	須恵器	坏	25-5		(140)	(52)	47	6	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ11-Y	須恵器	坏	25-6	22	130	58	45	6	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ11-Y	須恵器	坏	25-7	22	135	52	48	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ11-Y	須恵器	坏	25-8	22	126	56	40	6	ロクロナデ	ロクロナデ	二次焼成
I・SQ11-Y	須恵器	坏	25-9	22	130	54	46	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ11-F	須恵器	坏	25-10		116	58	42	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ11-F	須恵器	坏	25-11	23	(130)	56	40	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ11-F	須恵器	坏	25-12	23	128	52	40	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ11-Y	須恵器	坏	25-13		(126)	54	35	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ11-Y	須恵器	坏	25-14		(136)	52	38	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ11-Y	須恵器	坏	25-15	23	132	52	38	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ11-F	須恵器	坏	25-16		(136)	54	39	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ11-F	須恵器	坏	25-17		(140)	54	40	5	ロクロナデ	ロクロナデ	跡がみもつ
I・SQ11-F	須恵器	坏	26-1	23	140	64	39	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ11-Y	須恵器	坏	26-2		(138)	57	36	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ11-F	須恵器	坏	26-3		148	60	35	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ11-Y	須恵器	坏	26-4		(120)	(58)	34	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ11-F	須恵器	坏	26-5		(140)	56	36	5	ロクロナデ	ロクロナデ	底部に黒炭
I・SQ11-F	須恵器	坏	26-6	23	138	60	35	4	ロクロナデ	ロクロナデ	底部に黒炭
I・SQ11-F	須恵器	坏	26-7		(140)	54	36	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ11-F	須恵器	坏	26-8		(135)	65	34	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ11-Y	須恵器	坏	26-9	23	138	58	41	6	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ11-Y	須恵器	坏	26-10	23	139	58	41	50	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ11-F	須恵器	坏	26-11		(138)	(60)	38	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ11-F	須恵器	坏	26-12		(150)	(60)	33	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ11-Y	須恵器	坏	26-13	23	142	62	40	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ11-F	須恵器	坏	26-14		(135)	(56)	33	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ11-F	須恵器	坏	26-15		142	68	35	6	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ11-F	須恵器	坏	26-16		(136)	6	35	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ11-Y	須恵器	坏	26-17	23	141	64	37	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ11-F	須恵器	坏	26-18	23	133	—	(36)	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ11x7土師	須恵器	黄砂坏	26-19	23	111	75	75	5	ロクロナデ	ロクロナデ	3枚重ね土師
I・SQ11-Y	須恵器	坏	26-20		129	52	42	5	ロクロナデ	ロクロナデ	2枚重ね土師
I・SQ11-Y	須恵器	坏	26-21		—	54	52	5	ロクロナデ	ロクロナデ	2枚重ね土師
I・SQ11-Y	須恵器	甕	27-1	23	64	71	157	8	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ11-Y	須恵器	甕	27-2	23	69	80	167	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ11-Y	須恵器	甕	27-3	23	70	76	170	7	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ11-Y	須恵器	甕	27-4	23	81	81	184	6	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ11-F	須恵器	甕	27-5	23	82	92	221	6	ロクロナデ・ハタ削り	ロクロナデ	
I・SQ11-Y	須恵器	甕	27-6	23	85	95	230	5	ロクロナデ・ハタ削り	ロクロナデ	
I・SQ11-F	須恵器	甕	27-7	23	132	82	136	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ11-F	須恵器	甕	27-8		(120)	—	78	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ11-F	須恵器	甕	28-1	24	155	120	337	8	ロクロナデ・カキ目 ハタ削り・タタキ目	カキ目・ハタ削り	
I・SQ11-F	須恵器	甕	28-2	24	137	102	228	5	ロクロナデ・カキ目 ハタ削り・タタキ目	ロクロナデ・ハタ削り	
I・SQ11-F	須恵器	甕	28-3	24	173	114	315	7	ロクロナデ・カキ目・タタキ目	カキ目・ロクロナデ・ハタ削り	
I・SQ11-F	須恵器	甕	28-4	24	(176)	—	(270)	8	カキ目・タタキ目 ロクロナデ・ハタ削り	カキ目・ロクロナデ・ハタ削り	
I・SQ11-Y	須恵器	甕	28-5	24	191	(124)	331	6	ロクロナデ・カキ目 タタキ目・ハタ削り	カキ目・ハタ削り	
I・SQ11-Y	須恵器	甕	29-1	24	192	—	(396)	8	ロクロナデ・カキ目・タタキ目	カキ目・ハタ削り・タタキ目 カキ目・ハタ削り・タタキ目	
I・SQ11-Y	須恵器	甕	29-2	24	190	—	238	7	ロクロナデ・カキ目・タタキ目	カキ目・ハタ削り・タタキ目	
I・SQ11-F	須恵器	甕	29-3	25	192	—	521	7	ロクロナデ・カキ目・タタキ目	カキ目・ハタ削り・タタキ目	
I・SQ12a-Y	須恵器	坏	30-3		(130)	(45)	40	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ12a-F	赤洗土師	坏	30-6	25	116	52	50	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ12b-Y	須恵器	坏	30-1		(128)	(52)	40	3	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ12b-Y	須恵器	坏	30-2	25	125	50	39	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ12b-Y	須恵器	坏	30-4		(112)	50	45	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	二次焼成
I・SQ12b-F	須恵器	坏	30-5	25	(120)	50	43	6	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ12b-F	赤洗土師	坏	30-7	25	118	54	51	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ12b-F	赤洗土師	坏	30-8	25	120	50	51	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ12b-F	赤洗土師	坏	30-9	25	145	60	56	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ12b-F	赤洗土師	坏	30-10	25	145	56	54	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ12b-F	赤洗土師	坏	30-11	25	148	64	62	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ12-F	赤洗土師	坏	30-12	25	158	67	50	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・SQ12b-Y	赤洗土師	坏	30-13	25	150	62	52	5	ロクロナデ	ロクロナデ	

出土位置	器 種	形 態	測器番号	探検番号	計 測 値 (mm)				調 査 内 容		備 考
					口徑	底徑	器高	器厚	外 観	内 観	
I・S Q12 b-F	赤焼土器	杯	30-14	25	156	60	48	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・S Q12 b-F	赤焼土器	杯	20-15	25	162	61	47	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・S Q12 b-F	赤焼土器	杯	30-16	25	165	65	52	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・S Q12 b-F	赤焼土器	杯	30-17	25	158	68	55	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K 2-F	須恵器	杯	31-1		133	55	45	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K17-F	赤焼土器	杯	31-2	26	131	50	44	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K17-F	赤焼土器	杯	31-3		(130)	(50)	46	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K17-F	赤焼土器	杯	31-4	26	152	51	55	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K17-F	須恵器	杯	31-5		—	51	(42)	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K17-F	赤焼土器	罎	31-6	26	149	67	126	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K17-F	赤焼土器	罎	31-7		249	—	(86)	9	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K18-F	赤焼土器	杯	31-8		—	60	(40)	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K18-F	須恵器	杯	31-9	26	131	57	42	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K18-F	赤焼土器	罎	31-10		(170)	—	(75)	6	ロクロナデ・カキ目	ロクロナデ	
F・S K24-F	須恵器	杯	31-11		142	60	44	6	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K25-F	赤焼土器	杯	31-12		(130)	49	50	5	ロクロナデ	ロクロナデ	R P31
F・S K25-F	赤焼土器	杯	31-13		(152)	60	55	5	ロクロナデ	ロクロナデ	R P31
F・S K29-F	須恵器	杯	31-14		(130)	(50)	47	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K29-F	赤焼土器	罎	31-15		200	—	(135)	7	ロクロナデ・カキ目	カキ目	
F・S K29-F	赤焼土器	罎	31-16	26	(144)	(70)	135	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K29-F	赤焼土器	罎	31-17		410	—	(63)	10	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K78-F	須恵器	罎	32-1		123	(55)	18	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K78-F	須恵器	杯	32-2		124	48	42	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K79-F	須恵器	罎	32-3	26	137	68	38	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K79-F	赤焼土器	羽振	32-4		(202)	—	(133)	7	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K80-F	須恵器	杯	32-5		(124)	(48)	40	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K80-F	須恵器	杯	32-6		(146)	(56)	(40)	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K80-F	須恵器	杯	32-7		131	53	42	6	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K80-F	赤焼土器	杯	32-8		—	55	(23)	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K80-F	赤焼土器	杯	32-9		—	52	(26)	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K80-F	須恵器	高杯	32-10		—	61	(38)	3	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K80-F	赤焼土器	罎	32-11		(224)	—	(123)	7	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K80-F	赤焼土器	罎	32-12		(200)	—	(77)	—	ロクロナデ		
F・S K93-F	赤焼土器	杯	32-13		127	60	41	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K93-F	赤焼土器	杯	32-15		(144)	53	54	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K96-F	赤焼土器	杯	32-14		(136)	46	47	3	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K96-F	赤焼土器	杯	32-16		(124)	(40)	43	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K96-F	赤焼土器	杯	32-17		—	48	(42)	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K101-F	赤焼土器	罎	33-10		—	57	45	5	ロクロナデ		
F・S K101-F	赤焼土器	杯	32-19		136	52	42	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K102-F	赤焼土器	杯	33-1		(115)	(52)	47	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K102-F	赤焼土器	杯	33-2		—	50	(36)	—	ロクロナデ		
F・S K102-F	赤焼土器	杯	33-3		—	52	(45)	6	ロクロナデ		
F・S K102-F	赤焼土器	杯	33-4		—	68	(55)	6	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K102-F	赤焼土器	罎	33-5		—	—	(83)	7	ロクロナデ		
F・S K102-F	赤焼土器	罎	33-6		—	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K103-F	赤焼土器	杯	33-7		(136)	(52)	43	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K103-F	赤焼土器	杯	33-8		—	50	(27)	5	ロクロナデ		
F・S K103-F	赤焼土器	罎	33-9		—	—	122	7.5	ロクロナデ		
F・S K103-F	赤焼土器	罎	33-10		(400)	—	(154)	10	ロクロナデ・カキ目・タタキ目	カキ目・背腹段アテ痕	
F・S K103-F	赤焼土器	杯	33-11		—	68	(113)	6	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K104-F	赤焼土器	罎	33-12		—	—	(74)	11	ロクロナデ		
F・S K104-F	赤焼土器	罎	33-13		—	—	(65)	11	ロクロナデ		
F・S K104-F	赤焼土器	罎	33-14		—	—	(65)	8	ロクロナデ・カキ目	カキ目	
F・S K104-F	赤焼土器	罎	33-15		—	—	(71)	5	ロクロナデ・カキ目	カキ目	外側一部黒褐色
F・S K105-F	須恵器	杯	34-4		(112)	46	38	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K105-F	須恵器	杯	34-5	26	134	60	38	5	ロクロナデ	ロクロナデ	R P43
F・S K105-F	須恵器	杯	34-6	26	131	55	39	5	ロクロナデ	ロクロナデ	R P42
F・S K107-F	赤焼土器	杯	34-1		140	52	50	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K107-F	赤焼土器	罎	34-2		226	—	(89)	7	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K107-F	須恵器	罎	34-3	26	220	—	(145)	10	ロクロナデ・ハケ目・タタキ目	ハケ目・アテ痕	
F・S K110-F	須恵器	高杯	34-10	26	—	64	(46)	4	ロクロナデ		器底に黒褐色 器底に黒褐色
F・S K119-F	須恵器	罎	34-8		(138)	—	45	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K119-F	赤焼土器	罎	34-9		—	—	(65)	6	ロクロナデ	ロクロナデ	

出土位置	器種	器形	図録番号	図解番号	計 測 値 (mm)				測 量		備 考
					口径	器径	器高	器厚	外 径	内 径	
F・S K125-F	須恵器	坏	34-7		132	55	43	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K127-F	赤焼土器	甕	34-14		—	60	(64)	7	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K187-F	須恵器	坏	34-11		132	44	50	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K196-F	須恵器	坏	34-12		126	53	49	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・S K198-F	赤焼土器	坏	34-13		142	53	48	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・I7-16G	赤焼土器	羽釜	34-16	26	—	—	—	7	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・7-10G	赤焼土器	甕	34-15		(142)	74	120	6	ロクロナデ	ロクロナデ	吉野ヘラ抜き「X」
I・S K3-F	須恵器	坏	35-1		(124)	50	36	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・S K3-F	須恵器	坏	35-2		(136)	47	38	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・S K3-F	須恵器	坏	35-3		(120)	(40)	41	3	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・S K3-F	須恵器	坏	35-4		(126)	51	43	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・S K3-F	須恵器	坏	35-5		(140)	46	45	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・S K3-F	須恵器	坏	35-6		(124)	49	41	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・S K6-F	赤焼土器	甕	35-10		210	—	84	7	ロクロナデ・カキ目	ロクロナデ	器底外面にヘラ抜きを もつ「X」
I・S K6-F	赤焼土器	甕	35-11		206	—	(114)	6	ロクロナデ・カキ目	ロクロナデ	
I・S K7-F	須恵器	坏	35-7		(134)	(50)	43	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・S K8-F	須恵器	坏	35-8		(132)	(52)	40	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・S K9-F	須恵器	坏	35-9		(134)	50	40	4	ロクロナデ	ロクロナデ	
I・S K9-F	赤焼土器	坏	35-12		(116)	(45)	49	5	ロクロナデ	ロクロナデ	
F・I4-13G	須恵器	甕	35-13	19	表5 163	81 (91)	38	10	ヘラ削り		
F・I8-12G	須恵器	甕	35-15	19	表5 192	88 (98)	28	26	ヘラ削り		R P64
F・I20-12G	須恵器	甕	35-16		表5 192	88 (91)	19	10	ヘラ削り		
I・4-12G	須恵器	甕	35-14	19	表5 191	88 (96)	—	—	ヘラ削り		
I・S Q12スタ堆	須恵器	甕		26-1	—	(117)	(42)	9	タタキ目	ロクロナデ	器底外面にヘラ抜きを もつ「X」
I・2-12G	須恵器	甕		26-1	—	180	(23)	12	タタキ目	ロクロナデ	器底外面にヘラ抜きを もつ「X」
F・S K80-F	木製品	倉物		26-2	—	227	(81)	3			R W08

※出土位置先頭のアルファベットは調査区を示し、末尾のアルファベットはFが覆土、Yが床面、Gがグリットを示している。

### 3 ま と め

調査は、平成3年度国営農地開発事業・島海南麓地区（山橋工区）にかかる第2次緊急発掘調査である。調査対象は、当初E～H調査区3,600㎡についてであったが、事業計画の変更及びI調査区の新規発見により見直しを行い、E～G・I調査区4,900㎡に変更した。H調査区は、平成4年度以降の第3次調査対象となった。現地調査期間は、平成3年5月7日から同12月6日までの述べ141日間である。

窯跡は、SQ5～12の8基検出され、すべて半地下式無階無段の登窯である。これで1・2次合わせ12基である。1次同様各窯跡は密集して分布せず、沢筋毎に点々と位置する。ステ場は、SQ5・7では削平等により確認できなかったが、それ以外では、沢に向かっての広がりがみとめられた。燃焼部窯底には、砂質土を堆積する落ち込みプランを有し、1次調査SQ1検出の船底ピットと考えられる。焚口部には、礫が残り石組を呈していたことが伺える。SQ6a窯底出土の壺、SQ9覆土出土の底部丸底の長胴壺、SQ10窯底出土の壺の確認は、登窯で赤土器の焼成が行われたことを示すものといえる。但し、ステ場土層断面に赤土器の堆積層が確認できず、須恵器生産に比して焼き損じ等の灰原に捨てる用量が少なかったのか、焼成数そのものが限られていたのか検討を要する。SQ11からは、土器の焼成位置を留め、焼台のつた壺や丸底の壺等、窯体内部の配置状況が検出され、また、壁面には、天井部を構築するための骨組と考えられる炭化した細木がみとめられ、窯の操業及び構造を示す資料が得られた。全体に土器が赤褐色を帯びて、生焼け状態であることから焼成途中であったことが推定される。

焼壁土壌は、主にF調査区から検出された。SQ5西側の範囲に集中し、大小並びに平面形態により分けられ、重複検出が多い。傾斜面に分布するが、床面は比較的平坦である。壁は、特に斜面上側が垂直に掘り込まれ、焼きしまりも顕著である。斜面手前の壁は、立ち上がりがなだらかで、検出面に連続するようなプランである。覆土は、炭・焼土粒を含む薄い土層が重なり、重複の場合固い焼土層が途中で確認できるものもみとめられた。床面や壁面が熱を受け焼きしまっていること、覆土や床面から赤土器を出土すること、登窯の近くにまともな構築されていることなどから、酸化焰による赤土器焼成遺構と考えられる。さらに、削り取られたSQ5との位置は不明であるが、登窯と重複する遺構は確認されないことや窯との分布位置関係は、时期的にも同じであり、工人が須恵器・赤土器両方を生産していたことを示唆するものといえよう。ただ、遺構の違いによる器形の構成は、数量比の検討まで至らず確認できなかった。

粘土探掘坑群は、F調査区の窯跡及び焼壁土壌群周辺に分布する。平面不整形で連続して掘り込まれている。SK80は、曲物が底面から出土し、その東側にはピット群が広がり、独立柱建物跡の検出はできなかったが、工房跡の存在が考えられる。また、SK110出土の人面墨書土器は、当時のまじないを物語るものである。

今回の調査での登窯跡・焼壁土壌・粘土探掘坑の遺構群の検出は、9世紀後半の窯業状況をより具体的に示す貴重な情報確認といえよう。

## 第IV章 山橋7・8遺跡

山橋7遺跡および山橋8遺跡は、平成2年度に山形県教育委員会によって実施された遺跡詳細分布調査で新規に発見された遺跡である。同時に山橋2～6遺跡も発見され、これらの遺跡の立地する庄内平野北東部丘陵は、周知の遺跡として確認されている平安時代の竈跡群と併せ、縄文時代・平安時代の遺跡が集中する一帯であることが明らかになった。

### 1 山橋7遺跡

本遺跡は、上述の遺跡詳細分布調査（試掘）により、焼土と縄文土器片が確認された。地目は現在山林、遺跡は丘陵の頂部（A地区）および舌状に張り出す小台地（B地区）に立地する。

平成3年11月5日から雑木、杉等の立木伐採に入り、その後重機を使用して表土を除去し面整理を行なった。調査面積は、1,162㎡（A地区 415㎡、B地区 747㎡）である。

調査の結果、A地区で焼土を含む小土壌2基（径1m、深さ5cm）、B地区で小ピット数基が検出された。遺物が今回の調査では出土しない。これらの遺構の時期は伴出遺物がないため、特定できないが覆土の状態から比較的新しい時期の所産と考えられる。

本遺跡については、遺構の確認後、全体及び部分写真の撮影、調査区の全体図を作成し記録保存とした。なお、本報告書ではその内容から、全景写真の掲載にとどめた。

### 2 山橋8遺跡

#### （1）調査の経過と検出された遺構

遺跡詳細分布調査（試掘）では北側の丘陵頂部（A地区）およびそこから南へ延びる一段低い尾根状の平坦部（B地区）に遺構と遺物が比較的に集中することが確認されていた。調査対象地区（地目は山林・雑木）は既に樹木の伐採が終了し一面ブッシュであった。

調査は、6月3日から開始し、ブッシュ等の刈り取り後、6月6日～12日の期間でトレンチ調査、同13～19日にA・B両地区の重機による表土除去、以後7月15日まで精査記録作業をおこなった。調査面積は、2,290㎡（A地区 1,760㎡、B地区 530㎡）である。同18日には現地説明会を開催し、55名の参加を得た。

A地区では小ピット群・土壌5基・性格不明落込み遺構1基の他、風倒木痕3基が検出された。ピットはその配置・覆土から建物跡を構成するまでには至らない。

B地区で検出された主な遺構は竪穴住居跡1棟（ST1）・落し穴2基（SK2・3）ピット群・風倒木痕3基である。ST1は調査区の北西部に位置し、規模は平面プランで長軸方向3.5m、短軸方向2.9m、検出面から床面まで5～10cmを測る。南壁東コーナーにカマドを有する。住居内北西側に径1.4m、深さ8cm程の土壌を伴う。柱穴は3基確認された。カマド内部、周辺および住居跡覆土から須恵器・赤焼土器・土器器が出土した。調査区中央では北西～南東ラインに約5mの間隔で落し穴が2基検出された。プランは長軸3m、短軸50～60cm、深さはSK2で110cm、SK3で60cmを測る。遺物の出土はない。

## (2) 出土した遺物

遺物は、整理箱にして6箱出土した。縄文時代・平安時代の2時期に大別される。

縄文時代(第68～69図 図版30～32)

表土および包含層からの出土である。土器は深鉢体部片4点で羽状縄文である。石器は打製石器、礫石器合わせて32点が出土した(表5)。石鏃は3点の出土で、基部に挟りが入る1類と二等辺三角形形状を呈する2類に分けられる。2は黒燧石である。3点出土した石匙は、つまみに対し刃部が斜行する1類と、いわゆる縦形石匙の2類に分けられる。石槍は1点の出土である。寛状石器は本遺跡で出土率の最も高い器種である。形態と刃部の造り出しで分類した。撥形を呈するものを1類とし片面加工を1a、両面加工を1b、短冊形を呈するものを2類とし片面加工を2a、両面加工を2bとした。欠損品で形状・加工が不明なものは一括して3類とする。磨製石斧は1点のみの出土である。磨石・凹石・敲石は10点出土した。

平安時代(第42～43図 図版33)

全体に小片が多い。ST1出土の遺物を中心に、表土・包含層出土の遺物は代表的なものを抽出し図示した。ST1の覆土からは総数で250点が出土している。内訳は須恵器61(坏40・高台付坏1・皿6・壺3・甕11)、赤焼土器188(坏72・皿11・甕91・埴13・不明1)、土師器坏(内面黒色処理)1である。坏底部はすべて回転糸切りによる切り離しである。なお、A地区包含層から須恵器甕が1点出土している。

## 3 調査のまとめ

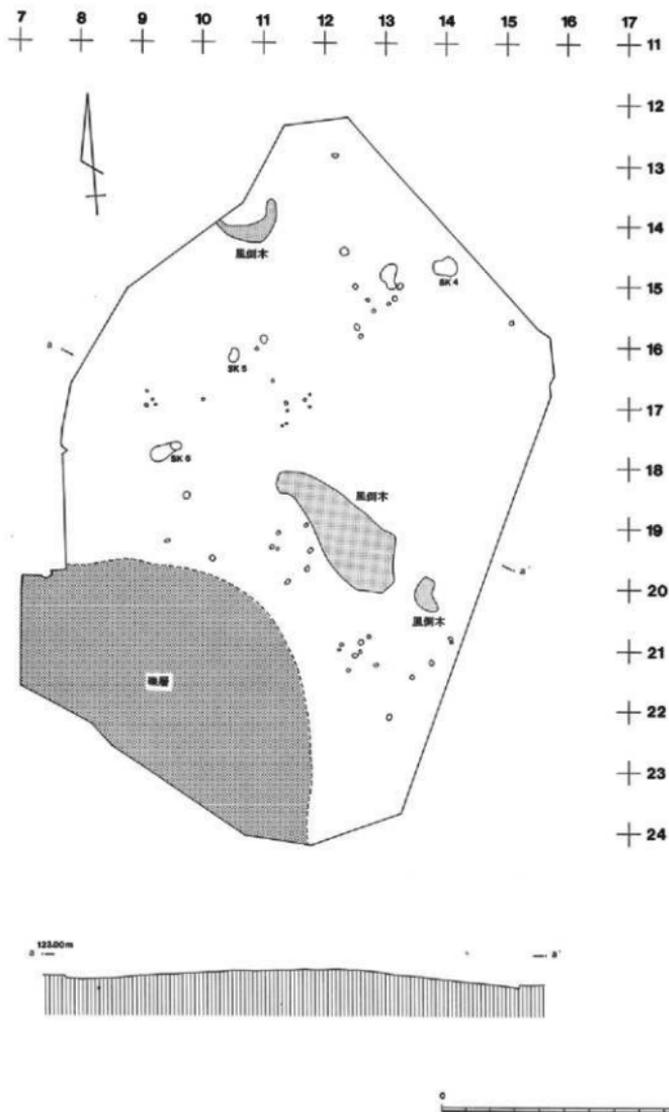
山橋7遺跡では、遺構としては焼土を含む土壌2基および小ピット群が検出された。住居跡等は未検出であり、集落跡としての様相は認められない。しかし、遺跡詳細分布調査で出土した縄文時代の土器片(時期不詳)と上記遺構の存在は、この地に何らかの人的な動きがあったことをうかがわせる。周辺で新たに発見された山橋2～8遺跡との関連のなかで本遺跡を捉える必要があらう。

山橋8遺跡については、縄文時代、平安時代の2時期の遺構と遺物が検出された。縄文時代では、2基の落し穴が確認された。併せて石器中の寛状石器の占有率の高さが注目される。山間部における、集落跡以外の縄文時代遺跡の様相を示すひとつの好例となろう。平安時代では小規模な竪穴住居跡が1棟(ST1)確認された。この遺構は、隣接あるいは周辺に点在する平安時代の竪穴群との関連が予想される。すなわち、山海竪穴I地点はST1とは沢を隔て直線距離で約100mの位置に存在し、樹木を伐採すれば間近に見通すことができること、また出土遺物については形態等から9世紀中頃～後半の年代が考えられI地点の竪穴群と年代が共通すること、等による。竪穴に直接結び付く遺構の可能性が高い。

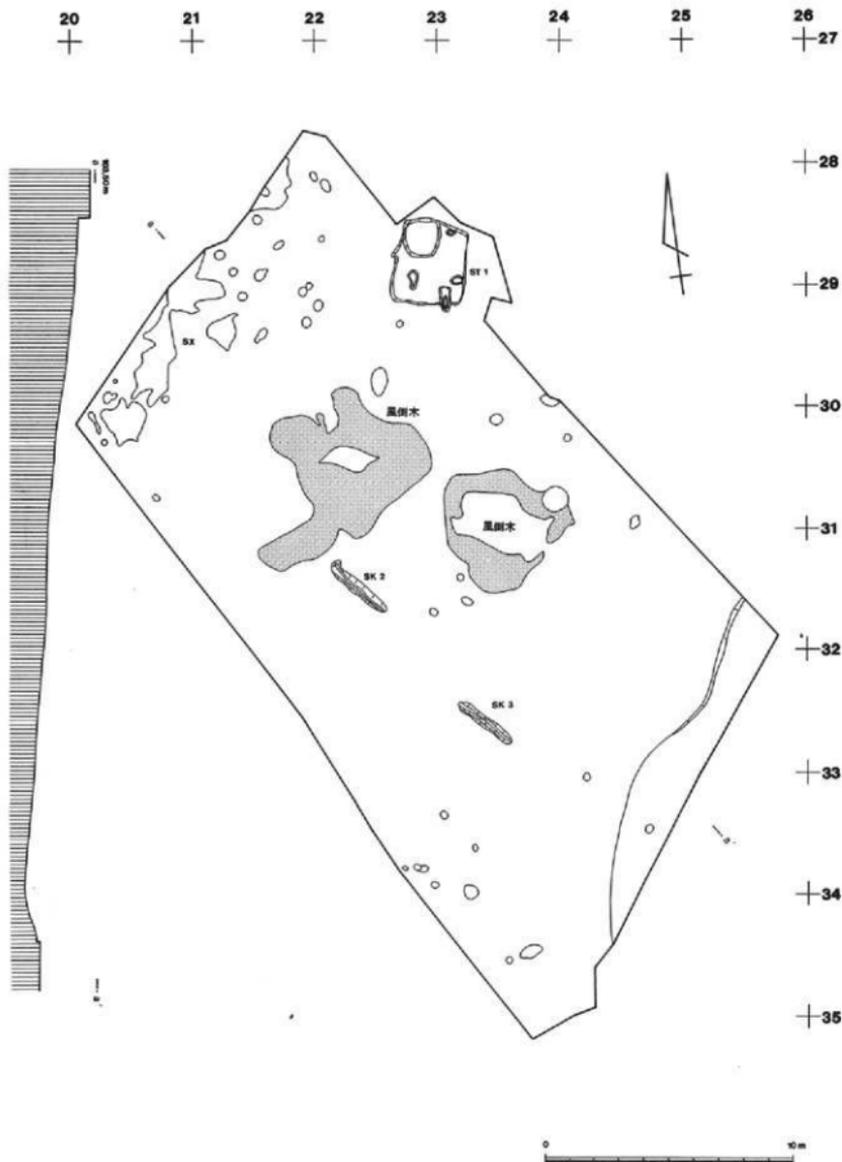
(文献)

- 1 山形県教育委員会 1991 「山谷新田遺跡・山海竪穴群発掘調査報告書 国営農地開発事業島海南麓地区(1) 山形県埋蔵文化財調査報告書第170集
- 2 山形県教育委員会 1991 「分布調査報告書(18) 山形県埋蔵文化財調査報告書第163集

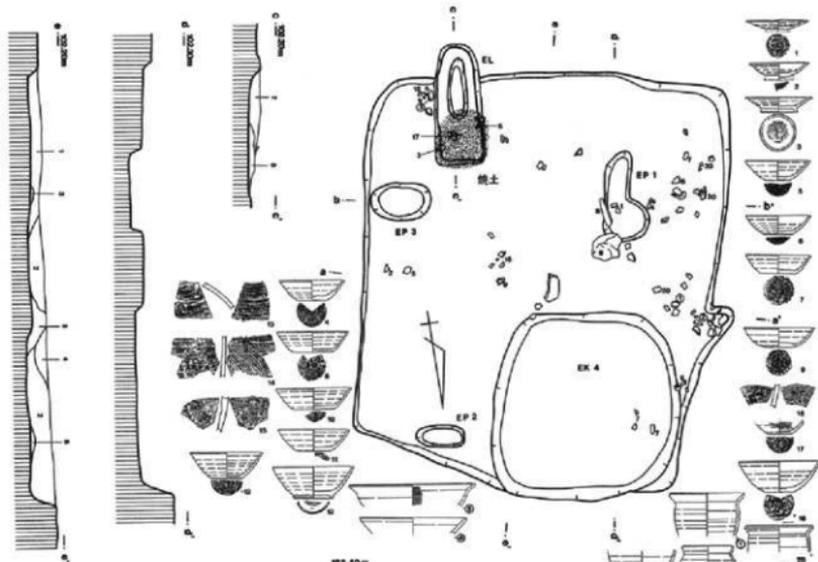




第37図 山橋8遺跡A地区遺構配置図・エレベーション  
- 65 -

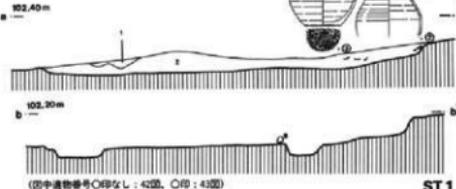


第38図 山橋8遺跡B地区遺構配置図・エレベーション



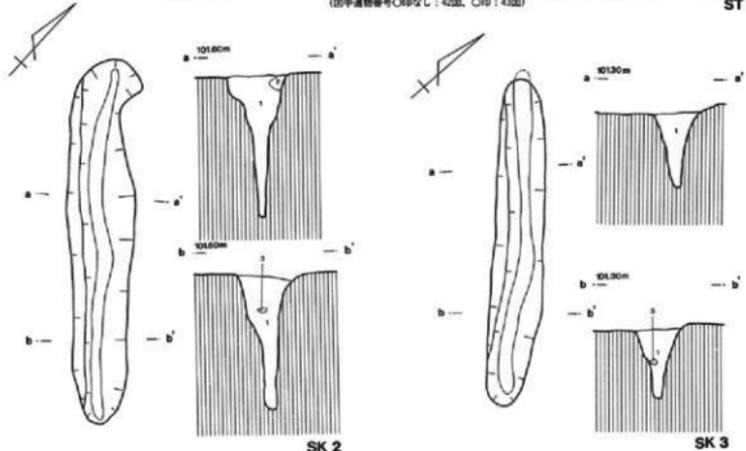
ST1 住居跡土層註記

- 1: 暗褐色(7.5YR3/3)粘土質シルト ほぼ純粋。
- 2: 褐色(7.5YR4/3)粘土質シルト 炭化粒を少量と黄土ブロックを含む。
- 3: 明褐色(7.5YR5/6)シルト質粘土 ブロック状に1の土を含む。
- 4: 暗赤褐色(5YR3/2)粘土質シルト 木の葉を含む。
- 5: 暗褐色(10YR3/2)粘土質シルト 堆山の土を点状に含む。
- 6: 褐色(5YR1/2)シルト 純粋。
- 7: 暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルト 炭土・炭化粒をブロックで含む。
- 8: 暗褐色(7.5YR3/3)粘土質シルト 炭化粒を点状に、7の土を塊状に含む。



(空中写真番号C49女L:4202, C49:4302)

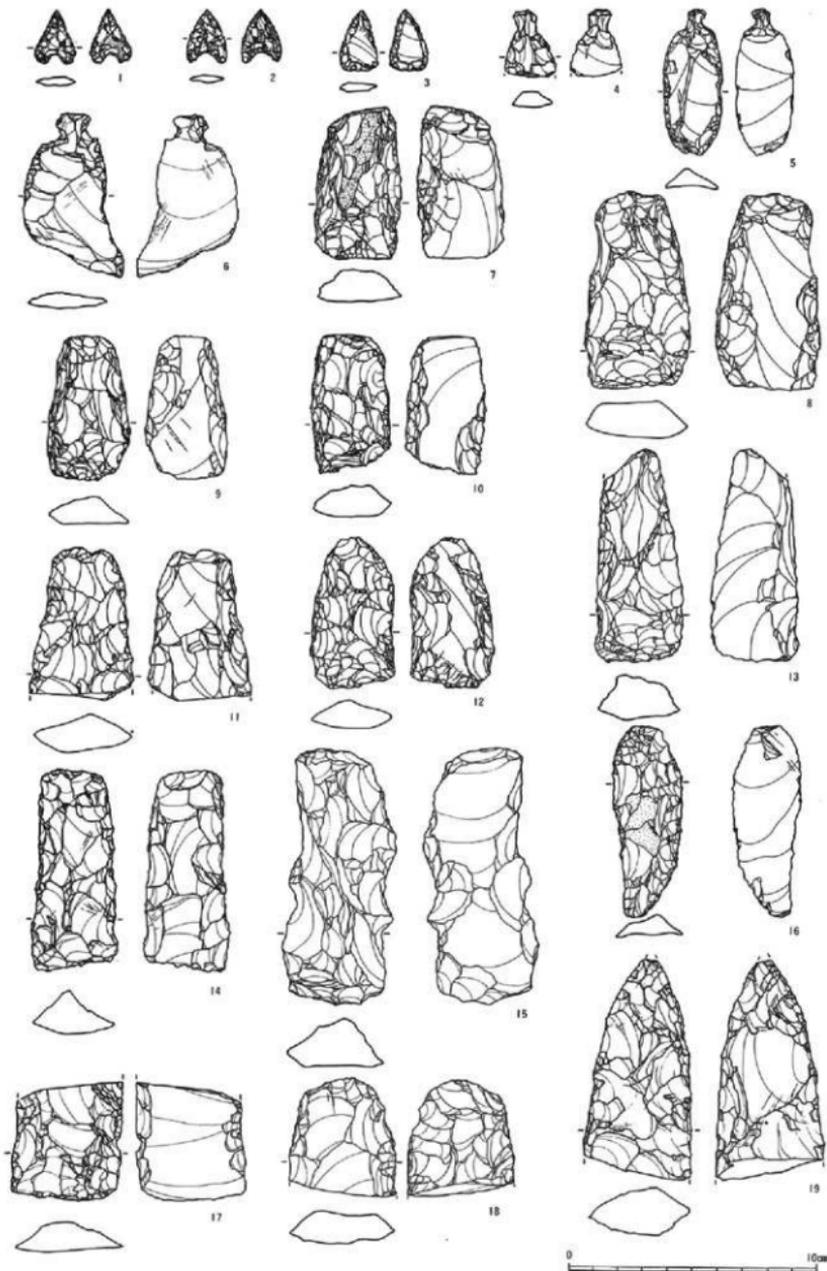
ST1



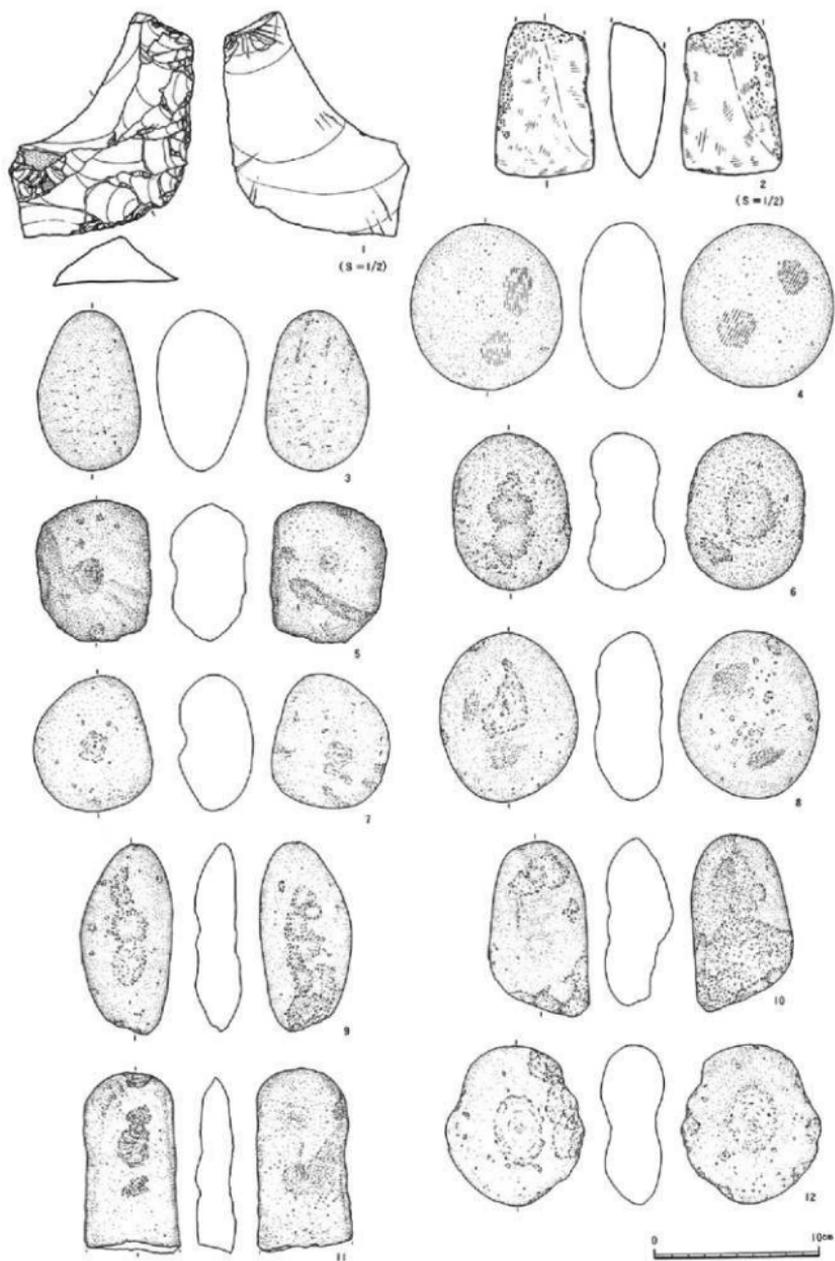
SK2・3 窪し穴土層註記

- 1: 黒色(5YR1.7/1)粘土質シルト 褐色シルト質粘土を塊状に含む。
- 2: 暗褐色(10YR3/4)粘土質シルト 褐色シルト質粘土ブロックを含む。
- 3: 明褐色(7.5YR5/6)シルト質粘土 1の土を点状に含む。

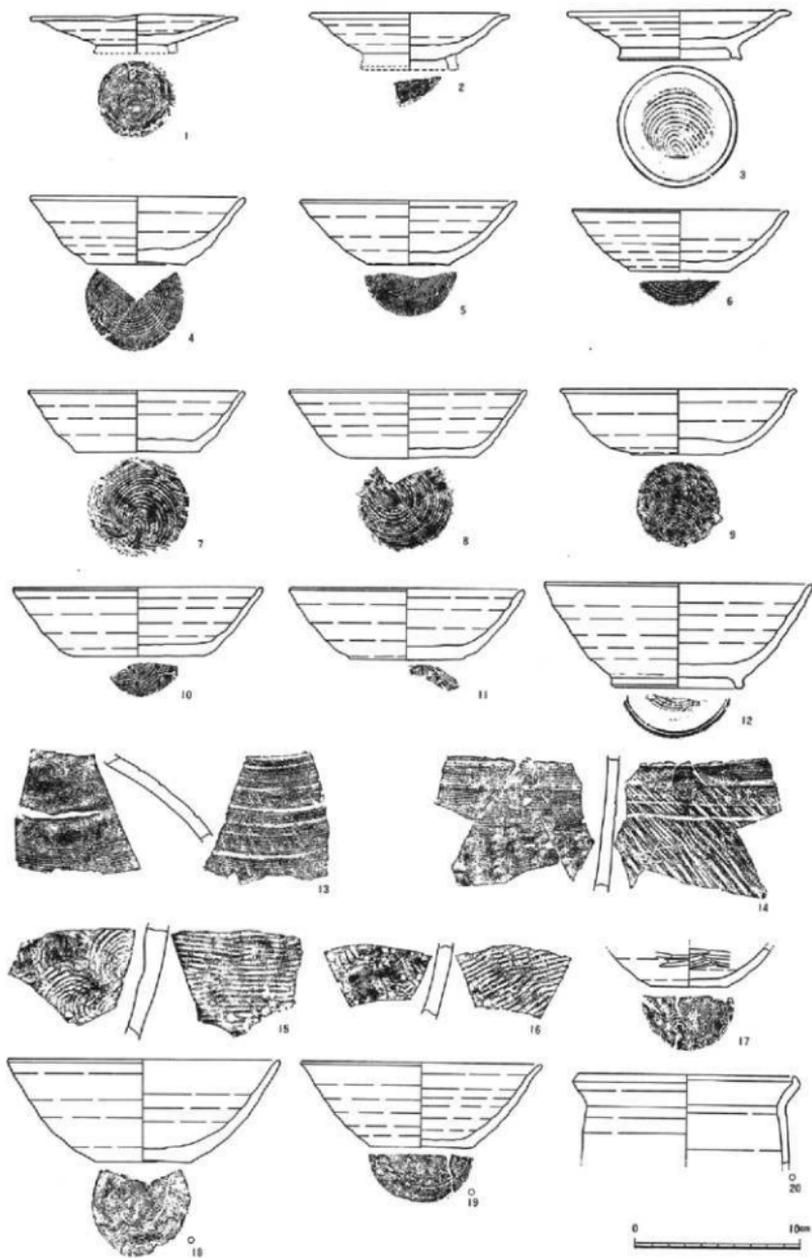
第39図 ST1住居跡・SK2・3窪し穴



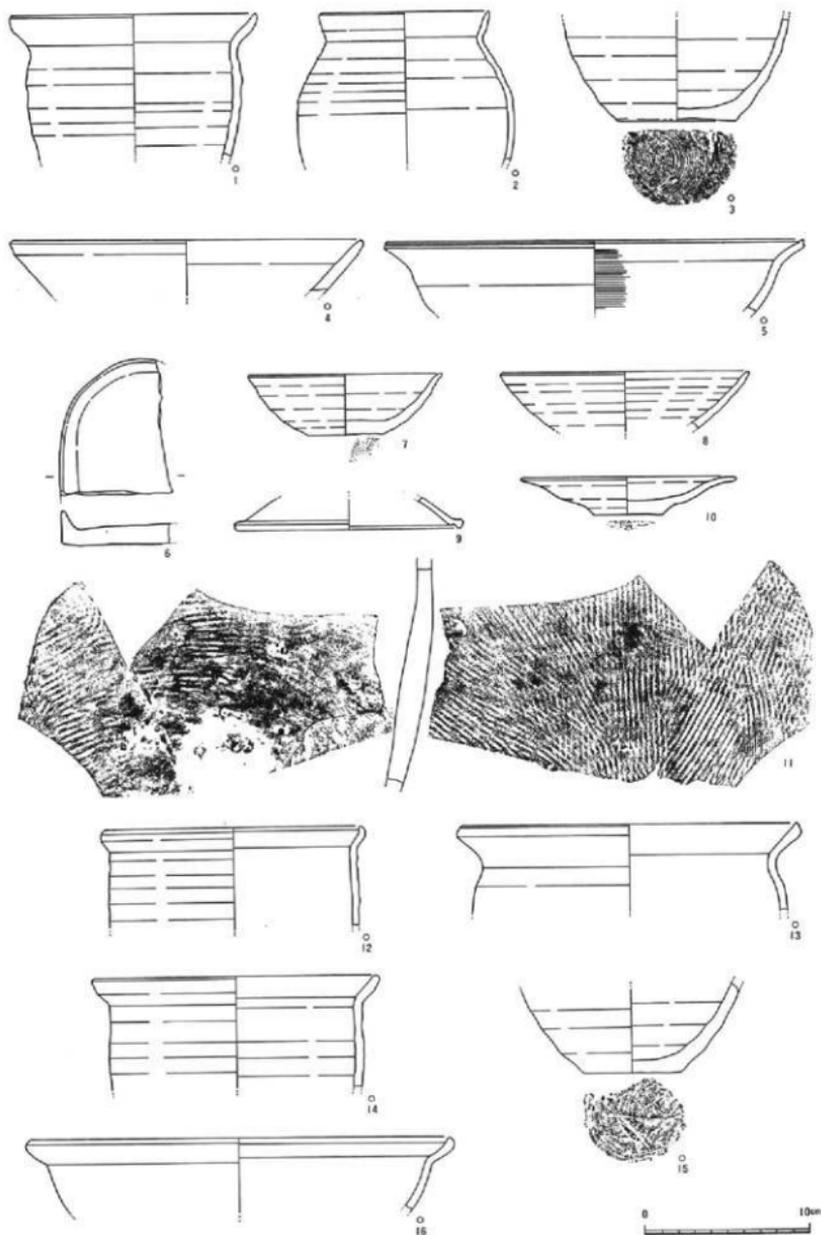
第40圖 山橋8遺跡出土遺物(1) 石鏃・石匙・筥状石器・石槍



第41図 山福8遺跡出土遺物(2) スクレイパー・磨製石斧・磨石・凹石・礫石



第42図 山棚8遺跡出土遺物(3) ST 1



ST 1(1-5) 包衣層(6-10)

第43圖 山柶8遺跡出土遺物(4) ST 1・包衣層  
- 71 -

表一 5 山橋8遺跡石器計測表

## 石鏃

	出土区	石材	大きさ (mm)				重量 (g)	分類	押図番号	図中番号
			長さ	幅	厚さ	えぐり				
1	10-19	頁岩	21.5	16.3	4.0	4.2	1.0	1	40	1
2	9-17	黒曜石	21.9	15.9	4.4	5.0	1.1	1	40	2
3	11-16	頁岩	24.2	19.9	3.7	—	1.4	2	40	3

## 石匙

	出土区	石材	大きさ (mm)				重量 (g)	分類	押図番号	図中番号
			長さ	幅	厚さ	えぐり				
1	x-0	頁岩	(28.7)	(20.5)	(3.7)	(3.7)	2	40	4	
2	8-21	頁岩	59.6	23.4	12.6	12.6	2	40	5	
3	8-17	頁岩	67.9	41.5	6.1	13.5	1	40	6	

## 籠状石器

	出土区	石材	大きさ (mm)				重量 (g)	分類	押図番号	図中番号
			長さ	幅	厚さ	えぐり				
1	x-10	頁岩	61.9	35.1	14.7	36.4	1 a	40	7	
2	12-22	頁岩	80.0	43.2	15.0	61.2	1 a	40	8	
3	11-15	頁岩	58.6	33.9	13.8	30.9	1 a	40	9	
4	x-0	頁岩	56.9	33.0	12.1	30.0	1 a	40	10	
5	14-21	頁岩	(62.0)	(41.1)	(14.9)	(38.1)	1 b	40	11	
6	13-19	頁岩	60.8	33.6	12.5	29.5	1 b	40	12	
7	11-13	頁岩	85.5	35.8	18.9	56.6	2 a	40	13	
8	11-15	頁岩	81.8	34.9	17.4	52.9	2 b	40	14	
9	13-21	頁岩	105.7	44.3	24.6	105.1	2 b	40	15	
10	10-18	頁岩	77.9	28.5	10.1	24.9	2 a	40	16	
11	13-12	頁岩	(48.0)	(44.6)	(15.3)	(36.7)	3	40	17	
12	10-21	頁岩	(58.1)	(44.5)	(14.3)	(35.7)	3	40	18	

## 石槍

	出土区	石材	大きさ (mm)			重量 (g)	押図番号	図中番号
			長さ	幅	厚さ			
1	8-17	頁岩	(82.9)	(44.3)	(19.7)	(61.3)	40	19

## 磨製石斧

	出土区	大きさ (mm)			重量 (g)	押図番号	図中番号
		長さ	幅	厚さ			
1	11-19	(63.9)	41.4	23.3	(84.7)	41	2

## 磨石・凹石・敲石

	出土区	大きさ (mm)			重量 (g)	器種	押図番号	図中番号
		長さ	幅	厚さ				
1	9-22	96.8	62.0	55.0	457	磨石	41	3
2	10-18	100.5	91.5	51.2	680	磨石	41	4
3	10-15	85.1	69.6	49.1	330	凹石	41	5
4	13-22	95.0	70.2	47.4	416	凹石	41	6
5	9-17	81.3	70.3	49.8	345	凹石	41	7
6	13-15	103.3	84.7	44.0	534	凹石	41	8
7	10-16	114.6	55.4	30.6	213	凹石	41	9
8	9-16	108.9	64.4	41.2	272	凹石	41	10
9	11-14	(108.1)	(56.6)	(26.3)	(186)	凹石	41	11
10	13-15	98.3	82.8	39.5	351	敲石	41	12

凡例：表中 ( ) は現存値を示す。

## 第V章 山橋橋跡

### 1 遺跡の立地と歴史的環境

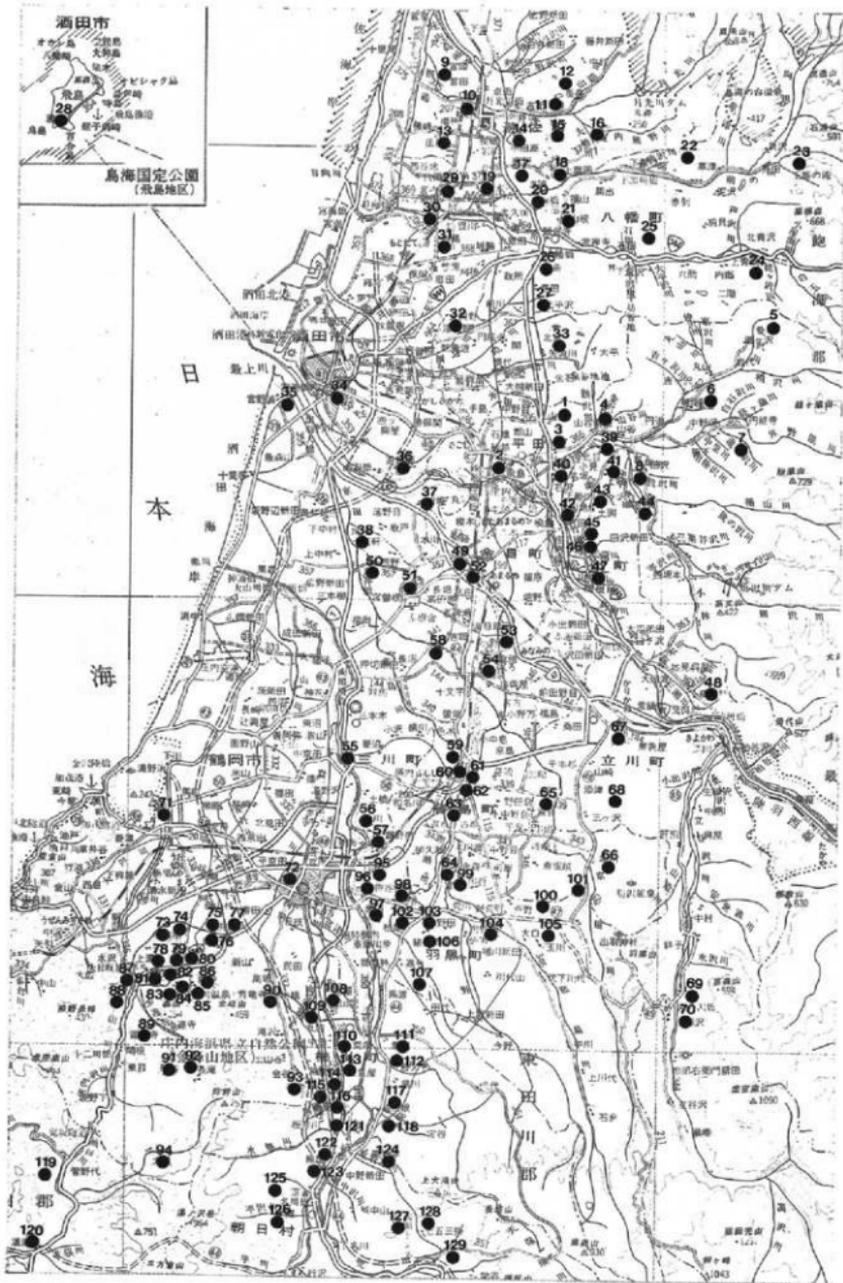
山橋橋跡は山形県北西部、最上川より北へ約3kmの出羽山地が庄内平野に接する山地に位置する。山々から流れ出す多くの沢は、中野俣川や田沢川となり相沢川に合流し、県内を縦走する最上川に注いでいる。

山橋橋跡はこの相沢川右岸に連なる山地西端に位置し、山橋集落の北東に接する標高約85mの山頂周辺とそこから西側の平野にのびる3つの大きな尾根からなる。城域は東西650m×南北500mの約200,000㎡と考えられる。現在橋跡の主郭と考えられる山頂部には、大平山神社が祀られている。樹齢数百年の松、桜、そして庄内平野を一望できる景勝の地として地域の人たちのいこいの場となっている。

周辺の遺跡は豊富で、徳田山遺跡や山橋2・3・7・8遺跡などの縄文時代の遺跡、弥生時代の生石2遺跡などがある。律令時代では、出羽国の国府の擬定地とされる城輪橋跡、さらに城輪橋跡に関連すると見られる多くの集落跡や官衙跡が存在する。これらの遺跡に加え、山橋橋跡の位置する山地東南には、官窯として国府やその周辺の集落に製品を供給していたと推定される山海窯跡群をはじめ、泉谷地古窯跡群、瀬戸山古窯跡群などの窯跡群がある。なお、山橋集落の西約1kmには鮎海郡御の擬定地と考えられる郡山集落がある。

中世に入ると、武家勢力の拡大に伴い各地に多くの城館が築かれた。特に全国的に争乱の激しくなる15～16世紀はそのピークであった。山橋橋跡周辺にも朝日山城や砂越城など、多くの城館跡が所在する。山橋が使用されたと考えられる15～16世紀の庄内は16世紀前半までの大宝寺(武藤)氏とその庶族砂越城主砂越氏との抗争期、16世紀中頃の上杉氏の力を背景とした大宝寺氏の庄内統一期、そして16世紀後半の戦国大名最上・上杉両氏の介入期の3時期に大別でき、特に最上・上杉両氏の介入は庄内の政治情勢に大いに緊張をもたらしたことは疑いない。おそらくこの地もいくたびか戦場になったものと考えられる。なお、山橋橋跡周辺のその他の中世遺跡としては、時期が異なるものも含めて、山橋1遺跡、手蔵田遺跡群、高阿弥田遺跡などの集落遺跡が知られている。信仰遺跡では生石の延命寺にある板碑群、県指定文化財の山谷阿弥陀板碑があり、山橋橋跡の北東に位置する鷹尾山は修験の中心地だった。さらに青沢越えなどの詣街道も加わり互いに密接な繋りがあったものと考えられる。

山橋橋に関する中世の文献史料は知られていない。近世では、『出羽国風土略記』などの地誌に現れるようになる(106頁参照)。内容は橋主に関する地元の伝承が主である。その他の史料についても『風土略記』からの引用を中心に記述されたと考えられる。山橋は歴史書・地誌類のほか軍記物の世界にも登場する。『奥羽永慶軍記』・『奥羽軍談』などには地誌にはない興味深い点が見られるが、信憑性に問題がある。近代では、阿部正己氏による大正9年時の記録がある(106頁第61図参照)。そのほか『鮎海郡誌』にもその記述が見られる。



第44図 庄内城館跡分布図 (S = 1 : 200,000)

表一 6 庄内城館跡一覧

番号	城館名	市町村名	番号	城館名	市町村名	番号	城館名	市町村名	
1	山極城	平田町	44	田沢館	余目町	87	山内城		
2	山内城		45	松山城		88	田川館		
3	藤原館		46	中山館		89	かも入館		
4	高内城		47	山等館		90	高坂館		
5	岩代城		48	笠原野館		91	影谷館		
6	琴巻館		49	旧余目城		92	箕輪館		
7	蓮藤館		50	金沼館		93	谷定館		
8	長根山館		51	宮曾根館		94	笑祝館		
9	宮田橋	遊佐町	52	余目城	三川町	95	細谷館	羽黒町	
10	丸ノ内館		53	随館		96	赤川城		
11	苦山館		54	宮袋館		97	松尾城		
12	野沢館		55	横山城		98	狩谷野自館		
13	永照館		56	助川館		99	香地館		
14	笑福		57	稲荷館		100	東夷館		
15	翠津館		58	勝義寺館		101	黒沢館		
16	陣屋館		59	翠影館		102	五郎館		
17	鹿野沢館	60	岡館	103	黒瀬館				
18	鯉ノ岡館	八幡町	61	藤島城	藤島町	104	荒川館		
19	堰酒館		62	蓮殿寺館		105	翠野館		
20	芽由館		63	吉郡館		106	山館		
21	観音寺城		64	錦久瀬館		107	篁等館		
22	黒川館		65	開根館		108	山部館		郷引町
23	吉舟山館		66	諺川館		109	丸岡城		
24	青沢館		67	野川城		110	藤原城		
25	黒沢館		68	前山館		111	黒川古館		
26	一条館	69	笠谷沢城	112	黒川館				
27	平沢館	70	危谷館	113	箕輪館				
28	飯沼館	酒田市	71	亀浦城	鶴岡市	114	西田中館		
29	宮内館		72	鶴ヶ岡城		115	西荒原館		
30	門由館		73	崇館		116	西岩木館		
31	新由自城		74	清水城		117	松根城		
32	鎌倉原館		75	開根城		118	松根前館		
33	朝日山城		76	築館		119	野野代館		温泊町
34	龜ヶ崎城		77	井岡城		120	飯高川館		
35	宮野酒館		78	突目登館		朝日村	121		積出館
36	遊捨部館	79	鏡谷館	122	獅子岩城				
37	新堀館	80	鉢巻山館	123	竿谷館				
38	笑福館	81	岩城前館	124	荒城				
39	中北目館	松山町	82	深沢館	125		下本郷館		
40	横根山館		83	かき山館	126		上本郷館		
41	長坂館		84	高野山館	127		飯千郎館		
42	由尻館		85	藤沢館	128		七五三館		
43	王堀館		86	鍋倉館	129	笑福館			

(注) 遺跡名は「山形県遺跡地図」(山形県教育委員会 昭和53年)及び「日本城郭大系3」(新人物往來社 昭和56年)を参考とした。

## 2 調査の経過

調査は、山橋橋跡にかかる第1号幹線道路(A)の路線部分を対象に実施した。橋跡内の路線長は約900m、路線総面積は約15,000㎡を測る。

7月22日機材搬入、関係者による搬入れ式後、7月31日まで全体で32のトレンチ(幅1m、総延長632m)を設定し全体の状況を探った。その結果、調査対象地区をA～Dの4区に分け、基本的には、B→C→D→Aの順に調査を進めた。

B地区 8月2日～9月11日まで手掘りによりB4地区の西側部分を除く約1,000㎡について調査を実施する。B4地区西側は重機により9月18日～20日に表土を取り除き、他の地区と並行して作業を進めたため記録作業終了までには10月4日までの期間を要した。なお、B3地区の盛土についての深掘り、記録は調査終了直前の11月19日に終了した。

C地区 主郭から西へ延びる土塁部分からB地区へ続く調査区である。9月12日から重機による表土の取り除き作業に入り、11月1日に記録までの調査を終了した。土塁部分については重機で半載し土層の観察を行なった。

D地区 主郭北側の調査区である。10月9日から2日間で重機によって表土を取り除き10月16日までに概ね調査を終了した。

A地区 本橋跡の西端部にあたる調査区である。10月18日より開始し11月7日に終了した。

11月8日に現地説明会を開催し、約100名の参加を得た。

## 3 遺跡の概要

山橋橋跡は、周知の橋跡として『山形県遺跡地図』(昭和53年・山形県教育委員会)に登載されているが、その範囲は山橋公園とされる主郭(標高85m・東西35m・南北110m)に限るものであった。ところが平成元年度に実施した遺跡詳細分布調査により、橋跡が同公園の立地する丘陵全域に及ぶことが明らかになり、山形県教育委員会によって橋跡全域の「縄張り図」が作成された。

現在想定される橋跡の範囲は東西650m、南北500m、面積約200,000㎡程である。橋は、山橋公園から西側に延びる3つの尾根のほぼ全域を利用している。橋の東・南側は沢によって深く限られ、天然の城壁となっている(比較的緩やかな斜面には曲輪・空堀を設けている)。北側は沢に限られるが、緩やかである。ここには縦堀群・縦土塁を配し、防衛施設としている。平地からこの沢を登ると主郭の北東側の空堀に連絡する。西側は主郭から山麓に至るまで大小様々な曲輪で構成されている。本報告では便宜上、曲輪を群として捉えた(第45図)。I～IV・VI群が西側の曲輪を構成する。山麓部のVI群は他の曲輪群に比し造り出しが簡単である。なお、南西部については、基地の造成により大半が破壊されている。

山橋橋跡は主郭を中心に求心性のある縄張りを持ち、地形を活かしながら各曲輪群が配されている。また、現在の山橋集落は橋跡の南側に隣接しており、中世村落の景観を今に留めているものとも考えられる。



#### 4 検出された遺構

**A地区(第46～48図)** A1では、土盛り・整地が行われた様子は認められない。A1の北西斜面に幅1m弱の階段状の遺構があるが、これは山橋集落付近の山麓部にも存在する。トレンチによる断面観察では、整地された痕跡はなく、表土直下が地山となり、ほぼ一層である。このことから、この階段状の遺構は後世の所産の可能性が高い。A2では城郭の一部であることが明確に認識できる。この地区は中央の土塁状の遺構を挟んで西側と東側に区分できるが、西側では旧地形の緩い傾斜に約1mの土盛り・整地を行って平場を確保している。この曲輪から西に接する現在の沢底との比高差は3.6mである。中央の土塁状の遺構は地山を削り出して作られたものと考えられる。東側は整地されているようである。調査前の地目が竹林のため、根の攪乱で不明な点がある。ここではSA1・2柵列状遺構及び溝跡、土壌、小ピット群が検出された。SA1(第47図-A1地区)は南北方向に3間、SA2(第47図-A1)は南北方向に4間が調査区内で確認された。共に調査区外にのびる可能性もある。柱間距離は、SA1が約1.6～2.1m、SA2は1.0～1.4mを測る。ピットは、SA1・2共に直径24～40cmで、円あるいは楕円形で、検出面からの深さは、約5～29cmと比較的浅い。A地区東側の土塁にほぼ平行となる。また、A1からは、覆土等から平安・縄文時代と考えられるピットが数基検出された。

**B地区(第49～51図)** B地区にはB3の3段の帯曲輪、B4の腰曲輪、B5の3段の腰曲輪とその延長にある2段の帯曲輪がある。各曲輪は削平・土盛り・整地によってその面を確保している。B3の土盛りは上部が厚く下部は薄くなる(第50図参照)。B4ではB3の帯曲輪を造り出すため東西5m・南北12.5mの土盛りのラインが認められる(第49図参照)。この土はB4・B5の削平によるものと考えられる。B3帯曲輪群の斜面の堆積土は整地層の他、その上層に50cmほどの表土Iとほぼ同質の1層がある。この層は土盛り・整地層と判断したが、この面での遺構の検出ができなかったこと、近世～現代の遺物を含むことから後世の堆積の可能性がある。B4の腰曲輪は地山(ローム)を削平して平坦面を造り出している。その削平の時に岩盤が露出している。面は整地を行っていない。なおB4曲輪の現表土からB3の沢の現表土までの比高差は14.6mである。B5では明確に土盛り・整地をしているのは1ヶ所だけ認められ(第51図c-c'参照)、大半は地山まで削っているだけで土盛り・整地は行っていない。南面の帯曲輪は土盛り・整地がされているのか判別しがたい。ただ他の調査区に見られるような整地層上面を地山土で整地するようなことはしていない。遺物も中世のものに混じって近世～現代のものが地山直上から出土している。調査が始まる直前まで畑地として利用していたため、攪乱を受けたものと考えられる。各段の比高差は1～2m程である。ここではSA3・4柵列状遺構及び土壌、溝跡、小ピット群が検出された。SA3(第51図-B5地区)、SA4(第51図-B5地区)共に東西方向に4間の規模をもつ。柱間距離は、SA3が約2.3～2.5m、SA4は約1.3～1.4mを測る。ピットは、SA3・4共に直径23～66cm(EP244は91cm×73cm)の円形あるいは楕円形で、検出面からの深さは5～31cm程である。また、B4の曲輪では東側の盛土部分周辺と、北側

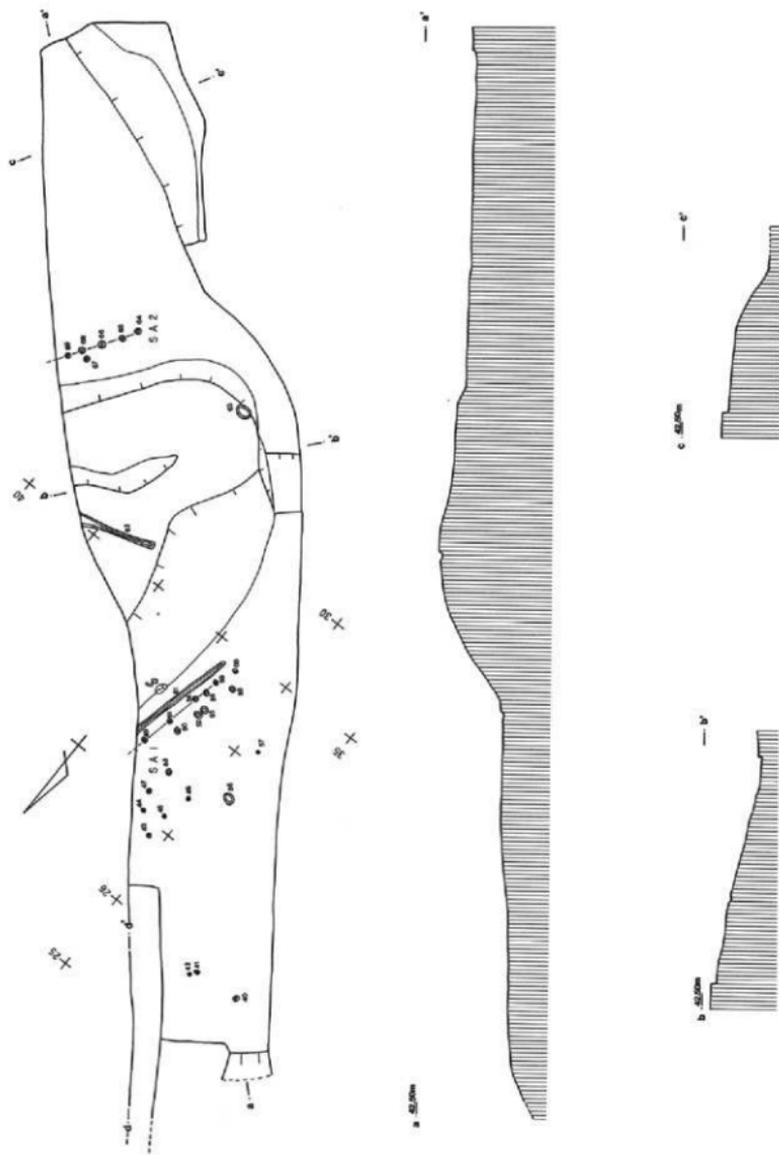
に南北方向を軸としてピットが点在している。

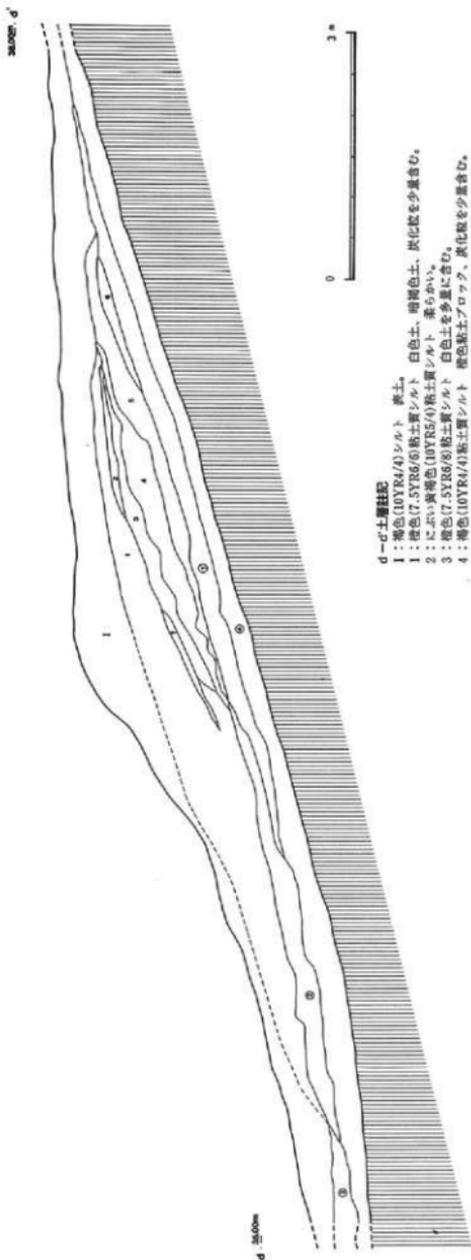
**C地区(第52~55図)** ここでの土盛りは大別すると2つに分けられる。版築を行っているものと単なる土盛り・整地のみを行っているものである。C6では大きな平地が2つある。南側は地山まで削平し、その切り土を回りの帯曲輪を作り出すのに利用している。北側の平地では盛り土・整地は行っていないが、西南部東半では約1m、西半が20~30cmの整地を行っている。残りは地山を削平して造り出している。C7では土盛り・整地層は1m程の厚さがある。南側に平面で約2m土盛りをし帯曲輪状の平坦面を造り出している。この整地層はかなり固くしまっているため敲きしめられているようであるが版築は行われていないようである。C7からC6までの比高差は約7mである。主郭北側を巡る土塁は全長約90mにも及ぶ。C7の土塁のひらみ(頂上部)から北に接する空堀の堀底までの比高差は約10m、腰曲輪内部(C7)での土塁との比高差は約5mである。今回の調査では調査区内に入る土塁の西端を半載して調査した。土盛り・整地層の厚さは厚いところで3mに及ぶ。この盛土層中には2面の炭層が見られる(第55図参照)。上の炭層は標高84.00~83.20mの80cm間で東から西へ傾斜、下の炭層は標高83.70~82.65mの約1mの間を同じ形で傾斜している。下の炭層を境に整地の方法は異なる。すなわち下層の炭層より下は版築が認められかつ密であるのに対し、上は若干認められるだけである。またこの炭層は上の層とは違い焼土粒・拳大の礫を含んでいる。この層の標高は南に接する腰曲輪の標高よりも約2.7m高い。この炭層に時間幅があるとすれば土塁としての機能が考えられるほか、この面での南北幅は約10mを測り、帯曲輪の機能を果たしたとも考えられる。土塁の端の部分にあたるためか、ひらみからは柱穴のような遺構は検出できなかった。C地区ではSB5 掘立柱建物跡が1棟、土壌、溝跡、小ピット群が検出された。SB5(第53図-C6地区)は、東西1間、南北2間で、主軸方向は磁北とほぼ一致する。柱間距離は東西3.6m、南北2.5m、2.8mを測る。柱穴は30~50cmの円形または楕円形で、検出面からの深さは5~27cm程である。ピットの分布状況は、南側に主郭が隣接するためか、C6地区に比してC7曲輪部分の方に多く確認された。また、C7地区のSK370土壌から土風炉、その他、数基のピット覆土から越前系陶器、染付等の破片が出土している。

**D地区(第56~57図)** 主郭の北に位置する。櫛の北限でもある。標高90mの尾根上にはコの字型をした土壇状の遺構が検出された(第58図参照)。断面観察の結果、土盛り・整地されていることが判明した。整地層の厚さは全体的に約50cmである。この土盛り・整地によって得られた平地の広さは東西9.7m、南北5mである。整地の方法は前述の各調査区内の整地法に比べて粗略である。この整地層上面からは柱穴などの遺構は検出できず、遺物も出土していない。この土壇状の遺構の西側50mでは腰曲輪1段が存在し、調査の結果、1.4mの土盛り・整地されていることが判明した(第59図参照)。整地層上面からは柱穴らしき遺構が確認された。

(注)本報告書で使用した腰曲輪・帯曲輪の用語の規定。腰曲輪 山上の曲輪に対してその山腹に取り付いた形で、削平・土盛り・整地によって造られた比較的広い平坦地。帯曲輪 帯状に細長い、削平・土盛り・整地によって造られた平坦地。





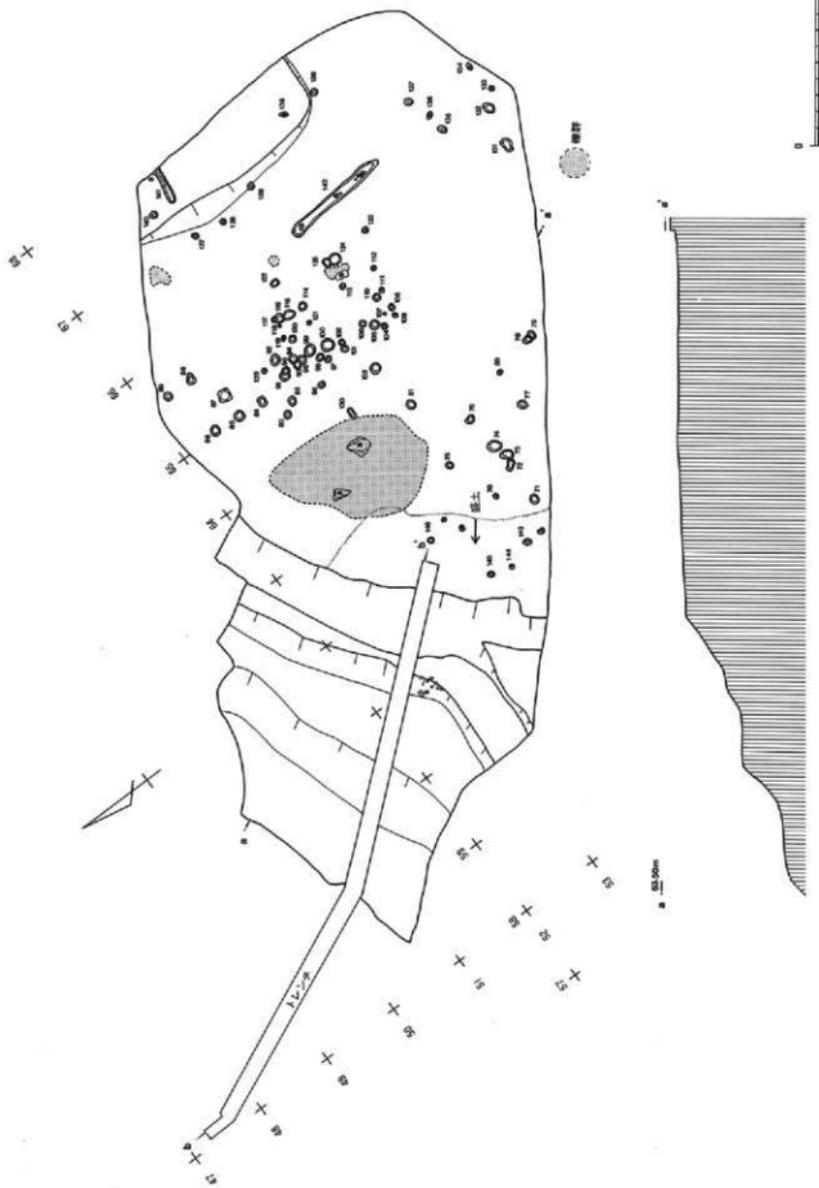


d-d'土層柱記

- 1：褐色(10YR4/4)シルト 黄土
- 2：褐色(7.5YR6/6)粘土質シルト 白色土、暗褐色土、灰化土を少量含む。
- 3：黄褐色(10YR5/4)粘土質シルト 灰らかい。
- 4：褐色(7.5YR6/6)粘土質シルト 白色土を少量含む。
- 5：褐色(10YR4/4)粘土質シルト 褐色粘土プロック、灰化土を少量含む。
- 6：褐色(7.5YR6/6)粘土質シルト 白色土、褐色土を少量含む。灰らかい。
- 7：黄褐色(10YR5/4)シルト 褐色土を少量含む。
- ①：暗褐色(10YR3/4)シルト ②の土を少量含む。
- ②：黄褐色(10YR4/3)シルト 灰化土を少量含む。
- ③：褐色(10YR4/4)粘土質シルト 黄褐色土を少量含む。
- ④：黄褐色(10YR5/4)シルト 全体的に赤味を帯びている。

土層柱記補註

黄土は暗褐色土と褐色・褐色土が大半を占めている。暗褐色土は田舎土、褐色・褐色土は地山と混入される。暗褐色土は全体的には灰らかく、厚味はなされていない。土盛りをした後、そのまま露出したものと混入される。暗褐色土層からは埋列の跡と混入される柱穴21のほか、溝1条が検出されている。出土遺物は極めて少ない。



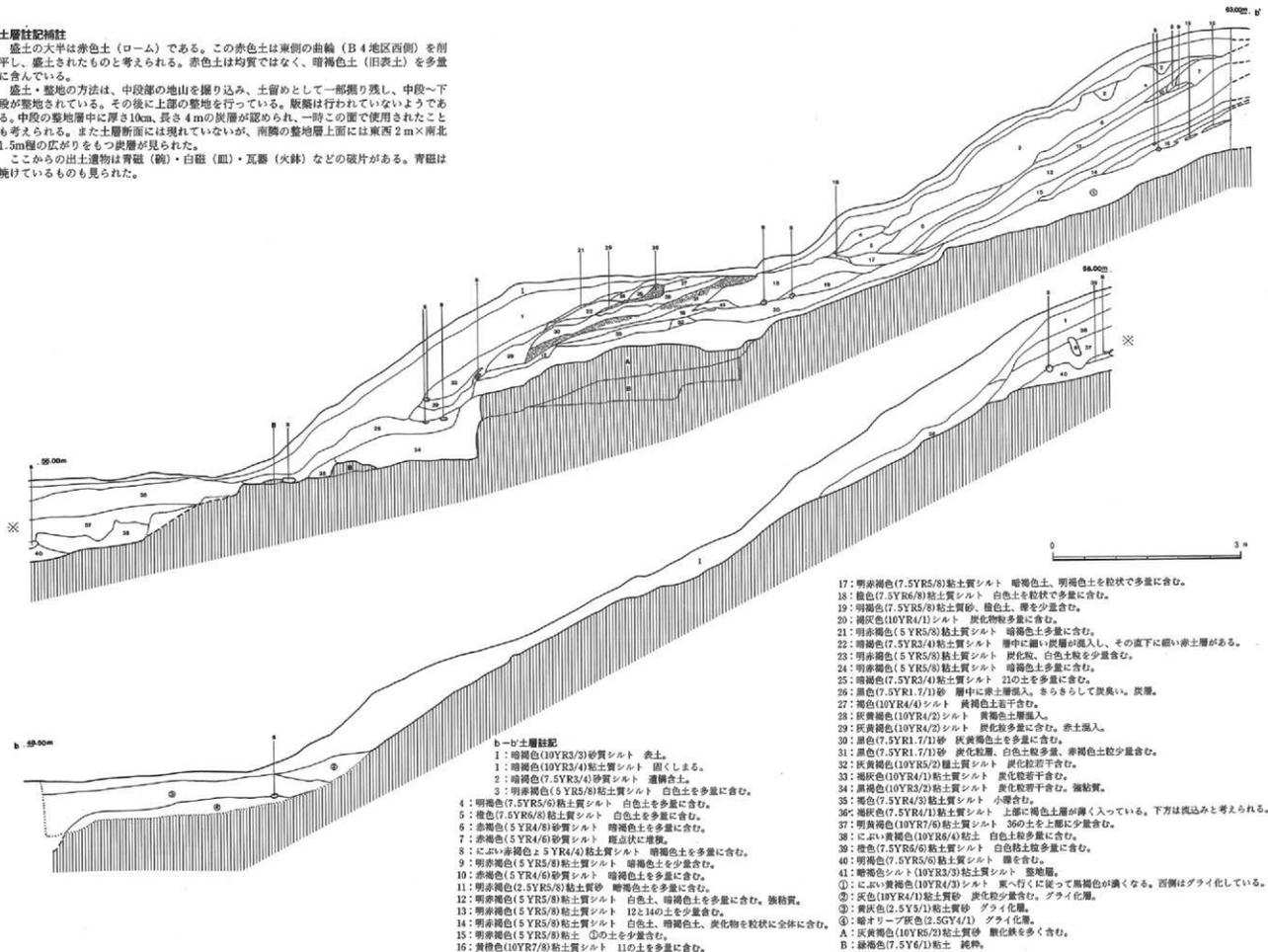
第49図 山権跡B3~4地区全体図

## 土層柱記補註

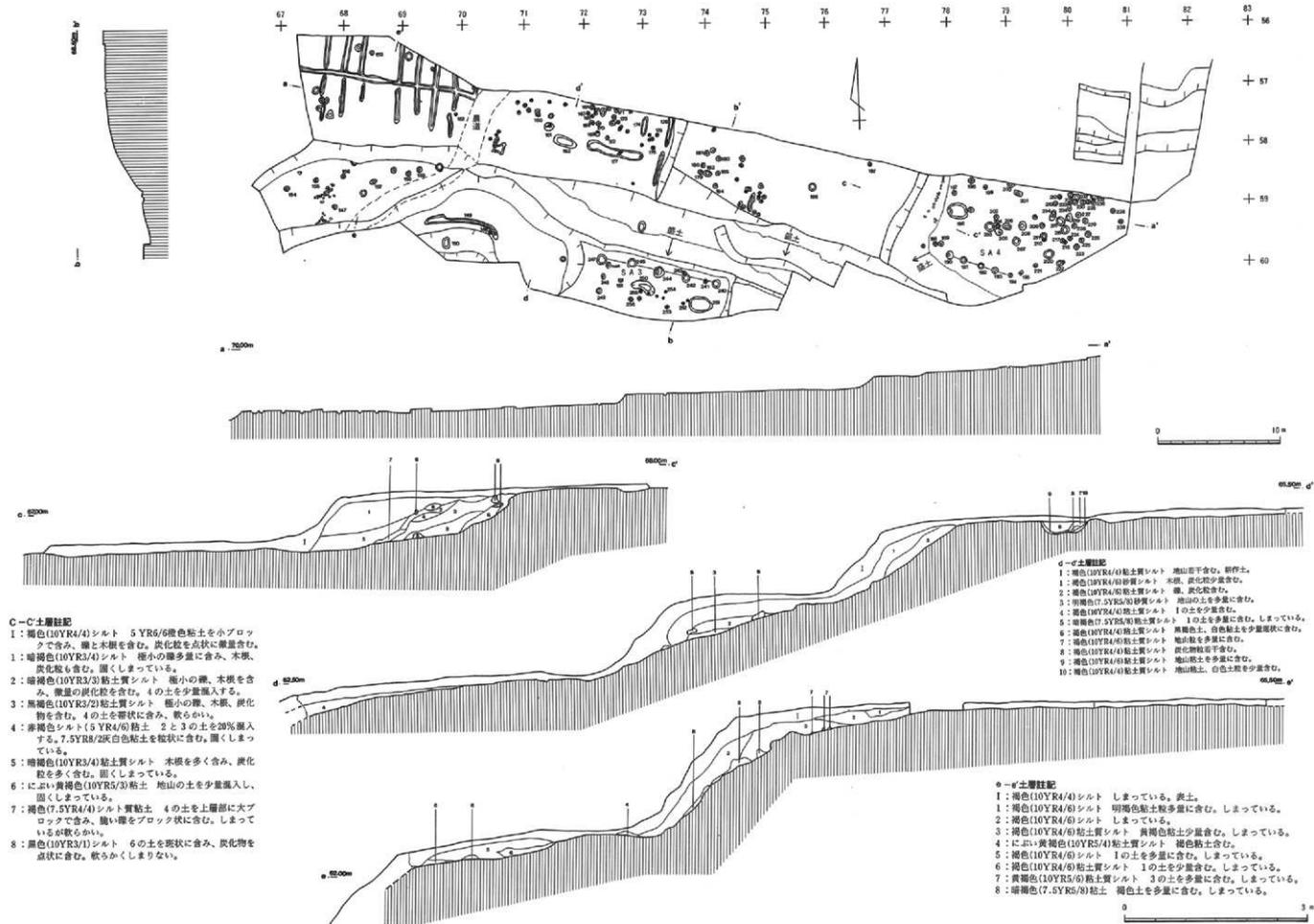
盛土の大半は赤色土（ローム）である。この赤色土は東側の曲輪（B4地区西側）を削平し、盛土されたものと考えられる。赤色土は均質ではなく、暗褐色土（旧表土）を多量に含んでいる。

盛土・整地の方法は、中段部の地山を掘り込み、土留めとして一部掘り残し、中段～下段が整地されている。その後上部の整地を行っている。取壊は行われていないようである。中段の整地層中に厚さ10cm、長さ4mの炭層が認められ、一時この重で使用されたことも考えられる。また土層断面には現れていないが、南隣の整地層上には東西2m×南北1.5m程度の広がりをもつ炭層が見られた。

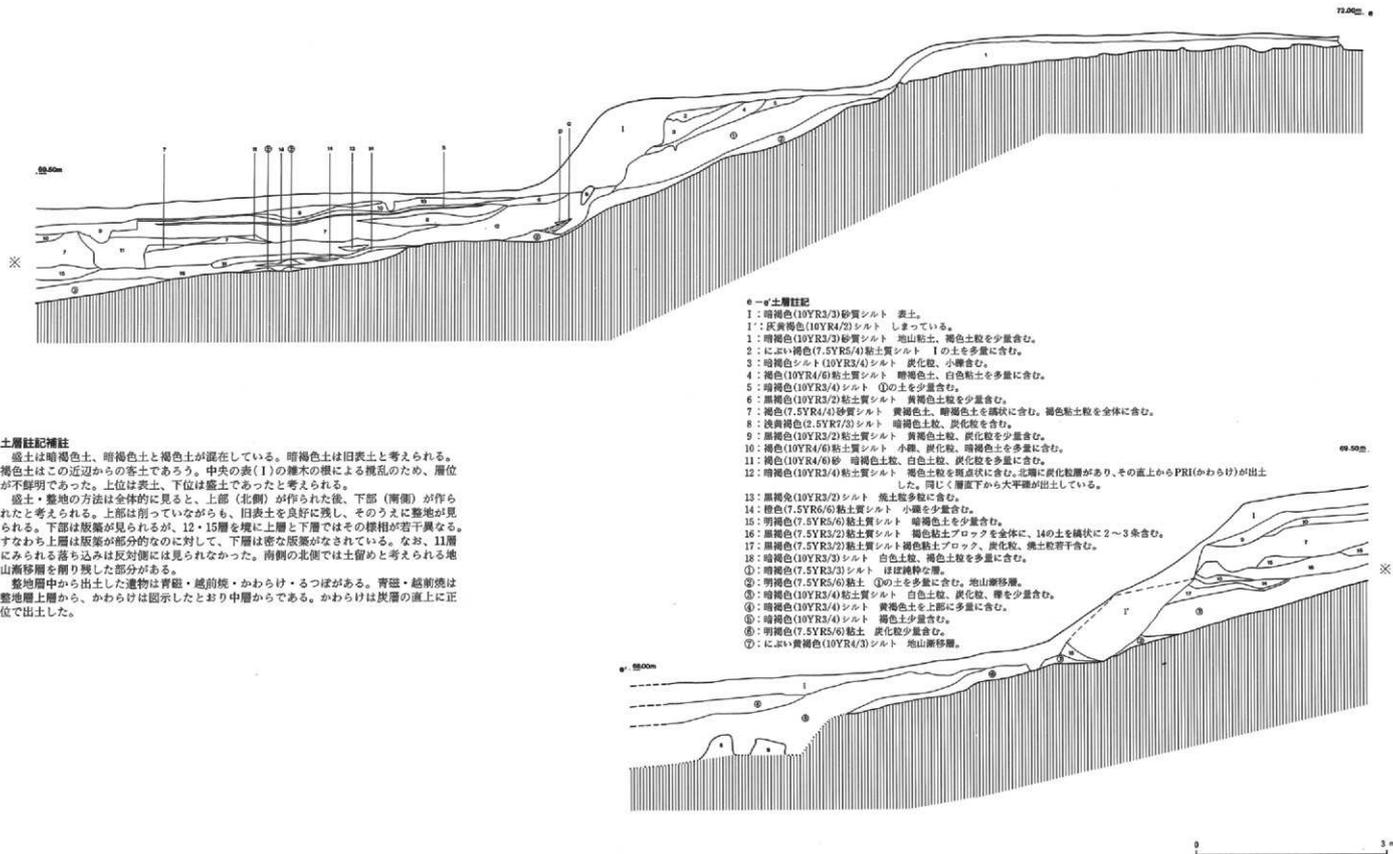
ここからの出土遺物は青磁（碗）・白磁（皿）・瓦器（火鉢）などの破片がある。青磁は焼けているものも見られた。

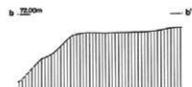
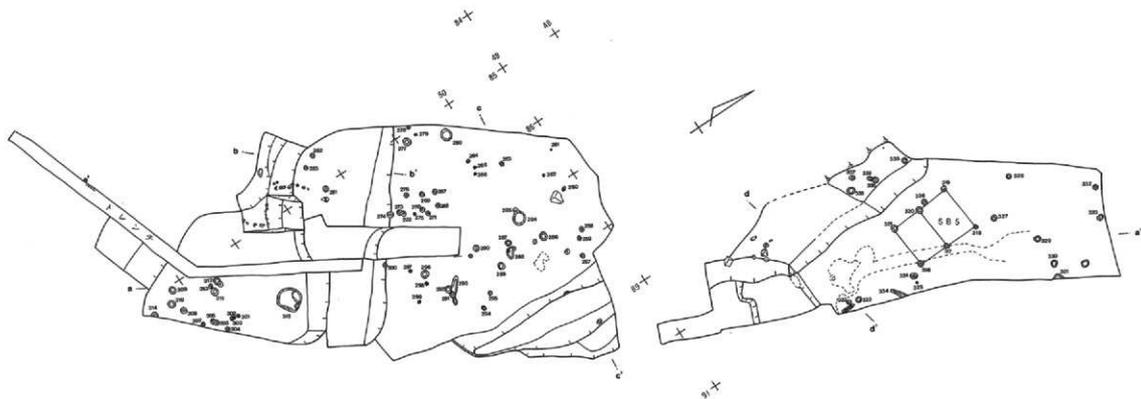


第50図 山権橋跡B3地区 b-b'土層断面

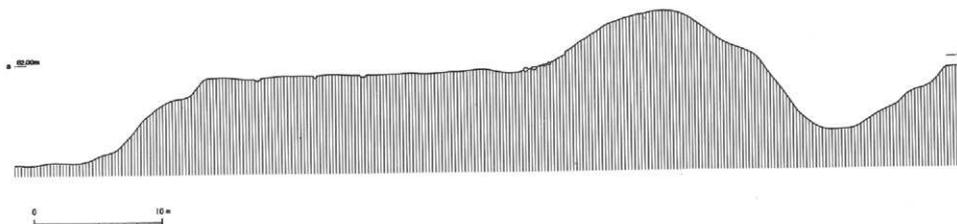
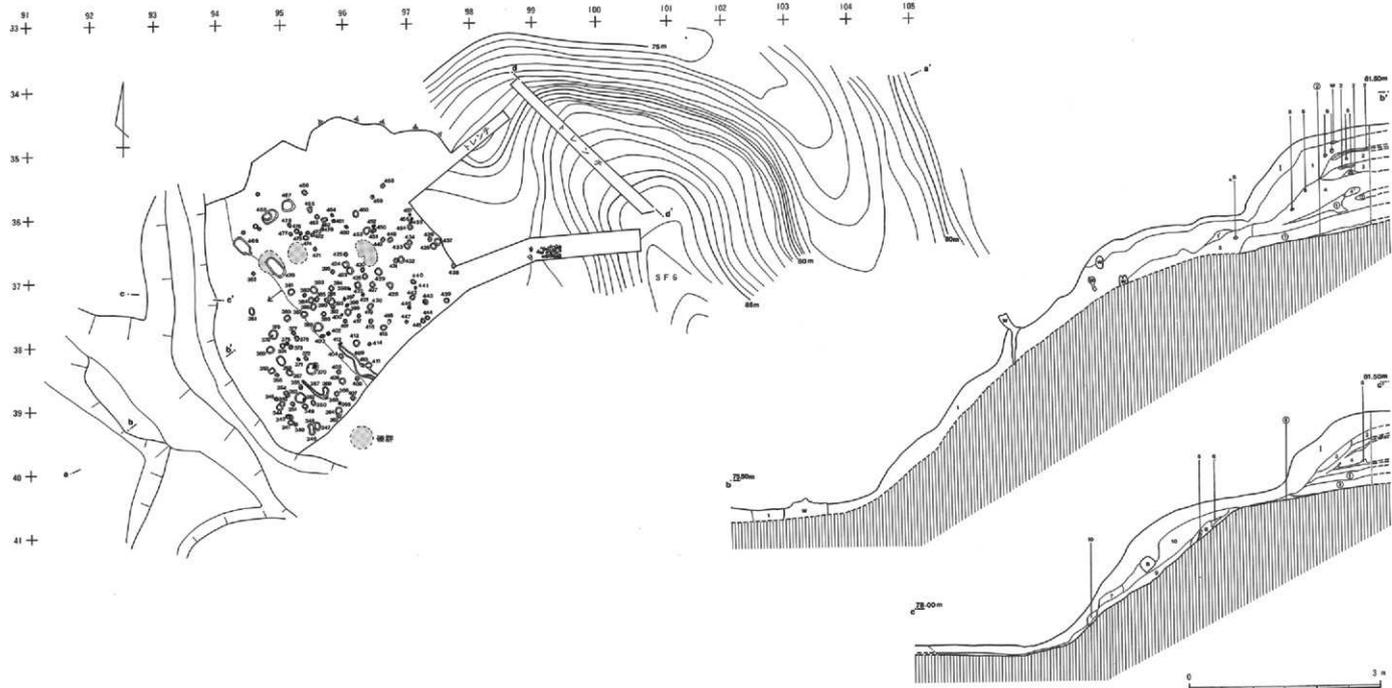


第51図 山橋橋跡B 4~5地区全体図・土層断面





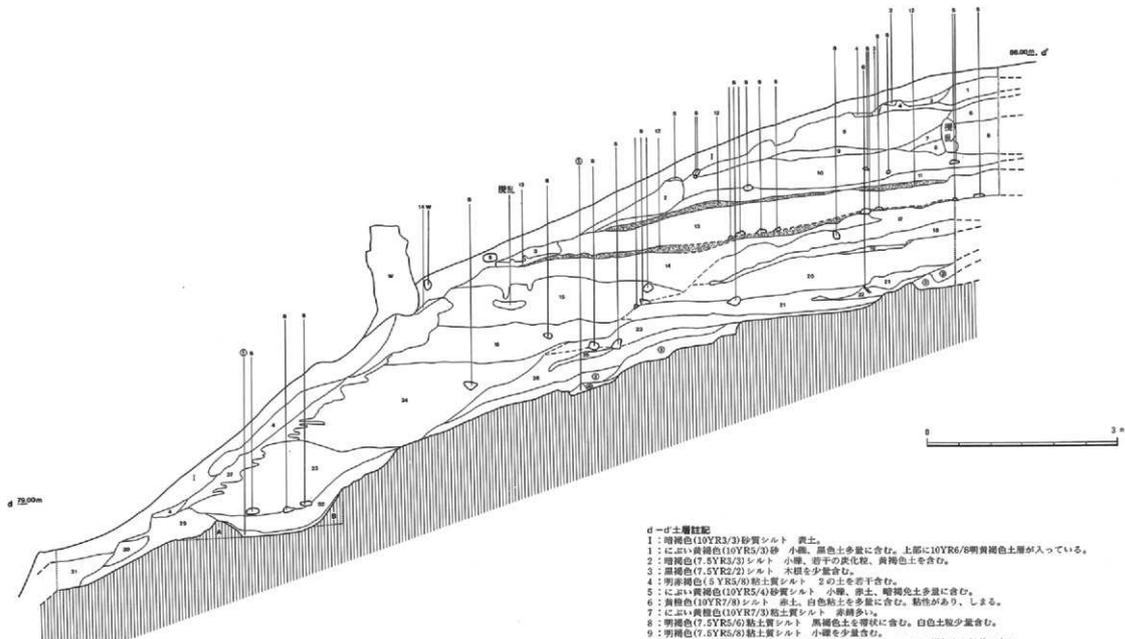
第53図 山樞樞跡C6地区全体図



## b-b' c-c'土層註記

- 1: 褐色(10YR4/4)粘土質シルト 木根を多量に含む、隙間な層も含む、しまりなくがロゴロしている。黄土。
- 1': 濃い黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト 木根を多量に含む、10YR7/黄褐色シルト、濃状に含む。1の土を混入する。軟らかくしまりない。
- 2: 黄褐色(10YR4/4)粘土質シルト 木根、隙間に10YR7/黄褐色シルトを含む。固くしまる。
- 2': 黄褐色(10YR5/3)粘土質シルト 木根を含む、1の土を小ブロックで15%混入する。軟らかいがしまっている。
- 3: 黄褐色(7.5YR7/3)粘土質シルト 木根、石を含む、1の土を小ブロックで20%混入する。軟らかいがしまっている。
- 4: 明黄褐色(5YR5/3)シルト質粘土 木根、少量の隙間を含む。炭化粒も点状に含む、形状の隙間を含む。5の土を隙間に混入する。固くしまっている。
- 4': 暗褐色(10YR5/3)粘土質シルト 木根、炭化粒を含む。4の土を小ブロックで5%含む。固くしまっている。
- 5: 明褐色(7.5YR5/1)シルト質粘土 木根、小石を含む。7.5YR6/2灰白色粘土を30%、1の土を隙間に5%含む。固くしまっている。
- 6: 褐色(10YR4/4)粘土質シルト 木根、少量の隙間を含む。やがしまる。
- 7: 暗褐色(10YR3/4)シルト 木根、少量の小礫を含む。固くしまっている。
- 8: 褐色(5YR6/6)粘土質シルト 6の土を10%混入し、軟らかいがしまっている。
- 9: 褐色(7.5YR4/4)粘土質シルト 5YR6/黄褐色シルト質粘土を塊状に含む。固くしまっている。
- 10: 明褐色(7.5YR5/3)粘土質シルト 10YR3/4暗褐色シルトを30%混入する。固くしまっている。
- ①: 暗褐色(10YR3/4)シルト 炭化粒、細砂を含むがほぼ純粋。しまっている。
- ②: 褐色(7.5YR4/4)粘土質シルト 少量の小礫、隙間の炭化粒を含む。下部に5YR6/黄褐色シルト質粘土を塊状に含む。固くしまっている。
- ③: 褐色(7.5YR4/4)粘土質シルト ②の土を20%混入している。
- ④: 褐色(5YR6/3)シルト質粘土 木根、小礫を含む。ほぼ純粋。

第54図 山楯補跡C6地区SF6土層全体図・土層断面



## 土層註記補註

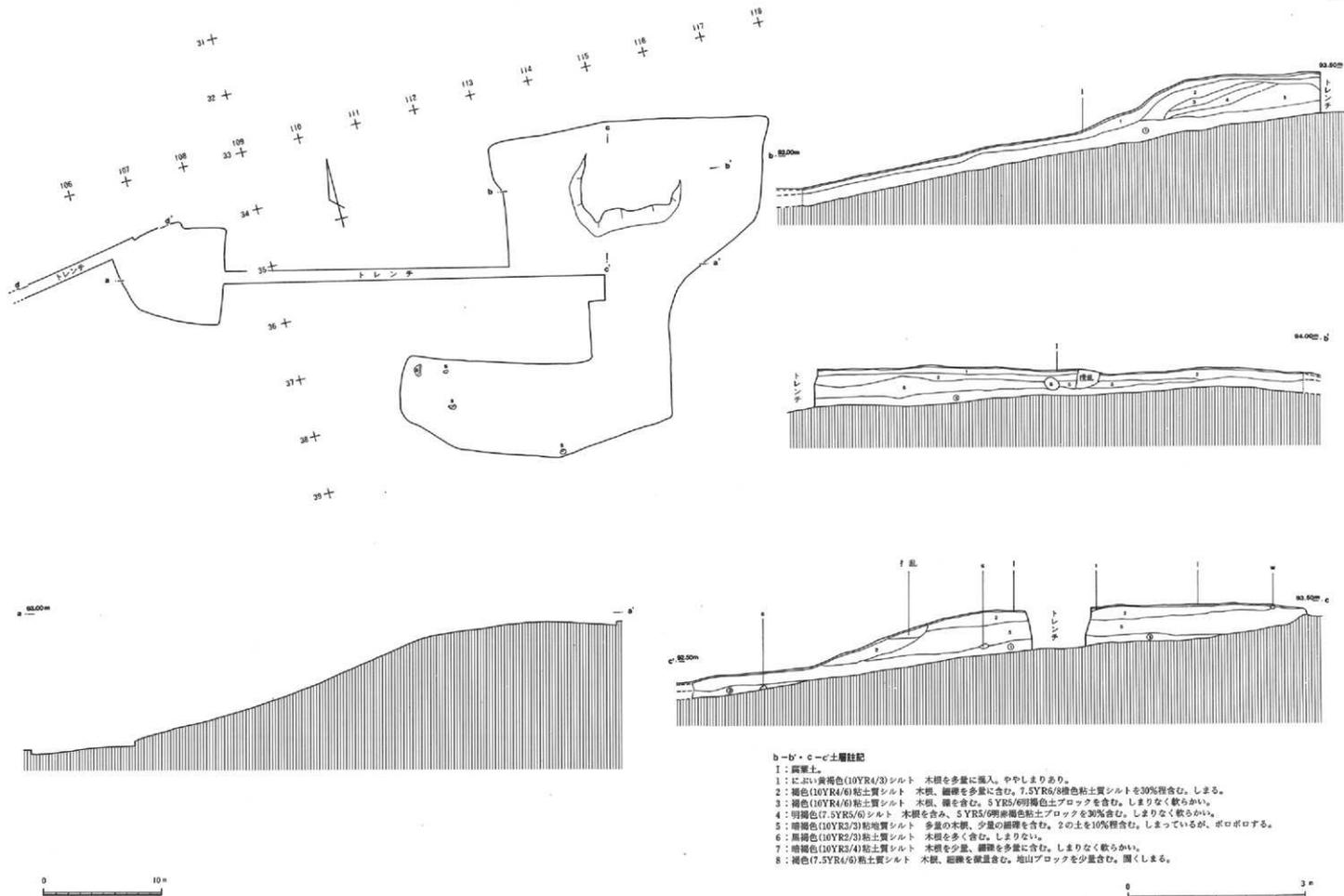
盛土は大別すると暗褐色土、黄褐色土、赤色土となる。暗褐色土は旧表土、黄褐色土・赤褐色土(ローム)は地山の削平土と考えられ、土星の位置からこの盛土は東南上方に位置する主郭削平の露生したものと思われる。

盛土は暗褐色土と赤色土の互層となっており、暗褐色土には褐色土を、赤色土には暗褐色土を構績状、あるいはブロック状に細く3~10条含んでいる。これらは固くしまっていることから仮装が施されたものと考えられる。

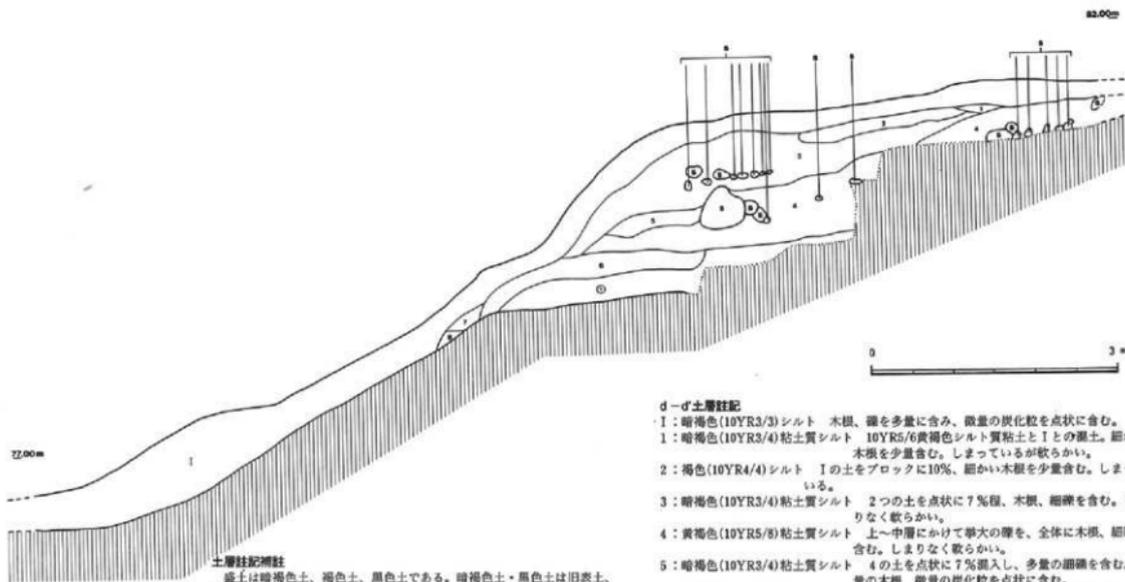
土盛り中に人頭大~拳大の礫層が2条認められる。標高83~84mにかけて1条、標高82.1mに1条である。前者は面的に広がりをもち、後者は南接する腰曲輪の整地層上面にも3m幅で検出されたことや、断面観察では横方向の広がりが認められないことなどからドーナツ状に配置されたものと考えられる。このような礫層は盛土の際の土留め機能をもつものと推定される。

## d-7土層註記

- 1: 暗褐色(10YR3/3)砂質シルト 表土。
- 2: 赤い暗褐色(10YR5/2)砂 小礫、黒色土多量に含む、上部に10YR6/6明黄褐色土層が入っている。
- 3: 暗褐色(7.5YR3/2)シルト 小礫、若干の炭化粒、黄褐色土を含む。
- 3: 黒褐色(7.5YR2/2)シルト 木屑を少量含む。
- 4: 明黄褐色(10YR5/4)粘土質シルト 3の土を若干含む。
- 5: 赤い黄褐色(10YR5/4)砂質シルト 小礫、赤土、暗褐色土多量に含む。
- 6: 黄褐色(10YR7/8)シルト 赤土、白色粘土を多量に含む。粘性があり、しまる。
- 7: 赤い黄褐色(10YR7/8)粘土質シルト 赤褐色土。
- 8: 暗褐色(7.5YR5/6)粘土質シルト 黒褐色土を帯状に含む。白色土を少量含む。
- 9: 黄褐色(7.5YR5/8)粘土質シルト 小礫を少量含む。
- 10: 褐色(10YR4/4)粘土質シルト 暗褐色土、明褐色土、赤い黄褐色土を線状に含む。
- 11: 黄褐色(10YR7/8)シルト 暗褐色土、黒色土、赤い黄褐色土を線状に含む。炭化粒を含む。
- 12: 褐色(7.5YR7/1)粘土質シルト 炭層、下方の層中には粘土粒を少量含む。
- 13: 暗褐色(7.5YR5/6)砂質シルト 赤い黄褐色土、暗褐色土を帯状又は斑点状に含む。炭化粒若干含む。
- 14: 褐色(7.5YR4/6)粘土質シルト 白色土を斑点状に、暗褐色土を線状に含む。
- 15: 褐色(7.5YR5/6)砂 礫少量、白色土を多量に含む。
- 16: 赤い黄褐色(10YR5/4)砂 礫を若干含む、暗褐色土を線状に含む。赤っぽい。
- 17: 暗褐色(10YR2/3)シルト 赤い黄褐色土を斑点状に含む。
- 18: 暗褐色(10YR5/6)粘土 炭化粒を少量、暗褐色土を線状又はブロック状に含む。
- 19: 褐色(10YR4/4)シルト 赤褐色土を斑点状に含む。
- 20: 暗褐色(10YR3/4)シルト 線状に炭層、赤い黄褐色土を斑点状に含む。
- 21: 暗褐色(10YR2/3)シルト 褐色土を少量含む。
- 22: 暗褐色(10YR2/3)シルト 炭化物片を中央部に含む。黄褐色土を線状に含む。
- 23: 暗褐色(10YR3/4)シルト 赤い黄褐色土層、黒褐色土を斑点状に線状に含む。
- 24: 褐色(10YR4/4)粘土質シルト 暗褐色土を線状に下巻、灰白色粘土、黒土を多量に含む。
- 25: 明黄褐色(10YR6/8)粘土 下層に炭層を含む。
- 26: 暗褐色(10YR2/4)粘土質シルト 炭化粒、褐色土を少量含む。
- 27: 暗褐色(10YR2/4)シルト 炭化粒若干含む。
- 28: 赤い黄褐色(10YR5/4)シルト 黒褐色土を線状に粉砕含む。灰白色土を多量に含む。
- 29: 暗褐色(10YR2/4)粘土質シルト Aの土を少量含む。
- 30: 褐色(10YR4/6)粘土質シルト 灰白色土を若干含む。
- 31: 暗褐色(10YR3/4)粘土質シルト 1の土を若干含む。
- 32: 赤い黄褐色(10YR5/4)粘土質シルト 灰白色土、暗褐色土を線状に含む。強粘質。
- ①: 褐色(10YR4/1)粘土質砂 下部に白色粘土を含む。
- ②: 褐色(7.5YR3/3)シルト 地山崩移層。
- ③: 黄褐色(10YR5/6)粘土質シルト 白色土、暗褐色土を多量に含む。強粘質。地山崩移層。
- ④: 褐色(7.5YR5/8)粘土質シルト 地山崩移層。
- ⑤: 暗褐色(7.5YR3/8)粘土質砂 地山崩移層。
- A: 暗褐色(7.5YR5/8)粘土質シルト 上部に暗褐色土を少量含む。
- B: 灰白色(2.5YR2/2)粘土 上部に①の土を若干含む。



第56図 山橋筋路D8地区全体図・土層断面



**土層註記補註**

褐色土は暗褐色土、褐色土、黒色土である。暗褐色土・黒色土は旧炭土、褐色土は地山（ローム）と考えられる。  
 礫地層は暗褐色土と褐色土の互層である。最上層は褐色土で均質、この部分はかなりしまりが少ないことから、叩しめられている可能性がある。以下の層は全体にしまりが少ないことから、部分的に振蕩が行われたと考えられる。礫地層中には土留めと推定される礫層（小礫～1m大の礫）2箇所出された。上層の方は遺構検出面下の深掘り確認した。遺構検出面は2層上面である。  
 遺物は整地層上面から、石鉢、縄文時代の石鏃が出土した。

**d-d'土層註記**

- ①：暗褐色(10YR3/3)シルト 木根、礫を多量に含む、微量の炭化粒を点状に含む。
- 1：暗褐色(10YR3/4)粘土質シルト 10YR5/6黄褐色シルト質粘土と①との混土。細かい木根を少量含む。しまっているが軟らかい。
- 2：褐色(10YR4/4)シルト ①の土をブロックに10%、細かい木根を少量含む。しまっている。
- 3：暗褐色(10YR3/4)粘土質シルト 2つの土を点状に7%混入、木根、細礫を含む。しまりなく軟らかい。
- 4：黄褐色(10YR5/8)粘土質シルト 上～中層にかけて華大の礫を、全体に木根、細礫を含む。しまりなく軟らかい。
- 5：暗褐色(10YR3/4)粘土質シルト 4の土を点状に7%混入し、多量の細礫を含む。少量の木根、微量の炭化粒を点状に含む。
- 6：黒褐色(7.5YR2/2)シルト 4の土を点状に3%混入し、少量の木根、細礫を含む。固くしまる。
- 7：暗褐色(10YR3/4)シルト 地山の土(10YR5/6黄褐色シルト質粘土)を2%混入し、多量の木根を含む。しまりなく軟らかい。
- 8：黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト 地山の土との混土。木根、少量の礫を含み、しまりなく軟らかい。
- ②：黒色(7.5YR2/1)シルト 細かい木根を少量含むが、ほぼ純粋。但し東側の方は固くしまっているが、両端部の方は軟らかく全くしまりが少ない。

第57図 山裾掘跡D8地区d-d'土層断面

## 5 出土した遺物

今回の調査における遺物の出土量は整理箱にして6箱である。表土、曲輪の盛土層、遺構覆土等から、A地区1箱、B地区3箱、C地区1箱、D地区1箱である。

### (1) 縄文時代の遺物

縄文土器片1点、石鉢1点が出土した。時期は不明である。A地区およびD地区に何らかの遺構の存在が考えられる。

### (2) 須恵器・赤焼土器

須恵器13点、赤焼土器10点出土のうち6点について図示した。本遺跡の立地環境から周辺の遺跡（竊跡、平野部の集落跡）との関連が予想される。9世紀の所産と考えられる。

### (3) 青磁（第58図8～20）

碗は破片総数43点、図示したものは10点である。8～11は線刻による蓮弁文、12～13は片切彫りによる蓮弁文が施される。14は口縁部体部外面に沈線有する。15～16は小片のため不明だが雷文帯蓮弁文とも考えられる。17は小形の碗で体部が屈曲する。

皿は14点出土した。図示したのは口縁部等の遺存状態から3点にとどまる。いずれも稜花割花文皿である。体部下半で屈曲し大きく外反しながら輪花をなす口縁部にいたる。18は2次的に焼けている。その他、底部8点、香炉脚部1点が出土した。

### (4) 白磁（第58図21）

皿7点が出土した。図示した1点を除き小片である。21は体部から口縁部へが緩やかに内彎する。体部下半～底部が露胎となる。他の小片も同様である。

### (5) 朝鮮・唐津系陶器（第58図22）

2点出土した。いずれも皿である。図示したのは22の1点である。白濁した釉が体部内面、口縁部外面に施される。

### (6) 瀬戸系陶器（第58図23・24）

2点について図示した。灰釉である。23は皿、体部下半で屈曲し口縁部で大きく外反する。体部内面には押し引きによる蓮弁文風の施文がなされる。24は瓶子肩部片である。

### (7) かわらけ（第58図25）

1点の出土である。ロクロ成形で底部は丸底となる。体部にはロクロなでがみられる。

### (8) 珠洲系陶器・越前系陶器（第59図1～8）

珠洲系陶器は60点程、越前系陶器は70点程の出土である。大半が壺・摺鉢の破片資料である。

### (9) 瓦器

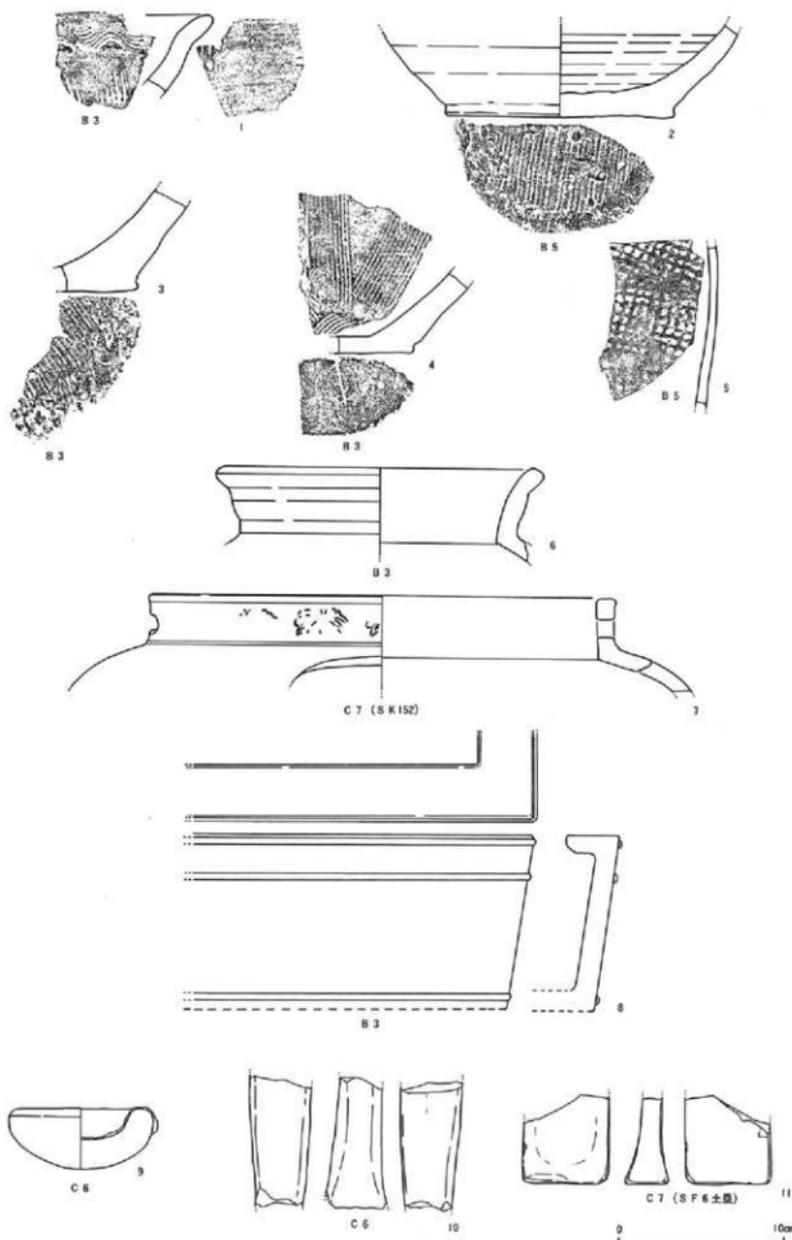
広口の短頸壺形風炉（第59図9）、方形の火鉢（同図10）が出土した。10には2cm程の脚がつく。

### (10) 染付（巻頭図版4）

皿、碗、坏がみられる。青花に限られ、彩の施されたものはない。

以上の他に砥石（B・C地区）、石鉢（C地区）等が出土している。





第59図 山橋遺跡出土遺物(2) 珠洲系陶器(1~3) 越前系陶器(4~6) 瓦器(7~8) るつば(9) 砥石(10~11)

## 6 ま と め

今回の調査は、国営農地開発事業島海南麓地区第1号幹線道路（A）にかかる緊急発掘調査である。調査は、路線域約15,000㎡のうち、沢等を除いた部分、A地区900㎡、B地区2,100㎡、C地区1,600㎡、D地区600㎡、トレンチ600㎡ 計5,800㎡について実施した。

1 規模 調査は第1号幹線道路Aの路線に限定して実施したため、橋全体の状況については不明な点が残る。先に実施した遺跡詳細分布調査で作成した縄張り図に基づき今回の調査期間中に踏査した結果を踏まえ、新たに作成したものが第60図の山橋橋跡縄張り図である。A1地区の捉え方で範囲は流動的だが、西は傾斜変換線以東、南東は山橋集落から北東へ延びる沢と平行する道路部分、北はD地区および曲輪、空堀の確認される範囲までとし、現段階では東西650m・南北500m・面積200,000㎡とする。

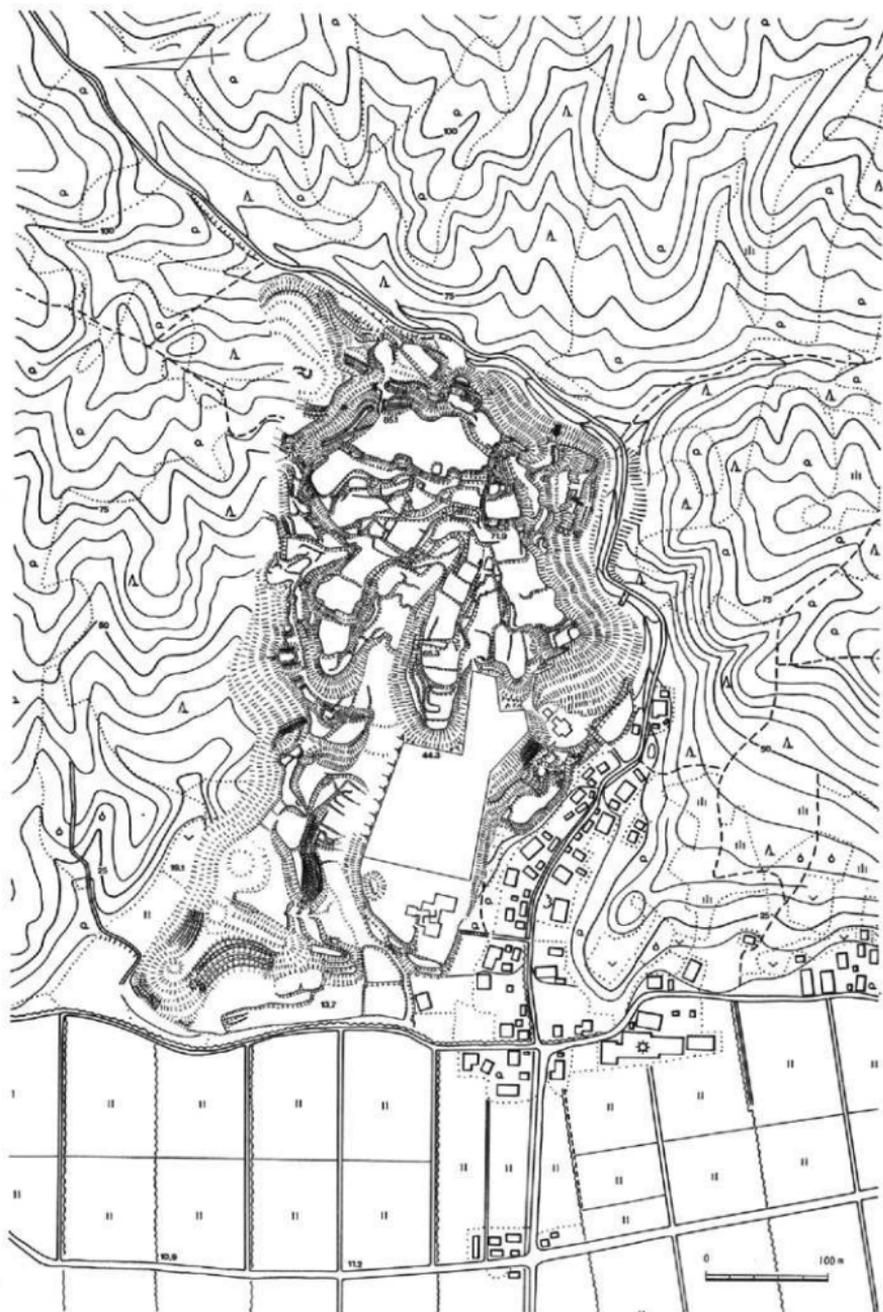
2 造営方法 今回の調査では、面的な調査に加え、土塁・曲輪等については深掘りのトレンチを設定し造営方法の把握に努めた。その結果、C地区の土塁（SF6）の2時期に亘ると考えられる版築状況、各曲輪の削平、整地、残土による造り出し等が明らかになった。主郭に近い曲輪、SF6土塁等では版築が認められるが、A地区やB地区では比較的簡単な土盛り、整地が行なわれている傾向がみられる。また、I～V群までの曲輪群と、山麓に近いVI群の曲輪群の造り出しには緻密さにおいて差が認められる。地形的な要因によるものか、あるいは造営時期の差として捉えられるのか、縄張り図作成時の遺構の捉え方によるものか、今後の課題といえる。

3 遺構 曲輪の平坦部では全体で約470のピット、6基の土壌が検出された。B地区ではSA3・4の柵列状のピット列、C地区ではSB4掘立柱建物跡が確認されたが、その他の多数のピットについては、施設の構造・分布状況等、今後に検討課題を残した。

4 遺物 少量ではあるが本遺跡の年代を知る遺物が得られた。特徴は、輸入陶磁器および日本海側の陶器が主流を占めることである。すなわち、前者は青磁・白磁・染付け、後者は珠洲系陶器・越前系陶器である。若干だが瀬戸系陶器が散見される。遺物は庄内地方藤島町の藤島城と共通の様相を呈する。主要な遺物の年代は、青磁碗の形態・蓮弁文の描出方法、稷花刺文皿等から龍泉窯15世紀中葉～16世紀代、染付けは明代の所産と考えられる。また珠洲系・越前系陶器も同時期の所産と考えられる。

5 総括 山橋橋跡に関する文献、史料は少ない。106頁に掲載した史料が山橋橋跡に関連する文献のほとんどである（軍記を除く）。記載によれば、いづれも16世紀末～17世紀初頭の庄内地方の状況を背景としている。鎌倉・南北朝期の記事はない。

今回の調査では、出土遺物の年代は縄文・平安期および近世～近現代のものを除き、主要な遺物は15世紀末～16世紀代の年代が考えられる。山橋橋跡の機能した時期は、出土遺物からは概ね16世紀代を中心とするものと考えられる。なお、いわゆる縄張り論からの山橋橋跡の考察については、庄内地方あるいは内陸の諸城郭との比較検討が必要と考えられる。今後の資料の増加に期待したい。



第60图 山榭榭跡縄張図 (S=1:4,000)





## 图 版

図版 1



空中写真(高度1,200 m)



遺跡遠景(東から)

図版2



E 調査区全景(南東から)



F 調査区全景(南から)



G調査区全景(南から)



I調査区全景(南東から)

図版4



F調査区基本層序A-A'S K16部分(南東から)



F調査区基本層序B-B'S K1部分(北西から)



E調査区基本層序D地点(南から)



G調査区基本層序F地点(南から)



I調査区基本層序H地点(南西から)



I調査区基本層序I地点(南東から)



現地説明会風景(F調査区)

図版 5



撤入れ式風景(F調査区)



E調査区調査風景(南東から)



I調査区調査風景(北西から)



F調査区SQ6記録風景(北西から)



F調査区調査風景(南東から)

図版6



SQ6a・b 窟跡空中写真



SQ6a・b 窟跡縦断面(南西から)



SQ6a・b 窟跡横断面(南から)



SQ6a 窟跡(東半)、SQ6b 窟跡(西半) 遺物出土状況(南から)

図版 7



SQ6b 窟跡空中写真



SQ6a・b 窟跡縦断面窟尻部分(西から)



SQ6a・b 窟跡近景(南から)



SQ6b 窟跡完掘・断ち割り状況(南から)

図版 8



SQ7窯跡空中写真



SQ7窯跡縦断面(南西から)

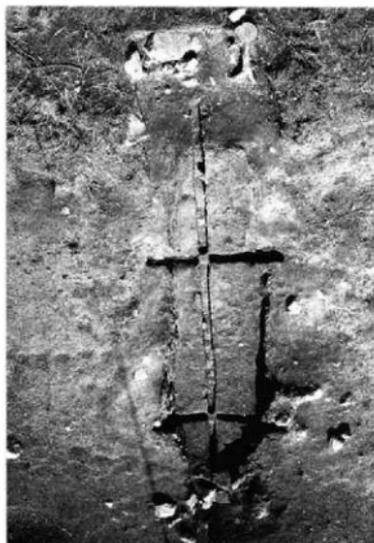


SQ7窯跡断ち割り(南西から)



SQ7窯跡完備状況(南東から)

図版9



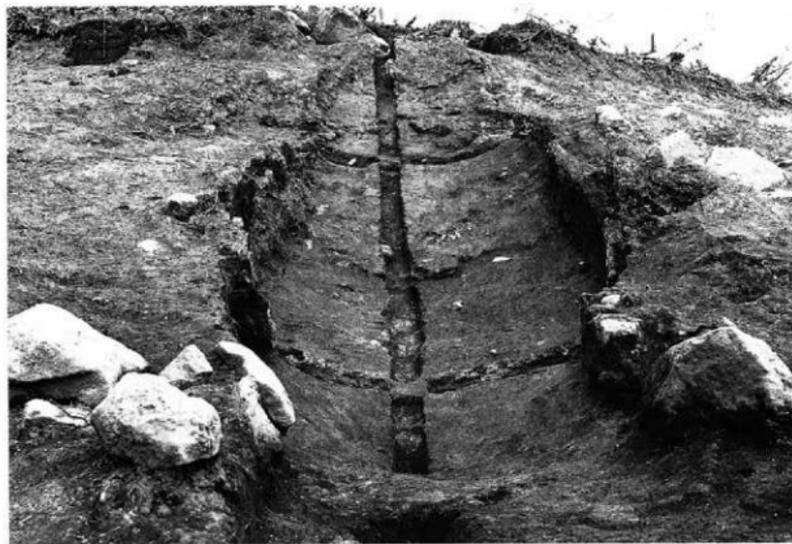
SQ8窟跡空中写真



SQ8窟跡遺物出土状況(南から)

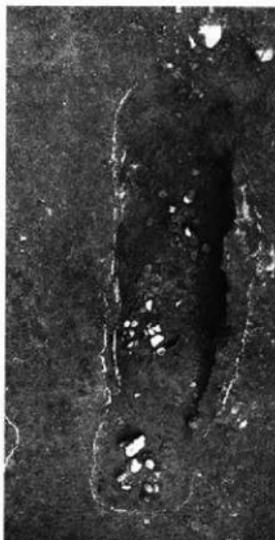


SQ8窟跡断ち割り状況(南西から)



SQ8窟跡完掘・断ち割り状況(南から)

図版10



SQ9窟跡空中写真



SQ9窟跡縦断面(北から)



SQ9窟跡ステ場土層断面(西から)



SQ9窟跡完掘状況(南西から)

図版11



SQ10窟跡空中写真



SQ10窟跡横断面・遺物出土状況(南西から)



SQ10・SQ11窟跡ステ場土層断面(南から)



SQ10窟跡完掘状況(南西から)

図版12



SQ11窟跡空中写真



SQ11窟跡断ち割り(南から)



SQ11窟跡ステ場遺物出土状況(南から)



SQ11窟跡発掘状況(南西から)



SQ12a 窯跡空中写真



SQ12a 窯跡横断面(西から)



SQ12a 窯跡窯灰部(北東から)



SQ12a 窯跡発掘状況(南西から)

図版14



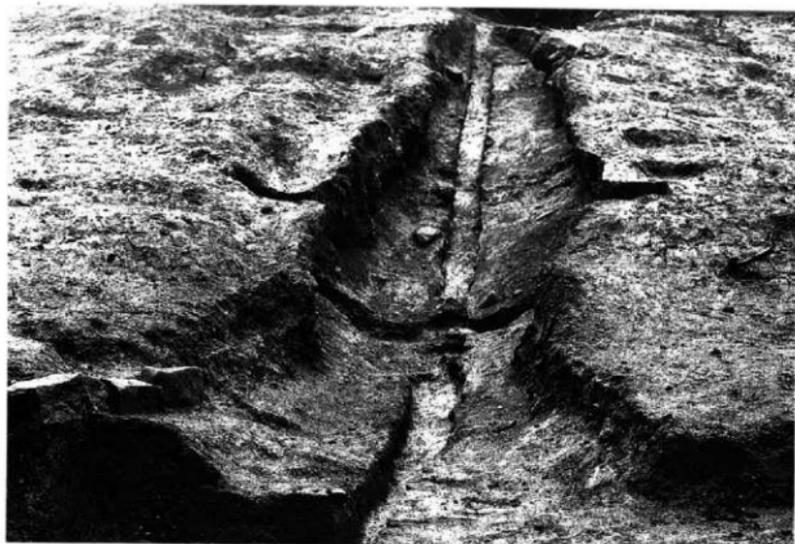
SQ12b 窯跡空中写真



SQ12 窯跡天井崩落状況(西から)



SQ12b 窯跡縦断面焚口部(西から)



SQ12b 窯跡完掘・断ち割り状況(南西から)

図版15



S Q 5窯跡遺物出土状況(南西から)



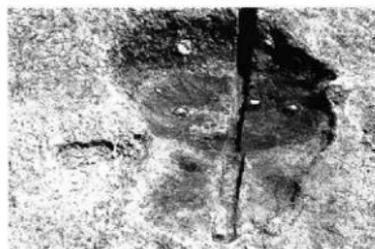
S Q 5窯跡完掘・断ち割り状況(南から)



S K 8焼壁土壌土層断面(東から)



S K 8焼壁土壌完掘状況(南東から)



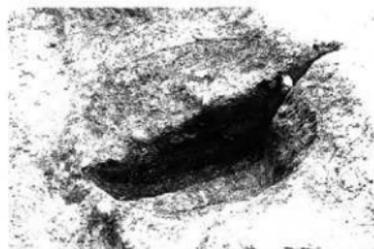
S K 29 a・b焼壁土壌完掘状況(西から)



S K 9焼壁土壌完掘状況(南から)



S K 107 a床面検出・S K 107 b土層断面(南から)



S K 119焼壁土壌土層断面(北西から)

図版16



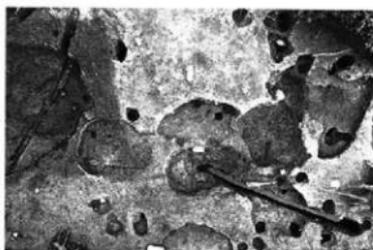
S K 17・18・96焼壁土壇空中写真



S K 17・96焼壁土壇完掘状況(南から)



S K 18焼壁土壇完掘状況(南から)



S K 29・101・106・131・107・109・105・112・S D 120完掘空中写真



S K 26土壇土層断面(南西から)



S K 10土壇完掘状況(南西から)



S P 33柱穴完掘状況(西から)

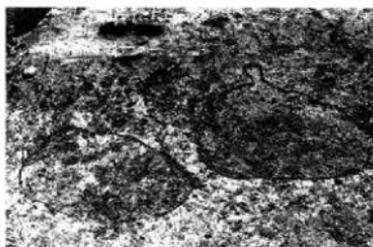
図版17



S K 193粘土採掘坑土層断面(西から)



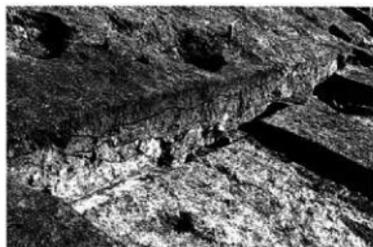
S K 80粘土採掘坑土層断面(北西から)



S K 78・80粘土採掘坑プラン検出状況(西から)



S K 80粘土採掘坑遺物出土状況(西から)



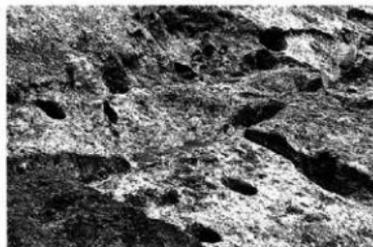
I 調査区S K 4・5・6・7・9土壌土層断面(西から)



I 調査区第18図B-B土層断面(西から)



I 調査区S K 6 E L 半截(南西から)



I 調査区S K 5・6・7・9土塊発掘状況(西から)

図版18



19-1



19-2



19-3



19-4



19-5



19-6



19-7



19-8



19-9



19-10



19-11



19-12



19-13



19-14



19-15



19-16



20-1



20-2



20-3



20-4



20-5



20-6



20-7



20-8



20-9



20-10



20-14-15 35-13-15



20-11



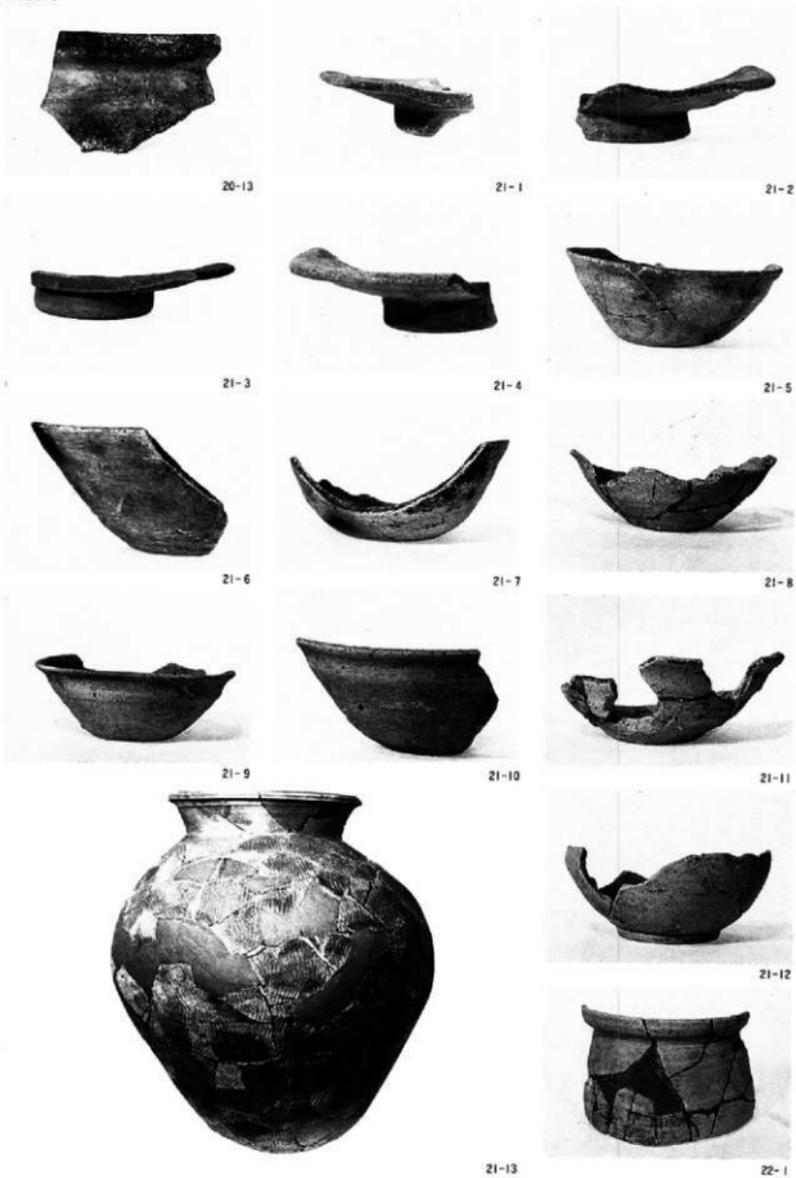
20-12



20-14-15 35-13-15



图版20





22-2



22-3



22-4



22-5



22-6



22-7



22-8



22-9



22-10



22-13



22-14



23-2



23-6



23-7



23-9



23-12



23-16



23-14

图版22



23-13



23-15



23-18



23-17



24-1



24-5



24-6



24-7



24-9



24-11



24-13



24-14



24-16



25-6



25-7



25-8



25-9



25-11



25-12



25-15



26-1



26-6



26-9



26-10



26-13



26-17



26-18



26-19



27-1



27-2



27-3



27-4



27-5



27-6



27-7

圖版24



28-2



28-1



28-4



28-3



28-1



28-5



28-2



30-2



30-5

29-3



30-6



30-7



30-8



30-9



30-10



30-11



30-12



30-13



30-14



30-15



30-16



30-17

圖版26



參考資料 生石2遺跡出土墨書

図版27



山橋8遺跡A地区遺構検出状況



山橋8遺跡B地区遺構調査状況

図版28



ST1完掘状況



ST1土層セクション



ST1遺物出土状況



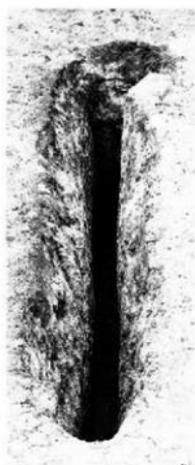
ST1カマド遺物出土状況



ST1遺物出土状況



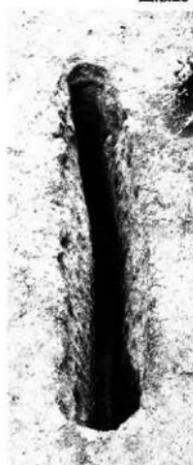
SK2土層断面



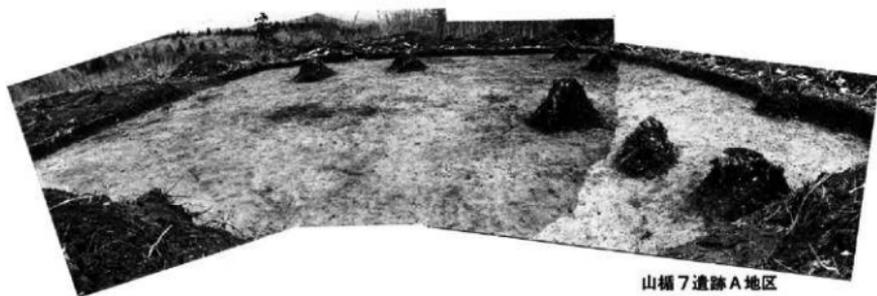
SK2完掘状況



SK3土層断面



SK3完掘状況



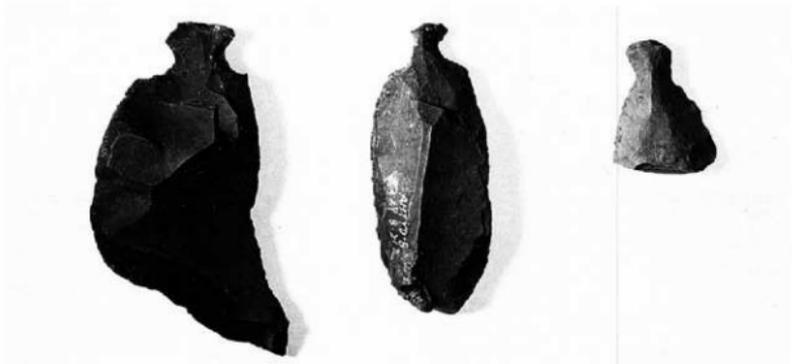
山樞7遺跡A地区



山樞7遺跡B地区



石鏃



石匙



筥状石器



筥状石器  
山橋8遺跡出土遺物(1)



筲状石器



石槍



削器



磨製石斧  
山樞8遺跡出土遺物(2)

図版32



41-3



41-4



41-5



41-6



41-7



41-8



41-9



41-10



41-11



41-12



陶文土器



陶文土器

山樞8遺跡出土遺物(3)



42-1



42-2



42-3



42-4



42-5



42-6



42-7



42-8



42-9



42-10



42-11



42-12



42-17



42-18



42-19



42-20



43-1



43-2



43-3



43-4



43-5



43-6



43-7



43-8



43-9



43-10



43-10



43-12



43-13



43-14



43-15



43-16

図版34



山楯遺跡・周辺部空中写真



遺跡遠景(西から)



主郭(現・山楯農村公園)



周辺環境(山楯の大けやき 県指定天然記念物)



周辺環境(山楯集落 大神神社)



周辺環境(鎌倉期の五輪塔 長久寺境内)

図版35



調査区空中写真(B~D地区)



A地区調査前状況



A1地区完掘状況



A2地区完掘状況



A2地区トレンチ土層断面

図版36



B3地区調査前状況



B3地区表土除去



B3地区トレンチ土層断面



B3地区トレンチ土層断面



B4地区西側曲輪完掘状況



B地区調査前状況(東から)



B地区調査風景(東から)

图版37



B地区遺構検出状況



B地区遺構完掘状況



B5地区SA3



B5地区SD149



B5地区土層断面(d-d')



B5地区土層断面(d-d')



B地区空中写真

図版38



C6地区調査前状況(北から)



C6地区遺構検出状況(北から)



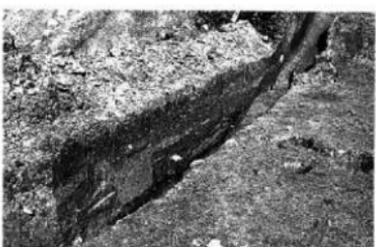
C6地区完掘状況(南から)



C6地区完掘状況(南から)



B5-C6間トレンチ土層断面



B5-C6間トレンチ土層断面



S K315土層断面



かわらけ出土状況(B5-C6間トレンチ)



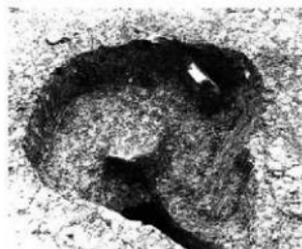
SF6土壘(C7地区 東から)



C7地区調査前状況(南から)



C7地区完掘状況



土風炉出土状況(S K 370)



C7-C6間トレンチ土層断面



C7地区完掘状況



SF6土壘土層断面

図版40



D地区調査前状況(北から)



SB7土壇断面(D地区)



D地区西曲輪トレンチ土層断面



D地区西曲輪トレンチ土層断面



鍬入れ式風景



作業風景(B4地区)



作業風景(B3地区トレンチ)



現地説明会風景



58-1



58-2



58-3



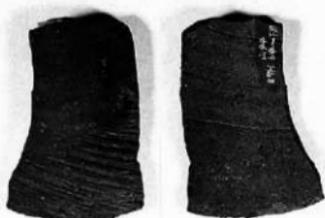
58-4



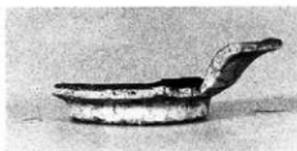
58-5



58-6



58-7



58-18



58-21



58-22



58-23



58-25



59-1



59-2



59-3



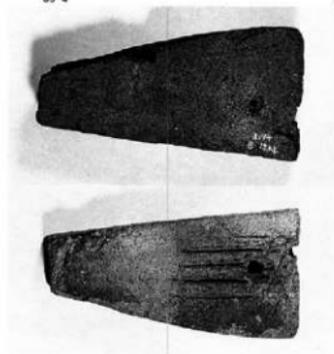
59-4



59-5



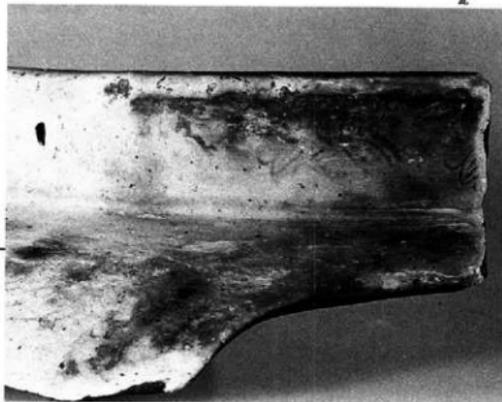
59-5



五



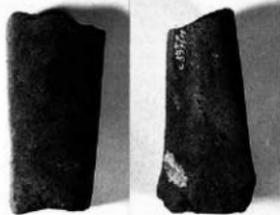
59-7



山樞樞跡出土遺物(2)



59-8



59-10



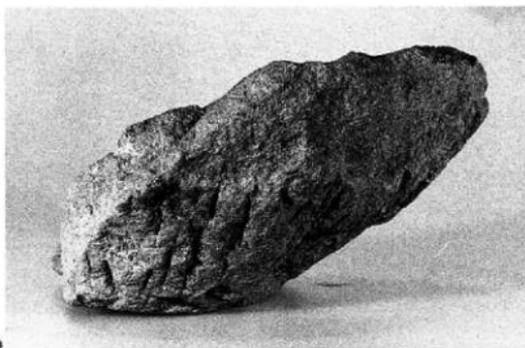
59-9



59-11



磁石



石群

## 附 編



先に行ったと同様、登窯および土壌焼土の熱残留磁化測定による考古地磁気年代推定を行う。考古地磁気年代の検討を行う試料は、10基の登窯と18基の土壌のそれぞれ焼土である。考古地磁気から推定される各遺構の年代値は、土器形式から推定される考古年代と比較・検討を行う。

なお、考古地磁気による年代推定の原理等、詳細については前回1次調査の報告書を参照されたい(藤根, 1991)。

表2 各土壌(SK)の熱残留磁化測定結果とその統計処理結果

遺構	試料番号	試料重量 (g)	測定温度 (°C)	測定時間 (min)	測定方法	測定結果	備考	統計処理項目	統計値
SK 1 4	01	10.6	72.4	6.133	計算磁化	試料値			
	02	18.2	74.8	6.233	(n)				
	03	18.2	74.8	6.233	平均値	10			
	04	11.9	66.1	6.248	(E)	3.18			
	05	18.3	74.8	6.233	平均値	10			
	06	13.1	63.3	6.228	(n)	53.01			
	07	20.9	66.1	6.248	試料値(10)	10.88			
	08	6.8	66.1	6.248	(n)				
	09	14.8	49.2	6.171	試料値(11)	9.35			
	10	9.2	72.8	6.131	(n)				
					信頼係数	33.85			
					(E)				
SK 1 7	01	4.1	85.1	6.224	試料値				
	02	7.8	36.7	6.211	(n)	6			
	03	14.5	87.8	6.154	平均値	10			
	04	10.7	46.1	6.154	(E)	3.35			
	05	10.7	46.1	6.154	計算磁化	試料値			
	06	12.2	41.3	6.134	(n)	57.37			
	07	13.1	28.7	6.218	(n)	16.92			
	08	12.2	26.2	6.218	試料値(11)	8.54			
	09	10	57.1	6.233	(n)				
	10					信頼係数	115.81		
					(E)				
SK 1 8	01	9.5	36.8	6.213	試料値				
	02	7.1	49.8	6.211	(n)	10			
	03	11.2	55.4	6.211	平均値	10			
	04	9.2	22.8	6.233	(E)	-7.18			
	05	7.4	55.7	6.218	平均値	10			
	06	7.4	55.7	6.218	(n)	53.44			
	07	11.2	28.7	6.211	試料値(10)	2.30			
	08	7.1	49.7	6.218	(n)				
	09	11.2	28.7	6.211	試料値(11)	1.77			
	10	7.1	52.4	6.184	(n)				
					信頼係数	143.33			
					(E)				
SK 2 1	01	9.5	84.8	6.203	試料値				
	02	2.3	86.5	6.404	(n)	10			
	03	1.6	56.5	6.211	平均値	10			
	04	1.7	56.5	6.211	(E)	0.15			
	05	1.6	26.5	6.211	平均値	10			
	06	2.3	27.8	6.211	(n)	53.16			
	07	2.3	27.8	6.211	試料値(10)	5.81			
	08	2.3	27.8	6.211	(n)				
	09	4.1	57.8	6.211	試料値(11)	3.25			
	10	2.3	86.5	6.211	(n)				
					信頼係数	263.95			
					(E)				
SK 2 9 A	01	11.2	25.8	6.411	計算磁化	試料値			
	02	2.1	22.8	6.233	(n)	8			
	03	13.1	16.5	6.269	平均値	10			
	04	13.1	16.5	6.269	(E)	6.31			
	05	7.1	55.8	6.143	平均値	10			
	06	15.1	16.5	6.269	(n)	53.37			
	07	13.1	57.8	6.269	試料値(10)	11.20			
	08	2.1	12.8	6.225	(n)				
	09	7.1	55.7	6.269	試料値(11)	6.89			
	10					信頼係数	106.15		
					(E)				
SK 2 9 B	01	9.5	23.1	6.261	試料値				
	02	6.1	16.1	6.432	(n)	10			
	03	6.1	22.5	6.254	平均値	10			
	04	6.1	22.5	6.254	(E)	-2.48			
	05	6.1	22.5	6.254	平均値	10			
	06	9.5	33.1	6.218	(n)	53.84			
	07	6.1	16.1	6.218	試料値(10)	6.41			
	08	9.5	33.1	6.218	(n)				
	09	2.3	21.1	6.260	試料値(11)	1.57			
	10	11.2	22.4	6.254	(n)				
					信頼係数	844.28			
					(E)				
SK 9 6	01	9.5	31.1	6.268	試料値				
	02	6.1	21.1	6.269	(n)	10			
	03	11.2	16.1	6.211	平均値	10			
	04	6.1	34.8	6.188	(E)	-5.46			
	05	11.2	16.1	6.211	平均値	10			
	06	11.2	16.1	6.211	(n)	51.78			
	07	11.2	16.1	6.211	試料値(10)	4.74			
	08	6.1	34.8	6.211	(n)				
	09	6.1	34.8	6.211	試料値(11)	2.82			
	10	11.2	16.1	6.211	(n)				
					信頼係数	272.21			
					(E)				
SK 1 0 3	01	9.5	83.1	6.139	試料値				
	02	7.1	66.8	6.211	(n)	16			
	03	11.2	31.1	6.211	平均値	10			
	04	11.2	31.1	6.211	(E)	-5.16			
	05	11.2	31.1	6.211	平均値	10			
	06	9.5	53.8	6.195	(n)	53.56			
	07	9.5	53.8	6.195	試料値(10)	4.11			
	08	9.5	53.8	6.195	(n)				
	09	14.1	26.7	6.244	試料値(11)	2.44			
	10	11	49.1	6.211	(n)				
					信頼係数	233.85			
					(E)				
SK 1 0 4	01	11.2	31.1	6.208	計算磁化	試料値			
	02	11.2	31.1	6.208	(n)	6			
	03	11.2	31.1	6.208	平均値	10			
	04	11.2	31.1	6.208	(E)	-2.62			
	05	11.2	31.1	6.208	平均値	10			
	06	11.2	31.1	6.208	(n)	54.47			
	07	11.2	31.1	6.208	試料値(10)	1.38			
	08	11.2	31.1	6.208	(n)				
	09	11.2	31.1	6.208	試料値(11)	1.14			
	10					信頼係数	230.48		
					(E)				
SK 1 2 1	01	9.5	25.2	6.227	試料値				
	02	11.2	16.1	6.211	(n)	9			
	03	11.2	16.1	6.211	平均値	10			
	04	11.2	16.1	6.211	(E)	-2.89			
	05	11.2	16.1	6.211	平均値	10			
	06	11.2	16.1	6.211	(n)	54.05			
	07	11.2	16.1	6.211	試料値(10)	5.18			
	08	11.2	16.1	6.211	(n)				
	09	11.2	16.1	6.211	試料値(11)	3.16			
	10					信頼係数	166.11		
					(E)				
SK 1 2 5	01	9.5	31.1	6.248	試料値				
	02	7.1	21.2	6.227	(n)	7			
	03	11.2	16.1	6.211	平均値	10			
	04	7.1	31.2	6.227	(E)	-3.92			
	05	7.1	31.2	6.227	平均値	10			
	06	7.1	31.2	6.227	(n)	53.10			
	07	7.1	31.2	6.227	試料値(10)	6.22			
	08	7.1	31.2	6.227	(n)				
	09	7.1	31.2	6.227	試料値(11)	3.39			
	10					信頼係数	126.54		
					(E)				
SK 1 2 6	01	11.2	16.1	6.211	計算磁化	試料値			
	02	11.2	16.1	6.211	(n)	6			
	03	11.2	16.1	6.211	平均値	10			
	04	11.2	16.1	6.211	(E)	-1.18			
	05	11.2	16.1	6.211	平均値	10			
	06	11.2	16.1	6.211	(n)	51.04			
	07	11.2	16.1	6.211	試料値(10)	8.78			
	08	11.2	16.1	6.211	(n)				
	09	11.2	16.1	6.211	試料値(11)	5.52			
	10					信頼係数	148.01		
					(E)				
SK 1 2 7	01	9.5	29.2	6.238	試料値				
	02	11.2	16.1	6.211	(n)	10			
	03	11.2	16.1	6.211	平均値	10			
	04	11.2	16.1	6.211	(E)	-4.44			
	05	11.2	16.1	6.211	平均値	10			
	06	11.2	16.1	6.211	(n)	50.81			
	07	11.2	16.1	6.211	試料値(10)	2.39			
	08	11.2	16.1	6.211	(n)				
	09	11.2	16.1	6.211	試料値(11)	1.90			
	10					信頼係数	648.78		
					(E)				
SK 1 2 8	01	9.5	34.7	6.409	試料値				
	02	11.2	16.1	6.211	(n)	11			
	03	11.2	16.1	6.211	平均値	10			
	04	11.2	16.1	6.211	(E)	-5.88			
	05	11.2	16.1	6.211	平均値	10			
	06	11.2	16.1	6.211	(n)	52.25			
	07	11.2	16.1	6.211	試料値(10)	3.36			
	08	11.2	16.1	6.211	(n)				
	09								

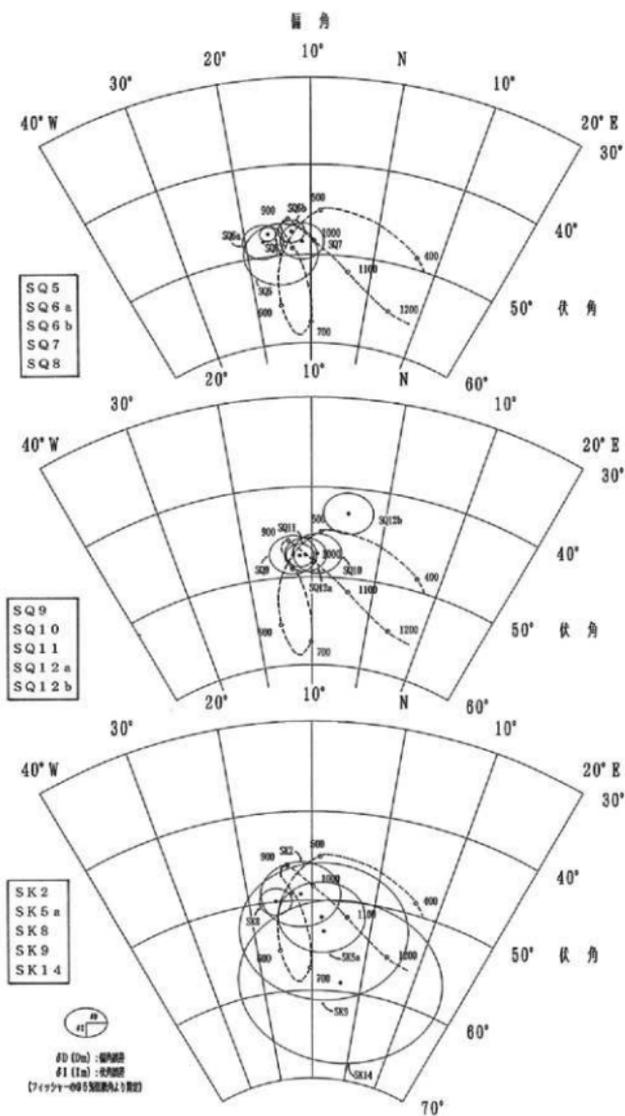


図1. 永年変化曲線(広岡, 1977)と各登窯(SQ)と土壌(SK)の平均磁化方位  
(楕円は誤差角)

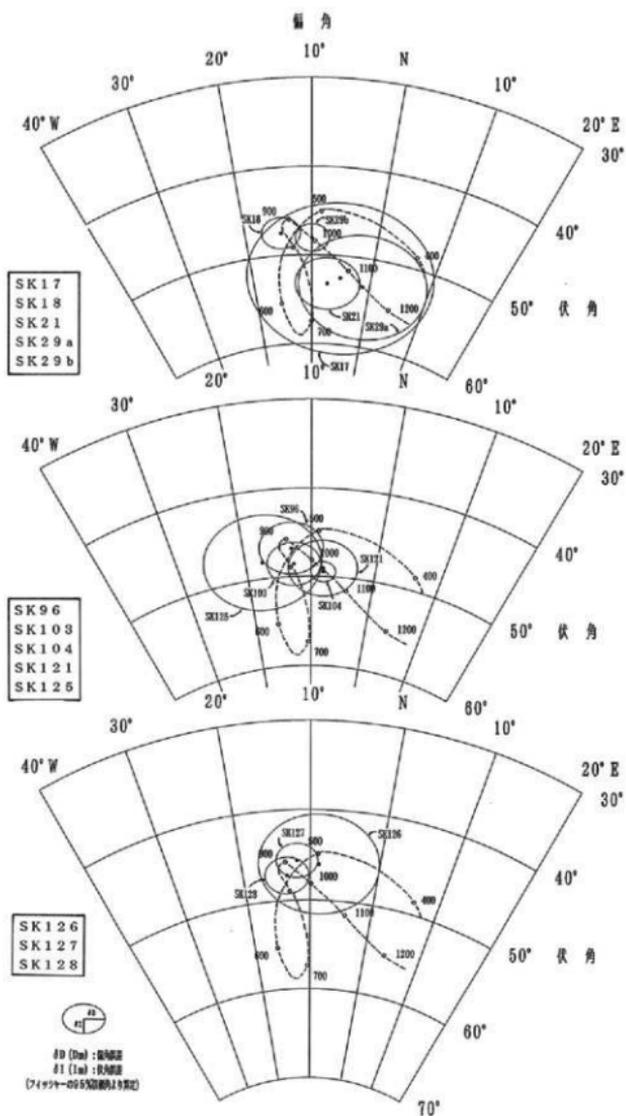


図2. 永年変化曲線 (広岡, 1977) と各土壌 (SK) の平均磁化方位 (精円は誤差角)

## 2. 試料採取および熱残留磁化測定

考古地磁気による年代推定は、1) 測定用試料の採取、2) 熱残留磁化測定およびデータ解析を行い、地磁気永年変化の標準曲線（広岡、1977）との比較を行い、登窯や土壌の焼かれた時の年代を推定するものである。土壌焼土の多くは赤色のやや軟質な焼土層であるが、登窯は高温で焼かれたことを示す淡青灰色の硬い還元層を残している。各遺構ごとに、瓦用ハンマーや鉄製ヘラを用いて、周囲状に溝を掘り、石膏を用いて方位を測定する基準面を作り、固まった後、その面の最大傾斜の方位および傾斜角を磁気コンパスで測定する。さらに、持ち帰った試料はダイヤモンド・カッターを用いて一辺3.5cmの立方体に切断し、熱残留磁化測定用試料とする。

採取した試料は、登窯が10基102試料、土壌が18基181試料である。このうち試料整形の際破損した試料があり、最終的に熱残留磁化測定用試料は、登窯は10基97試料、土壌は18基155試料である。

これら試料は、リング・コア型スピナー磁気計（SMM-85：朝夏原技研製）を用いて、残留磁化方位を測定する。測定値は、集団から大きく外れる試料を除いた後統計計算を行い、各遺構の平均伏角・偏角および統計誤差などを求める（表1および2）。さらに、これらはシュミット・ネット図に標準曲線とともにプロットする（図1および2）。なお、偏角は、建設省国土地理院の1980年の磁気偏角図から読み取った7.5°Wを用いて補正した。また、緯度は標準曲線を作成した京都と酒田では約5度の違いがあり、焼成当時においても同程度の差があったものと考え、伏角を5度浅く補正した。以上のようにして得た結果を、各遺構を代表する考古地磁気データとする。

## 5. 考古地磁気年代測定

焼成時の年代推定は、統計計算および補正後の平均偏角・伏角値と標準曲線との比較により行うが、実際には、各測定点（中心値）が標準曲線に対して距離的に近い点（複数）を中心年代値とし、その点に移動したときに標準曲線と測定誤差楕円とが交わるときの幅が年代誤差である。このことは、この誤差内であればどの年代値であってもよいと示すことを示す。

各遺構の推定される年代値は表3のようになる。なお、カッコ内の年代値は、考古地磁気から推定される年代値のうち、考古年代（9世紀後半～10世紀初め）とは調和しない年代値である。

これを見ると、登窯のSQ6b、SQ7、SQ9、SQ10、SQ11、SQ12a、SQ12bや土壌のSK18、SK127、SK128は、測定誤差は考古地磁気的にはかなり小さく良い試料であるが、標準曲線上の動きの小さい、しかも800～1000年の小さなカーブに接近しているため、推定される年代誤差（年代幅）は大きくなっている。

また、測定誤差の小さい登窯や土壌の標準曲線との位置関係を見ると、伏角の中心値が900年より深い位置に集中する傾向があり（すなわち推定年代値が古くなる）、地磁気永年

変化の地域差が十分予想される（広岡、1991；広岡他、1983；中島他、1989）。このことは、先の1次調査の結果でも見られる傾向である。

表3 山海窯跡群における各遺構の考古地磁気推定年代

遺構番号	考古地磁気推定年代	遺構番号	考古地磁気推定年代
SQ 5	790 <sup>+110</sup> <sub>-80</sub> (550±30)	SK 1 4	推定不能 (傾差が大きい)
SQ 6 a	850±50 (550±20)	SK 1 7	推定不能 (傾差が大きい)
SQ 6 b	840±40 (530±15, 940±30)	SK 1 8	850 <sup>+100</sup> <sub>-150</sub> (550±20)
SQ 7	800 <sup>+90</sup> <sub>-120</sub> (530±20, 970 <sup>+10</sup> <sub>-120</sub> )	SK 2 1	該当なし (740±25, 1090±60)
SQ 8	860±20	SK 2 9 a	該当なし (1140±110)
SQ 9	870 <sup>+130</sup> <sub>-90</sub> (530±20)	SK 2 9 b	790 <sup>+80</sup> <sub>-15</sub> (520±15, 990±40)
SQ 1 0	800 <sup>+70</sup> <sub>-30</sub> (520 <sup>+20</sup> <sub>-10</sub> , 1000 <sup>+10</sup> <sub>-70</sub> )	SK 9 6	930 <sup>+90</sup> <sub>-120</sub> (525±25)
SQ 1 1	830 <sup>+50</sup> <sub>-30</sub> (530±15, 960±40)	SK 1 0 3	810 <sup>+90</sup> <sub>-40</sub> (540±25, 960±60)
SQ 1 2 a	820 <sup>+80</sup> <sub>-10</sub> (530±20, 970±50)	SK 1 0 4	該当なし (1030±20)
SQ 1 2 b	該当なし (470±15)	SK 1 2 1	760 <sup>+70</sup> <sub>-30</sub> (1080 <sup>+80</sup> <sub>-90</sub> )
SK 2	790 <sup>+110</sup> <sub>-80</sub> (540±35, 980 <sup>+90</sup> <sub>-120</sub> )	SK 1 2 5	850 <sup>+200</sup> <sub>-100</sub> (550±50)
SK 5 a	760 <sup>+50</sup> <sub>-40</sub> (550±40, 1050 <sup>+70</sup> <sub>-90</sub> )	SK 1 2 6	980±130 (510 <sup>+50</sup> <sub>-40</sub> )
SK 8	800 <sup>+80</sup> <sub>-20</sub> (550±20)	SK 1 2 7	920±70 (520±20)
SK 9	推定不能 (傾差が大きい)	SK 1 2 8	840 <sup>+100</sup> <sub>-30</sub> (530±20)

(SQ: 竪窯, SK: 土甕)

#### 4. おわりに

今回、10基の登窯および18基の土甕について考古地磁気による年代推定を行った。比較的測定誤差の小さい登窯や土甕の一部については、緯度あるいは偏角について補正したにもかかわらず標準曲線とはずれる傾向が見られた。今後、こうしたデータが集まれば推定年代値の精度も向上するものと考えられる。

#### 引用文献

- 広岡公夫、1977：考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向、第四紀研究、15、p200—203。  
 広岡公夫、1991：考古地磁気永年変化の地域差、日本文化財科学会第8回大会・研究発表要旨集、p45—46。  
 広岡公夫・中島正志・夏原信義・牧野智志恵・酒井英男（1983）：札幌古窯址群の考古地磁気、札幌、大谷女子大学資料館報告書10冊、p67—79。  
 中島正志・谷崎有里・林 昌代・夏原信義（1989）：牛頭ハセムシ窯跡群の考古地磁気推定年代、牛頭Ⅱ、大谷女子大学資料館報告書23冊、p126—136。  
 藤根 久（1991）：附編—2、山海窯跡群における考古地磁気年代測定、山谷新田遺跡・山海窯跡群発掘調査報告書、p15—23。

---

山形県埋蔵文化財調査報告書第172集

さん かい  
山海窯跡群第2次

やま だて  
山楯7・8遺跡

やま だて  
山楯楯跡

国営農地開発事業島海南麓地区(2)

平成4年3月25日発行

発行 山形県教育委員会

印刷 藤庄印刷株式会社

---